

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

渡 辺 雅 子

はじめに

本稿では、日本の新宗教である立正佼成会（以下、佼成会）のインド（デリー）での展開について跡付けることを目的とする。筆者は日系新宗教の異文化布教について、まず、ブラジルにおける日系新宗教の展開に関する事例研究を行い、その展開を規定する要因について、複数の新宗教を扱って考察した。つまり、異なる種が同じ土壌（国）にまかれた時にその展開を規定するものは何かという視点である。その後、同じ種が異なる土壌にまかれた時にその展開を規定するものは何かという逆の視点から、日本の新宗教の一つである佼成会を対象教団として扱い、これまでアメリカ、ブラジル、韓国、台湾、モンゴル、バングラデシュ、スリランカ、インドで調査を重ねてきた。今回は佼成会のインド布教のうちデリーでの布教展開を対象とする。

佼成会は、庭野日敬（1906-1999、開祖）と長沼妙佼（1889-1957、脇祖）によって霊友会から分派して1938年に東京都で設立された法華系の新宗教教団である。庭野日敬は生前の1991年に法燈継承式を行い、現在の会長は庭野日敬の長男の庭野日鑛（1938年生）で、次代会長は日鑛の長女の庭野光祥（1968年生）となっている。教団の公称会員数は2,283,023人（『宗教年鑑』令和2年版）、教団ホームページによると2022年1月1日現在、約102万世帯である。

本尊は久遠実成大恩教主釈迦牟尼世尊で、法華三部経を所依の經典とし、夫方・妻方（父方・母方）の双系の先祖供養と心の切り替えによる人格完成を目的として、菩薩道の実践を行う教団である。基本信行として、①供養（經典読

誦), ②導き(布教)・手どり(会員の育成)・法座, ③法の習学がある。「自分が変われば相手も変わる」とまず自分から変わっていくこと, それによって状況が変化することは重要な教えである。また, 庭野日鑿は家庭を齊(ととの)えること, すなわち「齊家(せいか)」を提唱し, そのための三つの実践として, 「家庭で朝のあいさつをする」, 「人から呼ばれたらハイとはっきり返事をする」, 「履物を脱いだらそろえる」を推奨する。社会の最小単位としての家庭を齊え, そして地域社会, 国, 世界へと同心円的な広がりをもつという考え方を展開している。また, 煩惱, 執着を超越させる「まず人さま」の精神も強調されている。

1 佼成会の海外布教の概観

(1) 佼成会の海外拠点の概況

佼成会の拠点が存在するのは17の国と1地域(台湾)である。17カ国とは, アメリカ, カナダ, ブラジル, ロシア, モンゴル, 韓国, 中国, タイ, カンボジア, シンガポール, ネパール, バングラデシュ, インド, スリランカ, イタリア, フランス, イギリスである。教会数は12教会で, アメリカ5教会(ニューヨーク, オクラホマ, サンフランシスコ, ロサンゼルス, ハワイ), ブラジル, 韓国, 台湾2教会(台北, 台南), タイ, バングラデシュ, スリランカにある。拠点数は2つの国際伝道センターと57拠点で, アメリカのロサンゼルスに北米国際伝道センター, タイのバンコクに南アジア国際伝道センターがある。

佼成会の海外布教は長らく必ずしも積極的であるとはいえなかった。一方の柱として宗教協力(世界宗教者平和会議 WCRP)があるので, 現地での宗教的摩擦を避けようという傾向性もあった。海外布教はアメリカ, ブラジルの日本人, 日系人が多い地域での会員の世話から始まった。教団による組織的な布教というより, 個別の縁をたどっての布教である。佼成会の海外布教は, 1950

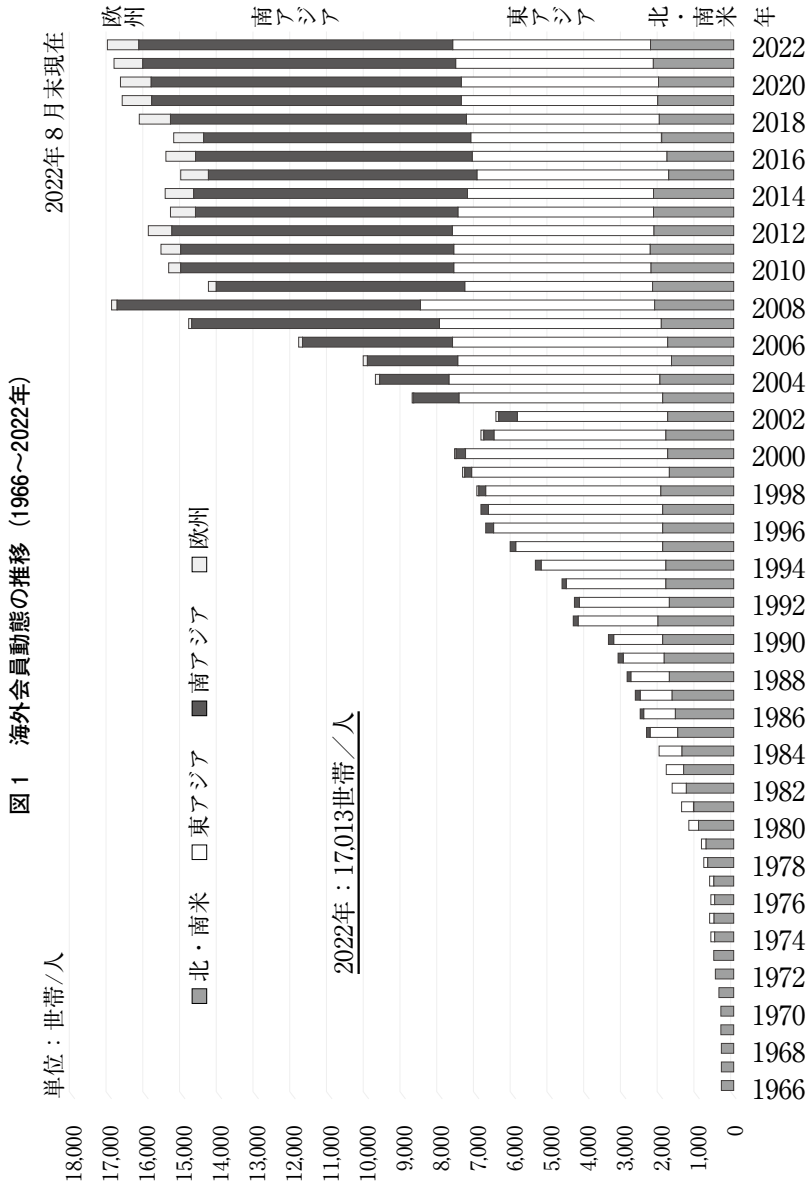
年代後半から、日本人・日系人の多いアメリカ、ブラジルから始まり、1970年代には台湾、韓国、1980年代はタイ、1990年代はスリランカ、バングラデシュ、ネパール、2000年代はインドへと展開した。すなわち南北アメリカから東アジアへそして南アジアへと展開していったのである。ターニングポイントは1990年代で、日本や外国で佼成会を知った人が自国で布教を行うといった「現地人による現地人布教」が標榜された。2004年12月には、タイ、スリランカ、バングラデシュ、インド、ネパールを統括する南アジア教会が設立された。2007年12月には、バンコク教会、バングラデシュ教会の設立によって、南アジア教会から南アジア伝道区となった。スリランカ教会の設立は2009年12月である。

南アジアにおける拠点についてみると、タイには南アジア国際伝道センターとバンコク教会があり、教会が設立されているバングラデシュでは12拠点（バングラデシュ教会管轄）、スリランカには2拠点（スリランカ教会管轄）ある。南アジア伝道区直轄拠点として、インド（5拠点）は、デリー支部、コルカタ支部のほか、コルカタ北法座、ブッダガヤ法座、パトナ法座があるが、これらの法座はコルカタ支部管轄である。ネパールはカトマンズ支部（1拠点）、カンボジアはプノンペン法座（1拠点）、シンガポールはシンガポール法座（1拠点）がある。

図1は海外会員動態数の推移の棒グラフである。北・南米から布教は始まったが、1980年以降はほぼ横ばい、東アジアは1970年代から増加していくが2000年以降はほぼ横ばい、南アジアは2000年代半ばから急増し、現在はその伸びは落ち着いている。わずかであるが欧州にも会員がいる。

（2）海外布教担当部署の変遷

海外布教の担当部署の変遷をみると、1970年代に入り専門的な部署として国際課が置かれた。その後は国際室や海外布教区等をへて、1987年12月に教務部海外布教課となり、2001年12月教務部海外布教グループ（教団全体の組織改編。



それまでの部課制から部グループ制へ。これにともない、役職も部課長から部長次制採用)となったが、教務部の中でも小さい部署であった。そして、2003年12月に教務部国際伝道グループとなった。「海外布教」という名称から「国際伝道」という名称に変わったのは、従来の海外布教を担当することに加えて、「立正佼成会国際仏教教会(IBC) International Buddhist Congregation of Rissho Kosei-kai」という在日外国人のための教会を包含するものとして組織改編されたからである。2004年12月に庭野日鑛会長がブラジルを訪問し、翌2005年1月に世界布教に言及したことも影響しているが、2006年12月に国際伝道本部に昇格した。国際伝道本部からは予算が拡大し、スタッフも増員され、海外に対する支援体制も整えられ、海外布教について積極的な姿勢がみられるようになった。その後2008年12月には教務局国際伝道本部、2011年12月に教務局国際伝道本部国際伝道グループ、2015年12月には国際伝道部国際伝道グループとなっている(組織的名称は変遷するが、以下、国伝と略記する場合がある)。

2004年12月に設立された南アジア教会は、事務拠点としては本部施設内にある国伝の隣の部屋に置かれた。2007年12月に南アジア伝道区となってからも2009年11月までは同所にあり、バンコク教会の施設が拡充された2010年1月に、拠点はタイのバンコクに移動した。

2 南アジア布教とインド布教

(1) 南アジア布教におけるインドの位置づけと時代背景

バンコク教会の敷地内に2009年3月から宿泊施設も兼ねた南アジア国際伝道センター建設が着工され、2010年1月には庭野日鑛会長を迎えて落慶法要が行われた。南アジア伝道区の事務拠点が置かれ、研修宿泊施設もあり、南アジアでの本部勧請本尊の授与式やセミナーなどが行われている。南アジアには、タイのバンコク教会、バングラデシュ教会、スリランカ教会の三つの教会のほか、

南アジア伝道区直轄拠点のネパール、インド、シンガポール、カンボジアが属している。タイとシンガポールは日本人から始まったが、他は現地人の入会から始まり、会員はほぼ100%現地人である。

2004年12月に南アジア教会が設立され、齋藤光央（1944年生）が教会長に就任した。当時はタイ、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、インドの5カ国を包括するものだった。2007年12月には南アジア教会の拠点から、バンコク教会とバングラデシュ教会が誕生した。それに伴い南アジア伝道区になり、初代伝道区長に齋藤が就任した（2007年12月～2009年11月）。その後、長谷川泰弘（2009年12月～2011年11月、バンコク教会長兼務）、有富教順（2011年12月～2012年11月、バングラデシュ教会長兼務）、水谷庄宏（2012年12月～2022年11月、バンコク教会長兼務）が歴任した。南アジア国際伝道センターが設立されてからは、センター長は、長谷川泰弘（2009年12月～2011年11月）、有富教順（2011年12月～2012年11月）、笹川佳央（2012年12月～2015年11月、バンコク教会長2011年12月～2016年11月）、鳥村雅俊（2015年12月～現在）である。

鳥村は2008年に南アジア伝道区教務員（主にスリランカ担当）、2009年国際伝道本部スタッフをへて、2010年に南アジア伝道区教務員（バンコク駐在）になってからインドを含む南アジア全域を担当し、2014年から国際伝道グループ次長（南アジア担当・南アジア伝道区直轄拠点教会長兼務）となり、2015年から現在まで南アジア国際伝道センター長兼南アジア直轄拠点教会長を兼務している。

南アジアの布教の歴史を簡単に述べると、タイは日本人移住者黒川佳代子を中心になって布教を始め、1982年にバンコク連絡所となり、1994年に支部に昇格し、2007年にバンコク教会になった。文字通りの南アジアに属する国は、インド、バングラデシュ、スリランカ、ネパールである。これらのうち、最も早く拠点が開設されたのは、ネパールであった。ネパールは、1991年10月に第4回アジア宗教者平和会議（ACRP）カトマンズ大会時に関口泰由（当時新宿教

会所属の会員、現清水教会長）がサイレンドラ・バジラチャリア（1966年生、男）を導いたことに始まる。1995年11月にネパール連絡所が設立され、2005年12月には支部に昇格した。スリランカは、内乱を避け日本に働きに来ていたスリランカ人のエドワード・ガミニ・チャンドラセケラ（1952年生、男）が、1991年に神奈川県の大和教会で入会した。1993年に帰国後布教を開始したもので、1998年5月にスリランカ連絡所が設立され、2005年12月に支部に昇格、2009年12月に教会に昇格し、日本人教会長（山本宜亮）が派遣された。バングラデシュは、1981年に北九州教区西南アジア開発支援国の団長達だった大分教会長の飯澤一雅が、現地のホテルで働いていたビマン・クマール・バルア（1954年生、男）と出会ったことがきっかけである。ビマンは飯澤を訪ねて1984年と1985年に来日、大分教会で入会したが、その後関係はとだえた。1995年に仕事の関係で来日したビマンは佐賀教会で再入会し、帰国後布教したもので、1998年12月にバングラデシュ連絡所ができ、2002年12月に支部に昇格、2007年12月に教会になり、日本人教会長（有富教順）が派遣された。

すなわち、インドはネパール、スリランカ、バングラデシュに次いで開設された拠点であり、南アジアにおいて次々に拠点としての連絡所が設置された流れのなかにあるといえよう。これらの国の布教推進にあたって、初期は（南アジア教会設立以前）ネパールは新宿教会（東京都）、スリランカは松戸教会（千葉県）、調布協会（東京都）、バングラデシュは北九州支教区、インドは板橋教会（東京都）といった個別教会・支教区の支援があった。

（2）インドにおける各拠点の特徴

インドに初めて連絡所が置かれたのはデリー（インドの首都）で、2002年7月にインド連絡所（デリー・ダルマセンター DDC）が開所した。2022年時点、インドには拠点として、デリー支部、コルカタ支部（西ベンガル州の州都、旧カルカッタ）、コルカタ北法座、ブッダガヤ法座（ビハール州ガヤ県）、パトナ

法座（ビハール州の州都）がある。コルカタ支部の下に他の法座が属している。

インドにおいて、デリー、コルカタ、ブッダガヤ・パトナは、各々が異なる特徴をもって展開した。布教の経緯も異なり、受容層も異なっている。なお、佼成会では入会しても従来の宗教からの改宗はもとめない。宗教的背景としては、デリーはヒンドゥー教徒、シーク教徒である。コルカタには少数のヒンドゥー教徒はいるが、主体はバルア仏教徒である。これはベンガル仏教徒とも言われ、ほとんどがバルア姓の伝統的な上座部仏教徒である（仏教徒なのでインドではアウトカーストの扱い）。コルカタとバングラデシュとは元々ベンガル地方として人の行き来があり、コルカタの佼成会はバングラデシュからの流れである⁽¹⁾。言語においても同じベンガル語である。ブッダガヤとパトナは、ダリットと言われるカースト制度の最下層の不可触民が、カースト制度からのがれるためにヒンドゥー教から仏教に改宗した、新仏教徒といわれる人々によって構成されている。ブッダガヤ（地域区分としてはガヤ）は、コルカタ訪問中に佼成会を偶然訪ねて入会した青年がガヤで布教したもので、パトナもインド仏教協議会にかかわっていたその青年からパトナ在住者が導かれて入会したことがきっかけである。インドには人口の0.7%の仏教徒がいるが、そのうち87%が新仏教徒である。なお、ブッダガヤおよびパトナは全員が新仏教徒である。背景の宗教の相違とともに、言語の点ではコルカタはベンガル語、デリーとブッダガヤ・パトナはヒンディー語となる。

入会動機についてはデリーの場合、青年は日本語への関心、日系企業で働きたい、日本で働く機会を得たいというのが強い動機で、大人の場合は日本語への関心もあるが、日本やあるいは南アジアでの研修施設があるタイに旅行する機会を得たいという動機が多かったようである⁽²⁾。コルカタでは生活仏教への関心、ガヤ・パトナでは自分の代で仏教徒に改宗した新仏教徒ではあるものの仏教について学ぶ機会が少ないので、仏教の教えに対する関心があるという点でも異なっている。

コルカタはシュモン・バルア（1974年生，男）という人材を得，またガヤ・パトナでも着実に布教が展開している。それに比べ，デリーの場合は，インドで初めての入会者が出た場所で，活況を呈した時期もあったが，後述するように一粒種といわれる最初の入会者の抱える問題が多く，またリーダー層も育成されず，結局はデリー・ダルマセンター（DDC）は消滅し，そこから分かれた西デリー法座も現在ではその内実はなく，西デリー法座から分派した少人数の構成者からなる中央デリー法座だけがデリー支部として残っているのみである。

もともとはインドの全地点（デリー，コルカタ，ガヤ・パトナ）を包括するかたちでインドの佼成会の展開過程について書くつもりであった。筆者は2013年にインドで調査を行ったが，デリーを訪問した時には末期的ではあったがDDCが存在し，西デリー法座もあった。しかしその後，デリーでは大きな転換点を迎えることになる。本稿では，佼成会のデリーでの展開に焦点をあて，他地域については別の機会にゆだねることとする。デリーについては今後新しい展開がなされると思われるが，本稿はある意味でなぜ布教がうまくいかなかったのかという事例研究でもある。コルカタやガヤ・パトナはかなり着実な歩みをみせているにもかかわらず，デリーはなぜこのような展開になったのかも含め，記録として残しておく意義があると思われる。他地域では個人に対するインテンシブな聞き取り調査が可能であったのに対して，デリーの場合，状況的に難しかった⁽³⁾。本稿は，デリーでの佼成会の展開過程について，初期から今日まで20年余の展開とそれを規定した要因を，様々な資料を探索し，読み込み，またデリー布教の関係者からの追加の聞き取りによって明らかにしようとするものである。

デリーの各拠点の会員世帯数については，どの程度実態を反映しているのか疑問に思われる点もあり，また退会者の整理もされていないので信憑性に欠けると判断した。そのため機関紙誌や出張報告書等に記載されている数値を個別に示すのにとどめている。

なお、本稿末に詳細な年表が掲げられているので、適宜参照されたい。

3 一粒種の入会と初期布教

(1) サクセナの属性と入会の経緯

インド布教の「一粒種」になったのはプラディープ・サクセナ(1958-2021, 男, 以下, サクセナと記載)である。サクセナの語るところによると, サクセナはデリー生まれで, デリー大学(理学部)を卒業, ジャイプールのラジャスターン大学の修士課程(経済)を修了した。その後, アメリカのニューヨークに3年, インドの本綿の衣類製造会社に勤務, 帰国後日本経済新聞社ニューデリー支局で働いた。日本語を学ぶきっかけになったのは両親が1975年に日本に観光旅行に行き, 日本と日本人の印象がよかったので, 日本語の学習をサクセナに勧めたことによる。将来日本語ができると便利と思い, 19歳から21歳までの3年間ネルー大学で週2回(週4時間)日本語を学んだ。アメリカ行きで日本語をだいぶ忘れたので, 帰国後, 国際交流基金の日本文化センターで週に2回, 3年間日本語を勉強した。日本経済新聞社のあと旅行会社に入社し, 日本人旅行者のガイドの仕事を始めた⁽⁴⁾。

日本人の仏跡参拝のガイドをしているうちに, なぜ日本人はインドの神である仏陀(ヒンドゥー教では仏陀は神々のうちの一人)に祈っているのか, なぜ関心をもっているのかということに興味をもつようになり, 仏教に関心をもった。1997年3月頃⁽⁵⁾に, ヤナセ(自動車輸入の最大手企業。輸入車及び中古車の販売)の社長に随行して仏跡参拝に訪れた藤井城と出会った。その後, 藤井とは連絡をとっていたが, 2000年に旅行会社の営業のために訪日したサクセナは, 日本経済新聞社を訪問後, 大手町にあった藤井のオフィスを訪ねた。藤井は当時ヤナセをやめ転職し, 父の会社である葬儀社の博善(神田博善)に勤めていた⁽⁶⁾。「仏教のことに関心があるのですが, どうしたらよいでしょうか」

という問いかけに対して、藤井は佼成会を紹介した。パソコンから佼成会本部の地図を取り出し、渉外課の根本昌廣に電話で連絡をとってくれた。藤井は同行できなかったので、サクセナは地図をたよりに佼成会を尋ねた。2000年⁽⁷⁾8月3日のことで、本部を案内してもらい入会の意志を示した。

2000年12月21日に教会長の仏跡参拝に同行した海外布教課課長の長谷川泰弘は、サクセナ宅を尋ね、総戒名（海外用に本尊像の写真と総戒名、宅地因縁戒名がセットになったもの、写真10参照）の祀り込みを行い、サクセナは入会した。その時、おたすき、数珠、経典を長谷川からもらった。なお、「祀り込み」とは、神入れ（開眼）された総戒名や宅地因縁戒名等を所定の読経供養を通して宝前（仏壇）に安置することである。

サクセナは南アジアの「一粒種」の中でも、とくに期待を担った部分があった。第一に、仏教の発祥の地であるインドからの入会者であること、第二に、サクセナが藤井（佼成会の会員ではない）からの紹介による入会であったことである。1999年10月に教団の創立者の庭野日敬が逝去し、開祖葬が行われたが、その遺体をのせた霊柩車の運転手が藤井だった。これによって「開祖さまがお引き合わせをした」、「開祖さまの最後のお導き」という言説によって、サクセナの立ち位置に大きな影響を与えた。初めからサクセナに対する期待は大きかったわけである。藤井は前年の開祖葬との関係で佼成会とつながりができ、その関係でサクセナを佼成会に紹介したものと思われる。（なお、のちにサクセナによる入会動機についての説明に虚偽の部分があることがわかるが、実際の道筋と了解されていたものをここでは記述した。）

サクセナが入会したのは、佼成会のアメリカ布教の行き詰まりが明確になり、東アジアの会員数もほぼ横ばいになって、南アジア布教に本部が期待をかけていた時期であった。南アジアの中での大国で、釈迦の生誕地であるインドの会員ができたこと、インドでは仏教が衰退しているが、そこに新たに佼成会という仏教が入っていくことへの期待、そして庭野日敬の遺体の棺を運んだ霊柩車

の運転手が紹介者だったということでポジティブな縁を感じたわけである。

2001年1月に長谷川課長がデリーのサクセナを尋ねた。その報告書に、「現在、インドにおいて会員が増えつつあり、入会希望者が25名いる。定期的に集会を開き、經典読誦などを行っている。近い将来、法華経をヒンディー語訳し、カースト制において低い身分とされる人々にも法華経を広めたいという希望がある。3月には勉強のために来日、2週間ほど滞在する」と記されている。

2001年3月18日～29日にかけて、サクセナは本部で研修を受講（渡航費半額補助）し、板橋教会（杉原のりよ教会長）で4日間布教実習した。2001年4月13日付の佼成新聞には、「布教に励むアジアの仲間：インド／バングラデシュ」というタイトルで「近年、本会の南西アジアでの布教が活発だ。中でもバングラデシュ、インド両国の教勢の伸びが著しい。……インドではヒンズー教徒が人口の8割を占める。インドでは昨年末に一粒種の会員が誕生し、先月下旬、本部を訪れ研修に臨んだ。在インド会員のプラディープ・サクセナさん(42)が、3月18日から29日までの12日間、本部ならびに板橋教会で研修と布教実習に取り組んだ。サクセナさんの入会は昨年12月。観光ガイドの仕事で仏跡を案内しているうちに仏教に関心を抱いたことがきっかけだった。サクセナさんは日本人の友人の紹介で本会本部を訪問。仏教と本会にひかれていった。帰国後は早速布教に歩き始めた。現在、インドの会員は4世帯。しかし既に中部の大都市・デリーを中心に51家がお祀り込みを待っている状態だという。今回の研修の目的は、『仏教と本会について理解を深め、現地での布教と組織運営の方法を学ぶ』こと。儀礼儀式などについて本部で研修を受けたあと、板橋教会で手どり修行やお祀り込みなどを体験した。研修を終えたサクセナさんは、『戻ったら待っている仲間の家を回ってお祀り込みをさせていただきます。ブツダの教えをインド中に広めていきたい』と目を輝かせて決意を語った。」という記事が掲載された。

また、「立正佼成会本部研修を終えて」というサクセナの感想文には、「現在、

インドには4家がお祀り込みを済ませ、立正佼成会の会員として登録されています。また、51家がお祀り込みを待っている状態です。インドで行っている活動は、毎週、土日を利用して、ご供養と法座を家でさせて頂いています。同時に、親戚や友人へのお導き活動も続けています。私には帰国後すぐに始めたいことや夢がたくさんあります。まず、帰ったら、お祀り込みを待っている仲間の家を回って、お祀り込みを無事に終えることです。そして同時に、一人でも多くのインド人にこの教えを伝えさせて頂き、サンガの輪を広げていきたいということです。これは首都デリーに限ったことではなく、親戚や友人などから始めて、いずれはインド全土に広めていきたいということです。私自身の目標として、年内に3,000人（家族単位にすると約1,000家）のメンバーを目指しています。そして、多くのリーダー、教師を作りたいと考えています。一日も早く連絡所として設置して頂き、ゆくゆくは道場を作りたいと考えてもいます。……デリーは大きく分けると、中央、東、西、南、北と5つの地区があるので、いずれは5つの支部を作りたいと思います。今回の研修では、『ブディズム・フォー・トゥデイ』（注：庭野日敬著『法華経の新しい解釈』の英訳本）をはじめ、たくさんの書籍、雑誌を頂きましたので、それらを読み込むことで自身の向上はもとより、学んだことを多くの仲間たちに伝えさせて頂きたいと思います。図書館のように利用して頂ければとも思っています。インドはカースト制度という身分制度がありますが、人間は本来、国が違って、習慣が違って魂は一つであり、みんな平等です。この教えを人々の幸せのために頑張っていきたい。人さまのためにこの身を使わせて頂きたい。現在は、貿易や観光ガイドの仕事をしていますが、いずれはフルタイムで仏道修行をさせて頂きたいと考えています。」⁽⁸⁾

また、海外布教課と渉外課の定例会議録によると、サクセナの印象について「サクセナ氏は、仏教の平等の思想に感銘を受けているようだった。最下位カーストの方々に人間としての尊厳を持っていただくよう光を当て、上位カースト

には平等思想を浸透させていきたいと抱負を述べておられた」, 「ご自身がヒンズー教であることについては, 『私がヒンズー教をやめて仏教徒になることはない。佼成会に感銘を受けたのは, 言うばかりの宗教でなく実際にアクションを起こす宗教団体だから。だからヒンズー教徒として, アクションを継続していきたい』と述べていた」とのことである。

(2) ネパール幹部錬成会での事故

本部研修を終えて帰国して約1カ月後の2001年5月3日～7日にネパールで行われた南西アジア幹部錬成会(島村雅俊布教員・山本宜亮海外布教課スタッフ出張)に, サクセナは初めてインドから参加した(参加旅費の65%を本部が補助)。サクセナ夫妻・息子の家族3名およびインド人会員2名である。元々の参加予定者は3名だったが, サクセナより妻と息子2名追加のリクエストがあった。プログラム終了後, 自由時間にインドの会員5名でヒンドゥー寺院を見に行った時に, タクシーがトラックと衝突, サクセナの妻は足を骨折, 息子も怪我をした。他のインドの会員も怪我をし, サクセナの妻と女性会員の2名が3日間現地病院に入院した。妻ともう一人の女性は全治8カ月の大怪我であった。「80世帯の会員数があったが, 勉強に行ったのにこういうことが起きたということでその時の会員は皆いない」とサクセナは筆者に語っていた。ネパールでの入院代は本部で負担したが, インド帰国後もサクセナや女性会員の夫から治療費の金銭的な支援要求がきた。研修終了後の自由時間の出来事であり, 要望には応じられないとして見舞金を出した。なお, 2013年に筆者がサクセナにインタビューをした時にも, この時のことを語っていた。金銭的要求はサクセナの場合, 非常に強い。

4 デリー・ダルマセンターの開所と板橋教会からの布教支援

(1) デリー・ダルマセンター (DDC) の開所

2002年6月30日に、サクセナは日本の本部での勧請式で拠点用の本尊と自宅用の本尊を拝受した。7月1日には東京都の板橋教会(齊藤光央教会長)、7月2日には千葉県の新井教会(山本宜亮教会長、ネパールでの錬成会時のスタッフ)を訪問した。同年7月7日に海外布教グループ次長長谷川泰弘がインドを訪問し、拠点用本尊を安置し、開所式を行った。ここに、インドにおける初めての拠点であるデリー連絡所が発足した。この時会員世帯数は65世帯であった。サクセナの要望で「デリー・ダルマセンター (Delhi Dharma Center)」(以下、DDC) という名称がつけられた。デリー連絡所では、佼成会が仏教の団体であることが明確にならないという理由による。

サクセナは、DDCとして場所を確保されてからは日本語教室を始めた。これは布教の一つの方便として有効であると思われる。ヒन्दゥー教の社会の中で日本から来た仏教団体に興味をもってもらうために、サクセナは新聞に小さな広告を出し、無料の日本語教室のことを宣伝した。日本語ができるというサクセナの資源を用いてのやり方は戦略的に有意義なことであった。

2002年7月19日付の『佼成新聞』には、「インドに初の布教拠点誕生 釈尊の教えが里帰り／ご法の一粒種・サクセナさんの尽力で」というタイトルのものと、以下の記事が掲載されている。「釈尊の教えが2500年の時を経て里帰り——6月30日、大聖堂で行われた『第5回御本尊勧請式』で、インドの『デリー・ダルマセンター』に布教拠点御本尊が、ご法の一粒種となったプラティーブ・サクセナさん(42)に御本尊が勧請された。御本尊勧請も布教拠点の誕生もインドでは初めてのこと。7月7日には、同センターで『御本尊ご安置式』が行われ、約90人の会員が参加した。サクセナさんが本会に入会したのは、1999年(注：2000年の誤り)12月。観光ガイドをしているうちに、日本人がなぜ仏跡

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真1 DDC外観 (2004年 立正佼成会提供)
中央の建物の4階と半地下部分を賃借していた。



写真2 DDC入口にある看板 (2007年 立正佼成会提供)



写真3 DDC半地下部分の様子 (2004年 立正佼成会提供)
左の机には本部が財政支援して購入したパソコンが見える。奥の階段が入口となる。

に行きたがるのかに関心を持ち、独学で仏教を勉強しはじめたことがきっかけだった。『インドでは残念なことに仏教徒は0.5%ほどしかいません』。仏教をもっと知りたくて、サクセナさんはガイドで知り合った日本人に連絡を取ると、本会を紹介された。その人は開祖葬で庭野開祖の『ご尊体』を運んだ霊柩車の運転手だった。昨年3月には本会を訪問し、研修と布教実習に取り組んだ。『職場や家庭の悩みなどを仲間と共有する法座は、とても素晴らしいと感じました』とサクセナさん。帰国後、すぐに布教に歩き、現在までに65家を導いた。当初、サクセナさんの自宅を拠点に活動していたが、会員が増えたため、ニューデリーにある4階建てビルの最上階と屋上を借り『デリー・ダルマセンター』と名づけた。インドでは身分階級制度が根強く残っているため、教育を受ける機会がほとんどない。そうした人々のためにサクセナさんは、同センターを地域の人々に開放し無料で日本語教室を開いている。日本語の授業が終わると興味がある人に対し、佼成会の教えを伝え、法の種を蒔き続けている。今年6月、サクセナさんは、大聖堂で行われた『御本尊勧請式』に参加。『献血運動や被災地への物資救援など、さまざまな実践を行っていますが、今はデリーだけで活動しています。今後、他の都市にも法の輪が広がっていけるように、精進していきたい』と語った。7日には長谷川泰弘・教務部次長（海外布教グループ）の立ち会いのもと、御本尊ご安置式が挙行された。インドでは、一粒の法の種から多くの花が咲き始めている。』

2002年7月より、ビルの4階の賃貸（～2008年4月まで）が開始され、本部より賃貸費月300ドル、活動費月100ドルの支援が始まった。サクセナはガイドの仕事のかたわら日本語教室を開催した。なお、2003年5月から4階に加えて、半地下も賃貸するようになった。4階の人の出入りでの騒音に関するクレームがあったためである。4階は一般の住宅仕様の3LDKで、リビングルームには30名程度が入ることができた。半地下は100名程度の人員は収容できるが、元々倉庫に使われていたもので、トイレが使用できる状況ではない。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真4 DDC宝前 (2007年 立正佼成会提供)
庭野日敬開祖の写真をはじめ日本の物品類が多数飾られている。



写真5 サクセナ宅宝前 (2007年 立正佼成会提供)
中央に本部勧請の本尊、右に総戒名、左上に宅地因縁戒名、左下に過去帳が祀られている。



写真6 サクセナ家族 (2007年 立正佼成会提供)
左からサクセナ、妻マミタ、息子アンキット。

2003年9月には海外布教グループ次長の鈴木啓太郎が現状を把握し、将来の施策の参考とするためにDDCを訪問した。その時の記録に当時の状況が記されている（基本的にインドの場合は日本からの出張者が行った時には出張記録が残っている）。

2003年6月にデリー政府（デリー特別市団体登録局）に「Rissho Kosei-Kai Society」として正式にデリー政府に登録された。2003年8月末の会員数は290世帯である（DDCの会員動態が計上されるようになるのは2003年2月からである）。主な活動状況として、①導き、手どり、法座、②連絡所での法座：毎週水曜17：00-19：00、毎週土・日14：00、③仏教の歴史、法華経の研修（法座の前に行なう）、④日本語教室：初級は土・日16：00、アドヴァンスは日11：30、⑤貧しい人々のための英語・コンピューター教室（週3回）⁽⁹⁾、⑥デリーや近郊での社会活動（献血、ボランティア）、⑦貧しい人々のための衣類や文房具の贈呈（月2回）が記載されている。財政状況については本部からの支援金⁽¹⁰⁾と板橋教会からの寄付金（後述）で運営してきたが、法人登録されたので会費5ルピーを徴収することになったとのことである。また、活動・組織について、「連絡所の主な活動に見られるように、活動も日本語教室や社会活動、スポーツなど宗教活動以外の行事も多く、会員も青年が多い。組織もそれに伴い、活動を中心にリーダーが決められている。布教組織としては、会員の救護・育成を目的として、スタッフとラインの組織を整えることが必要であろう。拠点長の下に、各部門のスタッフがおり、会員を地域的に分けるかグループに分けて、ラインとしての信仰リーダーを置く体制について説明し、検討をお願いした」とあるが、このような組織はDDCにおいて機能しなかった。こうしたことに慣れていないこともあるが、のちに分かるようにサクセナが独占体制を敷きたかったからである。

この中にも活動としての古着支援があるが、2002年～2004年の間、サクセナのもとに板橋教会からの積極的支援があったことは大きい。サクセナ自身もこ

の時が一番よかったと2013年の筆者とのインタビューで語っている。そこで次に板橋教会からの布教支援の実態についてみておこう。

(2) 板橋教会からのインド布教支援

2001年3月18日から29日まで、サクセナは本部での研修と板橋教会で4日間布教実習を経験した。この時の教会長は杉原のりよ（板橋教会長在任期間1996年12月～2001年12月）で、この時点ではサクセナと板橋教会の関係の展開はみられなかった。

■板橋教会長・齋藤光央とサクセナとの出会い

2002年6月に、サクセナは翌月7月に開所するDDCへの拠点用の本尊勧請とサクセナ宅への家庭用本尊勧請のために来日し、板橋教会を1日だけではあるが訪問した。この時の教会長である齋藤光央（1944年生、板橋教会長在任期間2001年12月～2003年11月）とサクセナとの出会いがきっかけで、板橋教会からの支援が始まった。訪問時に齋藤から1,000ドルがサクセナに渡された。そして、8月からは毎月1,000ドルがサクセナの元に送金されるようになった。また、古着や文房具の支援もサクセナの要望によって行われるようになる。

「インドへの講師派遣（板橋教会）」という2003年に執筆されたと推定されるA4で1枚の文書が本部に残っていた。板橋教会のインド布教に関する考え方として、「海外拠点の中でも現地人が入会するのは稀なことであり、特にインドはお釈迦さまご生誕の地。そこに開祖さまが最後に一粒種をおとされた拠点でもある。他の拠点と比べてもインドは日本人が仏跡参拝の際降りたつ地であり、……他とはそういった意味で違うので、特別にやっていく必要がある。教会にとっても海外と関係をもつということは、青年部を含め全体的に活性化につながる」とある。

2002年～2003年のインドへの板橋教会からの支援物資についてのA4で1枚

の記録も本部に残っていた。DDCは2002年7月に開所したが、板橋教会からは同年8月に古着80着、9月に古着160着、11月に文房具1,000点、12月に古着1,200着、文房具400点、数珠（中古）50個が、2003年には古着2,500着、毛布50枚が送付された。2003年6月にはビデオデッキ、テレビも寄贈された。2002年9月の古着のうち60着が船輸のほかは、インドを訪問した時に一部持参した以外は空輸である。輸送料にも多額の費用がかかった。

板橋教会では呼びかけるとたくさんの古着が集まったという。当時インド支援委員会委員長という役にあった尾島由季子は、「サクセナさんからの導きの報告には皆で喜び驚いていた。私はたいへんな布教を一人で担っているサクセナさんにはどんなにかご苦労があることだろうと日本の感覚で思っていた。サクセナさんの説法で日本語教室を開いて布教しているという話を聞いた時には皆で感心した。古着・毛布などたくさんの寄付が集まったのはサクセナさんを応援したい気持ちもたくさんあってのことだと思う。しかし、インド布教に対する熱というほどのものが教会にあったかどうかは何ともいえない。教会で呼びかけられたものは一生懸命協力するという気質が大きいのではないかと思う」と語っている。彼女の役割は、集まった古着・毛布などの梱包・発送、銀行からインドに送金、涅槃会での募金を募るための説法、涅槃会の時に教会に展示する霊鷲山などの観光ポスターのインド観光センターからの借用、インド布教参加者への連絡、報告書作成、DDCにビデオ・佼成誌の会長法話などの送付、来日時のサクセナらインド会員の受け入れ・世話、現地での通訳・総戒名の祀り込みなどの役割で、委員会とはいえ、インドに関することの窓口はほとんど一人でしていたということである。

■板橋教会インド布教支援ミッション

こうした古着等の支援のほか、実際に板橋教会からインド布教支援ミッションが派遣された。滞在期間は約1週間である。第1回は2002年12月（4名）、

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真7 板橋教会から送付された古着の現地会員による配布（2003年頃 板橋教会提供）



写真8 板橋教会第4回布教支援ミッション・DDCで現地会員と読経（2004年 立正佼成会提供）

右端の男性が有富教順（のちのバングラデシュ教会長）、中央の女性がインド布教支援委員会委員長の尾島由季子。

第2回は2003年2月（7名）、第3回は11月（6名）、第4回は2004年2月（5名）、第5回は3月（3名）、第6回は12月（7名）である。

第1回（2002年12月）は齋藤教会長（男）、支部長、青年部長、インド支援委員会委員長（尾島）の4名が訪問し、支援物資の配布（古着1,500着）、訪問布教・法座（のべ100名参加）。祀り込み・法座（40名参加）、読経供養（150名参加）などが行われた。この時には一泊はホテルに泊まったが、サクセナから高額な請求をされたため、2日目からはDDCの4階の部屋にとまった。2003年1月には、布教支援に行った時に4階で宿泊できるように、毛布34枚、シーツ34枚、枕10個を日本から航空便で送った。

第2回布教支援（2003年2月）は総務部長、支部長、主任、大学部長（小柳和央、男）、女子部リーダー2名、インド支援委員会委員長（尾島）の7名が訪問した。個人宅での祀り込み・法座（8家、うち7家は日本語教室の生徒宅、1家はサクセナの親戚、各20～30名参加）、訪問布教・法座（各回30名程度参加）、盲学校での祀り込み・法座・支援物資の配布（40名参加）、シュードラ地区における支援物資の配布（古着1,500着）、涅槃会式典（140名参加）が実施された。サイババ寺院前での支援物資の配布の光景は衝撃的で、人々が古着に向かって突進してくるのに恐怖を感じたという感想もあった。

第3回布教支援（2003年11月）は、教務部長、渉外部長（男）、支部長、女子部長、総務スタッフ、インド支援委員会委員長（尾島）の6名が訪問、祀り込み・法座、訪問布教・法座、という従来活動に、リーダー育成を意識して儀式・儀礼研修、教義研修を行った。会員世帯数が400世帯を超え、リーダー育成に着眼したという。

第4回布教支援（2004年2月）は支部長、壮年教育担当（有富教順、男）、女子支部部長、学生部副部長（小柳和央、男）、インド支援委員会委員長（尾島）の5名である。内容としては祀り込み、法座、研修会、涅槃会式典（140名参加）・交流会、支援物資の配布である。貧しい人々への古着配布と小学校での文房具

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真9 板橋教会第4回布教支援ミッション・信者宅での祀り込み (2004年 立正佼成会提供)



写真10 祀り込みの対象となる3点セット (2007年 立正佼成会提供)

中央に本部大聖堂の本尊像の写真，左に総戒名，右に宅地因縁戒名が配してある。左上にあるのは過去帳。中央の本尊像写真は1999年から2007年まで海外拠点においてのみ用いられた。

配布を行った。なお、国伝次長の川本貢市、スタッフの萩原透公も参加し、「三法印・法華経の要点」(15名参加)、「因縁果報」(10名参加)の研修を行った。

第5回布教支援(2004年3月)は、壮年部長(水野晃三郎,男)、教務主任(水野の妻)、インド支援委員会委員長(尾島)が参加した。またそこにバンコク駐在布教員の島村雅俊も合流した。前回と時間があいていないのは、庭野日鑑会長が仏跡参拝の時にDDCに立ち寄る予定があったためである。これは実際にはキャンセルされたが、元々予定していたので訪問した。この回では祀り込み、手どり、読経供養を行い、リーダーが定着してきたように感じるとの感想があった。尾島は、「特に今回は女子のシトゥーさんが目立った。18歳で塾の先生をしているが、両親もとても協力的でサクセナさんの信頼も厚い。サクセナさんは彼女に東デリーの責任者的な役割を依頼し、3月末から彼女が近所の人に声かけをして、人を集め夜間法座を開く予定だ。読経供養の導師をしている」と述べている⁽¹¹⁾。この時も4階に泊まりこんで布教支援を行ったが、島村は「上着をかけるハンガーを探して戸棚を開けたところ、そこに祀り込みされていない数百もの総戒名が保管されていたのを見つけ、サクセナさんがきちんと布教していないのではないかと疑惑をもった。この体験から、サクセナさんの動態報告はあまり信用していない」と述べている。

第6回布教支援(2004年12月)では、板橋教会の小野田教会長夫妻(齋藤の後任教会長)、支部長2人、主任2人と尾島に、国伝の萩原透公、佐藤詠子が同行(前半のみ)した。6家の祀り込み、2家の手どり、シェードラの子どもたちが通う小学校で文房具の配布と、低位カーストの人々の家が密集する住宅地の2カ所での古着配布(DDC会員によって袋詰めされたものを配布)、式典および初の会員総会の開催後、板橋教会関係者は仏跡参拝に行った。サクセナも同行した。尾島によると、この時点では板橋教会ではかつてとは異なり、参加者をつのるのにも苦労したという。

2002年末から2004年にかけて6回全部布教支援に行った尾島によると、

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真11 板橋教会第4回布教支援ミッション・文房具や衣類等の板橋教会からの支援物資を
貧困児童へ配布（2004年 立正佼成会提供）



写真12 板橋教会第4回布教支援ミッション・支援物資を配布した児童との記念写真（2004
年 立正佼成会提供）

DDCには大学生の若者が多く、ヒンディー語の經典による読経供養でも声の一つになっていて上手にお経を読んでいた。サクセナは青年を扱うのが上手で、怒ったり、友達のようにしたり、誰とでも仲良くなる面白い人というようにみえた。同行する人が30名、40名と多く飲食代がかかるのが苦しかったとはいうものの、日本語教室の生徒が祀り込みや手どりに一緒に歩き、また古着や文房具の配布に際しても、青年が手伝い、同行した。その様子は当時の日本には見られない光景で、若者が多く活気を感じたという。

■齋藤の板橋教会長からの異動とその後のインド布教支援

2003年12月（佼成会の人事異動は基本的に12月1日付）、齋藤は思いもかけず2年で板橋教会の教会長から佼成文書館・開祖記念館の館長に異動することになった。齋藤にとって、これは思いもかけない人事であった。佼成会では教会長は通常5年程度は継続することが多いからである。2002年12月に第1回布教支援に齋藤も行った後、翌月の2003年1月には、布教支援に訪れる人たちがDDCの4階で泊まれるように毛布、シーツ、枕を日本から航空便で送っている。それから1年も経たない2003年12月に齋藤は異動するのであるから、これは想定外だったと思われる。尾島によると、とりわけ齋藤が教会長だった第1回から3回までの布教支援ミッションでは、教会の総務部長、教務部長、そしてその後教会長になる人材である支部長など主力の幹部が参加し、板橋教会の総力をあげてかかわっていたという。毎月の1,000ドル送付も古着や文房具の送付も力をいれてやっていた。当時は教会単位で海外の拠点を応援している教会もあり、たとえばモンゴルは渋谷教会、ネパールは新宿教会といったものがあつた。齋藤はこれまで誰も手掛けていないインド布教を板橋教会で行って、一旗あげようと思ったのではないだろうか。

齋藤の後任の教会長には、小野田雅一（板橋教会長在任期間は2003年12月～2007年11月）が着任した。齋藤の在任中にすでに2004年2月と3月のインド布

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真13 板橋教会第6回布教支援ミッション・DDC第1回会員総会の様子（2004年 立正佼成会提供）

左端の男性がサクセナ。理事長として総会を主催した。
道場内に入りきれないほど多数の人が来場。



写真14 本部お会式に参加するサクセナ（2004年 立正佼成会提供）

IBC国際仏教教会会員の隊列に加わり本部周辺を行進。

中央の眼鏡をかけている男性がサクセナ、手前右端の男性は国際伝道グループの川本貢一次長。

教支援ミッションについては予定されていたこともあり、前任者の方針を急遽変更することも難しかったのではないと思われる。小野田は齋藤が始めたインド支援を、毎月1,000ドルという支援金も含め1年間は継続した。しかし、古着や文房具の送付は行われず、ミッション派遣時に持参するぐらいであった。『佼成』や会長の法話（日本語の原文と英訳、日本語朗読カセット）の送付は行われた（南アジア教会が発足してからは送っていないとのことである）。

2004年12月に小野田教会長夫妻も参加し、前半は布教支援、後半は仏跡参拝を組み込んだスケジュールの第6回布教支援でミッションは終了した。

2003年12月の本部側の資料によると、教会長の交代によって板橋教会による支援方針が変わりそうであるとの記録があり、翌2004年1月には国際伝道グループと板橋教会の今後のインド布教に関する打ち合わせがあった。なお、2004年6月に海外支部長・拠点長教育（本部招聘）に参加していたサクセナは、同月に行われた板橋教会創立45周年式典に参加した。

サクセナは板橋教会からの支援があった時、特に齋藤教会長時代が最もよかったと2013年の調査時に筆者に語っていた。資金も古着や文房具もふんだんにあり、日本人会員の派遣もあり、人集めに魅力的な活動ができたからである。サクセナと（南アジア伝道区長だった）齋藤とは2008年以降は関係が決裂し、両者の関係は極めて悪くなるが、それでもサクセナがこのように回顧する活発な時代であった。

板橋教会での布教支援ミッションのメンバーで、その後もインド布教にかかわっていく人が3人いる。尾島由季子（1949年生）、水野晃三郎（1943年生）、有富教順（1948年生）である。尾島は外資系の会社で働いており英語ができた。インド支援委員会委員長とは尾島のことである。また尾島は2007年から本部に奉職して、南アジア、特にインドの担当になる。水野は青年時代にカンボジア、タイ、ベトナムの難民キャンプへの慰問を行い、有富も水野に誘われ、青年時代にタイやベトナムの難民キャンプの慰問や救助活動に携わり、海外に関心が

あった。有富と水野もインド布教支援でDDCを訪問し、またその後も在布教師として、有富はインドやバングラデシュ（有富は2007年にバングラデシュ教会長に就任、一時南アジア伝道区長も兼任）、水野はスリランカ布教員としても活躍した人である。齋藤は2004年12月から南アジア教会長、2007年12月から2009年11月まで南アジア伝道区長の役につくが、彼ら3人を有効に活用していった。

（3）板橋教会のインド布教支援ミッションの持つ意味

板橋教会の布教支援の時に集まってくる現地会員の大多数は、サクセナの主催する日本語教室の生徒であった。彼らは日本や日本語に関心のある人々であるのだから、日本人が来ること、日本語を話せること、交流の場をもてることは魅力だった。また、古着や文房具支援の場でも青年たちは協力した。そして、祀り込みや訪問布教には30名から40名の青年が板橋教会の人々に同行した。日本人とともに行う活動は魅力があった。また、昼食を食べたり飲み物を飲んだりすることも喜ばしい出来事だった。

サクセナは、板橋教会の布教支援ミッションの人々に、活動のアレンジ代や、集まったインド人会員の昼食代、飲み物代などインドの物価で考えたならば法外な金額を請求した。これについては板橋教会が全額を負担したが、回を重ねるにつれ、次第に板橋教会側も金銭が多くかかり、またインドの物価から考えて過大にも思え、それが適正な請求なのかを疑い始めるようになった。そして布教ミッションに毎回参加していた尾島の話では、熱心にかかわって中心的に活動しているリーダー的青年がいつのまにか来なくなってしまうことがあったという。この問題性については後述する。

板橋教会の人々にとっては、（国内での布教が停滞していく状況の中で）インド布教にかかわることによって異国で若い人が集まって読経供養をしている様子や熱心に活動しているのを見るわけである。参加者の中には「インドで消

えてしまった仏教をインドに戻したい」という使命感を持つ人もいた。第2回には総務部長（教会の事務方のトップ）、第3回には教務部長（教会の教務部門のトップ）を派遣するなど、幹部層を派遣している。第2回から第4回は青年層も派遣している。

それでは青年にとってインド布教支援ミッションにかかわる意味はどのようなのだろうか。2004年2月の第2回に大学部長として、同年12月の第4回に学生部副部長として参加した小柳和央（1981年生）に2022年8月にZoomで聞き取りを行い、インドの布教支援が自分自身に与えた意味について考えを聞いた⁽¹²⁾。

「サクセナさんはパワフルでビジネスマンのような感じだった。グイグイ入り込んでくる感じだ。若者や下の人にはあたりが強い。日本語教室に来た人に対しては高圧的で余計なことを言うなという感じだった。若者はたくさん集まっていた。第2回と第4回はその間10カ月しかたっていなかったが、DDCに集まっている人が変わっているのはわかった。日本語教室の生徒が集まっていた。

インド布教支援に行って、相手を支援するというより自分が育てられたと思った。インドでは道を牛が歩いている。車のクラクションが鳴りまくる。異文化にふれ、佼成会の人間として自分たちがやっていることの意味がわかるきっかけになり、継承した信仰を自分の信仰としてとらえる契機になった。信仰四代目なので、家に本尊や総戒名があるのが当たり前だった。（総戒名の）祀り込みをして、その意味を問い直すことができた。これまで当たり前だと思っていたことのあたり前を問い直し、そこから自分の生き方を問い直す機会になった。異文化に、布教支援に青年が行く意味は支援というより、行った側に気づきがあること、そして行った先が南アジアであることの意味がある」と語っていた。

第1回と第2回の布教支援ミッションの時のインド布教支援レポートに感想

がのっているものをみると、教会幹部が参加していることもあるが、大人の場合、青年とは視点が違う。しかし、大人の場合でもカルチャー・ショックがあった。インド社会に圧倒されてしまい、ものを考えられる状態になるまで時間がかかった。サイババ寺院前での支援物資配布の光景は衝撃的で恐怖を感じ、その場にいることができなかつた。古着を配布した時に人が殺到してきて恐ろしかったといった感想も述べられている。けれども、儀式・儀礼を教える必要がある、総戒名の祀り込みを研修してもらって見守る役をしたほうがよい、日本語の理解がある程度あるようなので、『佼成』にルビをふって送ったらどうか、祀り込みも大事だが青年たちと法座や研修をしたほうがよい、古着支援は見直しが必要など、実践的なことに言及している。教会の中で布教教化に取り組んでいる幹部であるので、異文化でどのようにしたらよいかという実践的課題に言及する人もいた。

(4) 出張報告書からみた板橋教会布教支援ミッションとDDCの様子

当時がどのような状況だったのかについては、本部からの出張者がいた場合は、その記録が残されている。2004年2月の第4回と2004年12月の第6回については、本部の国際伝道グループのスタッフが板橋ミッションに同行したため、出張報告書に比較的詳細な記録があるので、当時の状況を推察する資料になる。それを引用してみよう。

■2004年2月のDDCの状況

「布教方法は、日本語教室、英語教室、ヨガ教室を通じて仏教の教えを伝え会員を導いている。シェードラ地区に出向き、古着等の配布（現地ではDonation、すなわち布施とよんでいる）をしている。教勢は2004年2月15日現在、会員数は480名。若者が中心。通常の参拝者は10名程度と思われるが、日曜日は多い。涅槃会の式典では、140名が参加。様々な縁から導きをされており、

会員数の伸びは速い。男性中心であるが、独身女性の参加も多い。社会の中心的要素となっているカースト制度の視点からみると、全会員の40%がシュードラ出身である。概ねヒンズー教の背景を持つが、シーク教、キリスト教、イスラム教の人もある。元々仏教徒という会員はいない。

今回の板橋教会のミッションでは、4名～5名（涅槃会前日には、10名の若者が集まって準備を進めていた）のリーダーが車の運転等の役を果たしてくれていた。平均年齢は25歳以下であり、彼らは毎日9時からのご供養からDDCに入り、修行している。サクセナ氏は、リーダーの育成（サクセナ氏がDDCを不在にした場合に、サクセナ氏の代わりに指導出来る人材）の育成は急務と考えている。リーダーは高学歴者（大学卒業並びに大学院に所属する）が殆どである。日本語を簡単な会話程度ならば話す青年も複数いるし、概ね英語が通じる。

カースト制度の中で『人間は皆平等』という考え方が浸透しており、これがDDCの基本コンセプトとなっている様子で、この考えに基づいてシュードラ地域での物資の布施（配布活動）に積極的に取り組んでいる。学ぶ姿勢に富んでおり、研修を受ける姿勢はとても素晴らしい。全員が筆記用具を持参し、要点は逐一メモを取り、質疑も活発になされる。加えて、法座や研修の後には必ず決意発表の時間が用意され、その内容は、本当に力強いメッセージであり、インド社会を教えによって変えていこうというエネルギーに溢れている。

サクセナ氏が日本語の教師を兼ねていることから、同氏を『先生』と呼んでおり、サクセナ氏も彼らを大事に育てており、リーダー達のまとまりは素晴らしい。

2003年6月15日に法人登記が完了し、会費制度を2004年1月から開始したので、しっかりとした会計システムは今年になって出来上がっている。会費は月額5ルピー（15円程度）であるが、概ね1年分前払い（60ルピー）で受領している。これはあまりにも安い会費であるが、政府の指導でこれ以上受領出来な

い。サクセナ氏の興味は、お金というよりもお導きであり、布教であるが故に、法人管理や会計に関して多くの意識が払われていないようである⁽¹³⁾。」

このころはサクセナに対してきわめて好意的な反応が描かれている。

■2004年12月のDDCの状況

「式典後の質疑応答で、儀式儀礼に関しては、インドでは、佼成会以外にヒンズー教、シーク教、サイババを信仰しているケースも多く、佼成会の総戒名以外に各宗派の祭壇が設けられているため、総戒名を共に祀っているか、果物、野菜、お菓子などのお盛り物は毎日するのか、お水は下ろした後どのようにすればいいのか等の質問が挙がった。真剣に信仰を求める姿勢が感じられる質問が多かった。

DDCからは、鐘と木鉦（2セット）、ロウソク立てと花瓶、4階の宿泊部屋冷房6個、地下にある現在のDDCには水道施設がないため、ミネラルウォーターサーバー、4階の宿泊部屋の洗濯機を要求された。

所感としては、インドでは、入会希望者は多く、お祀り込みが間に合わないケースも存在するほどで、そのようなケースを除いては総戒名をお祀り込みしていない会員は存在しない⁽¹⁴⁾。ヒンディー語の布教文書が存在しないこともあってか、日本のような文書会員はいない。お祀り込みをするにあたって、我が家で有り難いお祝い事があるからと言って、その家の家族はもちろん、親戚、近所の人を大勢さそって当日が迎えられる。こんなに有り難いことならと言って自分の家にも総戒名が欲しくなったという家庭があった⁽¹⁵⁾。

インドにおける会員数の増加の秘訣がなんであるか、その一つは、先祖供養がインドの文化の中で受容されやすいことが挙げられる⁽¹⁶⁾。サクセナ氏の精力的な活動とリーダーシップにも重大な要素があると感じる。今回は予定になかったお祀り込みや手どり先の変更などあったにも拘わらず、プランニングは速く、時間的な狂いはほとんどなく進めることが出来た。またインドの代表者

として一軒一軒自らお祀り込みに歩くことも大きな意味があると思われる。

低位カースト会員が自らの身分を後ろめたく感じて、シュードラ出身であることを明かすなどのケースはあったが、サクセナ氏からカースト制度に触れたりすることはない。会員の話ではカースト制度において、サクセナ氏のような高位カーストが低位カーストと食事会に同席することや親しく家を訪問することは考えられないというなかで、サクセナ氏はそのようなことを気にする様子もなく、肩を組んだり、同じ食事を取ったり、低位カースト者を賞賛するなどしている。会員からの信頼は、このような彼の日ごろの行為から自然に生まれたものであると実感できた。」

この段階では極めて好意的にとらえているが、彼らは先祖供養に惹かれて入会するわけではなく、サクセナはリーダーシップがあるようであるが、リーダー育成には消極的で、自分自身のカーストについても時によって使い分けており⁽¹⁷⁾、サクセナのパフォーマンスに幻惑されていたことは、のちの展開を見れば明らかになる。

また、報告書の中ではサクセナと国伝の萩原スタッフに板橋教会の小野田教会長と尾島を加えての会議で、年間支援金について話題となった。板橋教会からの支援金1,000ドルが打ち切りになる可能性について打診したところ、今のレベルの援助を継続して欲しい旨が強く要請された。その分、本部からの支援を幾分増額するといっても十分な金額ではないと話していた。これに関して、小野田教会長から、「板橋教会からの支援は公式なものではなく、教会長が代われれば、支援打ち切りとならないとも限らない。そういう可能性が否定できない中で、本部からの公式な支援が増額するということはインド布教が前進した証拠である」との発言があった。このことを理解してもらったうえで、サクセナから要求のあった、ミネラルウォーターサーバー（地下のDDC設置用）と洗濯機（4階宿泊部屋設置用）を購入する資金として板橋教会より10万円が渡された。

古着支援についてはおおかた齋藤教会長時代で終了していたが、支援金は小野田教会長になっても1年間は継続された。板橋教会からの現地への布教支援は2004年12月の第6回を最後に終了した。小野田も前任の齋藤が強力で押し進めてきたインド支援をいかにして着地させるのかについて苦勞したのではないかと思われる。

板橋教会の布教支援の時期は、本部の支援金に加えて板橋教会からの毎月1,000ドルの潤沢な支援金、古着や文房具の大量の送付とそれによる経済的に恵まれない人々への配布、日本からの布教支援ミッションによる日本人との交流を喜ぶ現地の人々、活発な華やかな時期でもあり、サクセナは今後も支援が受けられるように日本人にアピールし、パフォーマンスを行い、それが出張報告書の肯定的な様子に表れていた。

(5) インド人会員からみた当時のサクセナとDDCの状況

DDCの当時の様子については、板橋教会の布教支援ミッションが行った時の簡単な報告と国伝の出張者からの比較的詳細な出張報告しかない。また、日本人がDDCを訪問するという非日常的な場面であった。そこで、初期のDDCのことを知るサビトリ・カプール（旧姓ベルマ、愛称はシトゥー。以下シトゥーと記載。1985年生、女）から、2022年9月にZoomでの聞き取りを行い、当時の状況を聞いた。シトゥーは2002年～2004年にDDCに所属しており、2008年から西デリー法座で活動をし、2013年から東京在住で、江東教会に所属している。板橋教会第5回布教支援ミッション（2004年3月）の時の感想に、「特に今回は女子のシトゥーさんが目立った」と読経供養での導師やリーダーとして言及された人である。

シトゥーは2002年2月に入会し、2004年3月時点ではデリー大学の学生だった。彼女は2004年2月～2006年10月までDDCにかかわり、2005年に本尊を勧請されている⁽¹⁸⁾。当時の状況について次のように語る。

「日本人が来る時には、サクセナさんから友人や親戚を誘うようにとの呼びかけがあった。友達や親戚をつれてきて人が沢山集まっていることを見せようとしていた」とのことである。日本人が行った時は、特別な対応がとられていたようなので、DDC時代の初期にサクセナが実際に佼成会の教えをどのように伝えていたのかについて、シトゥーに聞いた。彼女は次のように述べる。

「無料で日本語を学べるという新聞広告を見てDDCに行った。無料だったが、教室に入るために佼成会に入会しなければならないという条件はなかった（しかし、サクセナは実際には日本語教室の学生を会員としてカウントしていた）。DDCには週2回土日の日本語教室に行った。けれども、DDCの日本語のレベルは高くなく、日本から会員が来る時に話をするまで日本語ができなかったので、より高度な日本語を学ぶためにデリー大学で学科目以外に日本語を履修して勉強した（2005～2008年）。その時のDDCの日本語教室には20～30人の生徒がいた。サクセナさんは日本語を教える前に題目三唱、終わってからも題目三唱をした。サクセナさんは授業中に（ヒンディー語で）佼成会のことを教えてくれた。仏教に関心があったので興味深かった。3月の創立記念日と10月の開祖入寂会にはご供養をした。週末にDDCに行くと題目三唱、日本語の勉強、法座、卓球をやっていた（DDCには卓球台がある）。日本語の勉強のあと円座になって20～30分法座もした。サクセナさんは読経供養の仕方を教えてくれた。

土日はフリークラスなので、仕事のあと法座だけに参加する人もいた。法座には平均15～20人参加していた。法座では、日常生活、勉強の問題、家族との人間関係、お金のこと、病気のことなどが話題になった。日本人が来た時に活動がされた。日本人の会員といっしょに法座をやったこともある。

サクセナさんは白板をつかって、三つの実践（朝の挨拶をする、ハイという返事をする、履物をそろえる）、縁起観などの基礎的な仏教の知識を教えた。インドだとあの人がこれをしないと私は嫌ということで『自分が変われば相手も変わる』といった考え方はしない。サクセナさんは『自分が変われば相手も

変わる、他の人に期待せず、自分が変わると相手が変わる』と説いた⁽¹⁹⁾。またみんなで仲良くしていた。ほとんどが若い人で、その人たちのカーストについてはわからない。DDCでは差別はなかった。大きな都市ではカーストの差別は見えない。学校で勉強をしているので、カースト差別はいけないということはわかっている。若者の中ではそういうことはしない。日本語教室にはヒンドゥー教徒、シーク教徒、キリスト教徒もいた。佼成会では宗教を変えるようにとは言わず、両方できる。自分もヒンドゥー教徒のまま。仏陀はヒンドゥー教の中の神の一人と考えている。仏陀はグル（師）だと考えている。総戒名はこれを拝んでよいことがあればそれでよい。インドでは家の中にたくさんの神様がいます。

自分は家でも飯水茶をあげ、読経供養をした。時間的にできない時は題目三唱した。若い人でやっている人は少ないと思う。お祀り込みをするのは大体日本から会員が来る時にやる。祀り込みの時にはみんなで行く。日本人と一緒に行ってご供養する。総戒名の祀り込みは日本人が祀り込み、拝み方を教えた。安置した家で、その後、ご供養をやっているかどうかわからない。

サクセナさんのよいところは、どのようにお経を読むか、木鉦、鐘はどの時にたたかかという佼成会のご供養のやり方を教えてくれたことで、それで自分は導師（チャンティングリーダー。読経供養の時に導師、脇導師2人が読経供養を先導する）をやることができた。お経はヒンディー語であげた。導師になったので、本尊勧請者に推薦された。

導きをする時は（シトゥーは本尊勧請の時の導き数が28人となっている）、『日本の仏教団体の佼成会というものがあって、DDCでは日本語と仏教が学べる。先祖がハッピーになり貴女の生活がハッピーになる。入会しても改宗しなくてよい』と説明した。

インドでは、日本に対してはよいイメージがある。長崎と広島に原爆を落とされたのに、復興して発展している国で、日本人は正直で時間を守るとい

とを聞いて、日本に対する尊敬がある。若い人は日本語や日本に関心があり、年輩の会員のほとんどの人は日本に行くことに興味をもっていた。サクセナさんは佼成会の教えにしたがうなら、日本に行けるといった。大人は航空運賃を払っても滞在費は本部もちなので、関心をもったのではないか。最初のうちは全部費用を出してもらって、無料で日本やタイに行った人もいる。

日本語を学んだり仏教を学べることはよかった。ヒンドゥー教は他の宗教に対して寛容なので受け入れる。学校で仏教のことは学んだ。何か良いことがあれば受け入れる。佼成会は三つの実践、『自分が変われば相手も変わる』と日常生活でよいことを実践する。ヒンドゥー教では祈るが、実践的な教えはない。

古着の配布は月1回よりも少ないが、政府の小学校に行つて貧しい人に配つたり、スラムにいて貧しい人に配つた。日本人が来ることは楽しみだった。日本人が来ると日本語をしゃべる機会になる。一緒に踊ったり（インド風のダンス）一緒に食事をする機会もあった。食事はほとんどケータリングで、時々誰かの家に総戒名の祀り込みに行く時に、人数が少なくなると日本人とレストランに入ったことはある。」

シトゥーの話からは、サクセナはこの時期には日本語教室で日本語とともに、佼成会の教えの基礎を教え、そのあと法座も行い、読経供養の仕方を教え、年に2回、3月の創立記念日と10月の開祖入寂会に式典を行っている。この時点ではサクセナは思惑はどうあれ、きちんとやっていたようにみえる。日本語教室に入ることに佼成会への入会を条件とはしていないが、サクセナが会員としているものは、実質は日本語教室の生徒が大多数であったので、それを会員として報告していたのだと思われる。青年は日本語と日本に関心があり、大人は日本や日本行き、タイ行きに関心がある人が入会していた。

（6）齋藤光央からみたサクセナ

元板橋教会長だった齋藤とサクセナとの縁はDDCの展開を考えるにあたっ

て重要である。サクセナはどのような人だったかという筆者の問い合わせ(2022年8月)に対して、齋藤は書面で以下のように答えている。「ひと言でいえば明るく、行動力ある人間という印象であった。日本人相手の観光ガイドをしていたから、日本人の習慣、好みなどは全て承知していた。佼成会会員の喜ぶことも承知していた。それに合わせて我々へのプログラム、インド人への活動プログラムも組まれていたように思う。例えば貧民層の地域への古着の配布、儀式の中で家庭での実践の話、式典の最後にインドの早いリズムに合わせてのダンスを一緒にする、とか盛りだくさんである。訪問布教は貧民層の村、家の訪問ばかりであった。実に考えられたプログラムであった。」ただし、板橋教会の布教支援に6回全部参加した尾島によると、訪問先は貧民ばかりではなく、たとえばサクセナの妻の姉の家は金持ちだったとのことである。

齋藤のサクセナに対する支援は、サクセナが2002年6月に板橋教会を訪問した時以来のことで、その時おそらく意気投合したのではないかと思われる。板橋教会からの1,000ドルの送金や布教支援ミッションの派遣は齋藤が異動後も1年間は続き、2004年末で終了した。後任の小野田も逡巡しながらも前任教会長がやってきたことを継続してきたのだと思われる。齋藤は1年間、佼成文書館・開祖記念館の館長をしたあと、2004年12月に新設された南アジア教会の教会長に就任した。また、2007年12月には南アジア伝道区長に就任し、齋藤とサクセナとの縁は蜜月時代から葛藤の時代へと変化していくが、サクセナとの縁は継続することになる。DDC内部でもその後さまざまな問題が顕在化した。

5 DDCの支部昇格と次第に明らかになる問題

サクセナの金銭問題はデリー布教の底流に常にあった。2003年次上半期の報告書にも、現地からの財的支援の要望が強い、実態が不透明との記載がある。2004年末で板橋教会からの支援金は終了したが、サクセナがどのような交渉を



写真15 教会長就任式で挨拶をする齋藤光央教会長（2005年立正佼成会提供）
左から齋藤光央、サクセナ、通訳の萩原透公（のちの国際伝道本部次長）。



写真16 南アジア教会長就任式で導師を務めるサクセナ（2005年立正佼成会提供）

手前左端の男性が教団代表者の長谷川裕史（教務部長）、右隣が齋藤光央。



写真17 教会長就任式記念写真（2005年立正佼成会提供）

したのかわからないが、結果としては本部が板橋教会からの1,000ドルを肩代わりすることになり（本部から300ドルの賃貸費の増額、新設された南アジア教会からの700ドルというかたちで）、サクセナの取り分は変わらなかった。

（1）南アジア教会の設立と特定教会支援体制の変化

組織的な面からみると、2004年12月1日に南アジア教会が設立され、サクセナと縁の深い前板橋教会長の齋藤光央が教会長に就任した。齋藤は就任式をまたずに12月24日～28日にかけて、インドに出張し、サクセナと面会した。これについては、齋藤が自ら手掛けたインド布教に再度かかわることへの期待と思いが、就任式前のインド訪問になったとみることができるかもしれない。南アジア教会発足に際して、2005年1月20日から31日にかけて、長谷川裕史教務部長（教務部国際伝道グループになるので上司になる）、齋藤教会長、萩原国伝スタッフが、タイ、スリランカ、インド、ネパール、バングラデシュをまわり、インドでは26日にDDCで就任式が行われた。その際、サクセナからスタッフ雇用の希望、拠点施設賃貸費の値上がりによる増額の要請があったが、これは却下された。しかし、DDCの支部昇格とサクセナを支部長に任命する方向性であることが、齋藤教会長から述べられ、実質的なリーダーを発掘・育成して正式に役につけ布教組織を作り上げていくことの必要性が提示された。

3月には、南アジア各拠点関連教会長会議が行われ、南アジア教会布教に関して布教支援教会の教会長と調整が行われた。今後は南アジア教会が中心に置かれるので、各教会からの個別支援の代わりに、在家会員による委託布教費（渡航費、滞在費、活動費）が2005年から予算化された。

4月にはサクセナ家族が訪日し、板橋教会、大和教会を訪れ、板橋教会のインド布教支援ミッションに行った人々がサクセナ家族を身延山に案内した。これ以降は板橋教会との関係は希薄化していく。6月にサクセナは南アジア教会支部長研修会に来日、布教実習先は南多摩教会だった。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真18 第29回教会長インド仏跡参拝研修団による会員宅での祀り込み（2005年立正佼成会提供）



写真19 会員宅での祀り込み後の法座（2005年立正佼成会提供）
法座主と呼ばれるファシリテーターを中心に祀り込みの意義をかみしめ、心境を分かち合う。



写真20 第30回教会長インド仏跡参拝研修団との記念写真（2006年立正佼成会提供）
前列左端の男性がアミット・クマール、右隣がシトゥー。
教会長インド仏跡参拝研修団との交流は2007年まで続いた。

なお、2003年～2007年にかけては、毎年3月に教会長インド仏跡参拝研修団が帰途DDCを参拝訪問し、会員宅での総戒名の祀り込みも含め、現地会員と交流をもった⁽²⁰⁾。

(2) DDCでの南アジア教会青年錬成会の開催

2005年8月には2泊3日で南アジア教会青年錬成会(ユースサマーセミナー)がDDCで行われた。参加拠点はバンコク支部(タイ)、バングラデシュ支部、ネパール法座、スリランカ法座にインド法座(DDC)で、青年リーダーやリーダー候補者他51名が集まった。インドからは10名参加した。齋藤教会長ほか日本から青年本部スタッフ3名、国伝スタッフ3名、板橋教会会員3名(尾島、水野、有富)が運営にあたった。これは青年リーダーの人材育成を目的にしたものである。この時の出張報告の中に、錬成会というプログラムを経験したことのないサクセナとアレンジに関する考え方の行き違いが多々あり、サクセナは単なるイベント的なイメージを持っていたこと、またパーティーや閉講式に数十名の特別枠のDDC青年メンバーを参加させ、結果的にこれによって、錬成会の中で各国の青年がうちとけ合ったところに、新たな緊張をもたらすことになったと記されている。スリランカ、バングラデシュ、タイのリーダーは学林国際コース(海外修養科)卒業生で、ネパールは拠点長の弟が日本語を話すことができ、インドのみ日本語が話せないリーダーであった。特に海外修養生(卒業生)の資質は高く、通訳だけでなく、様々な場面でリーダーシップを発揮していた。今後、特にこの修養生の育成と活用が南アジアの布教の鍵となろうとある。

サクセナは日本語教室を開催しているのにもかかわらず、DDCでは日本語のわかる人材が育っておらず、また、リーダー育成のための錬成会の主旨もわかっていなかった。後述するが、リーダー育成に対するサクセナの態度および海外修養生の機会があることを日本語教室の青年たちに強調するにもかかわらず

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真21 青年練成会に南アジア各国から集った参加者たち（2005年 立正佼成会提供）
マイクを持って話しているのは青年本部次長の志村叡彦。



写真22 青年練成会拠点別法座で語り合うDDC会員（2005年 立正佼成会提供）
たすきをかけているのがシミ・ハンダ，左端の男性はアンキット・サクセナ。

ず、2011年になるまで、それもサクセナの息子以外は出さなかった。このことも後に問題になってくる。

(3) DDCでの本部勧請本尊現地授与式の開催

2005年9月には南アジア教会の本部勧請本尊現地授与式がDDCで開催され、齋藤教会長、本部から5名、板橋教会3名が参加した。インド・デリーから11名、バングラデシュ10名、ネパール6名が本尊を拝受した。デリーの場合は、男4名、女7名で、その中にのちに中央デリー法座主任になるシミ・ハンダ(1965年生、女、以下ハンダ)、シトゥーが含まれていた。デリーの拝受者のうち20歳前後の青年はシトゥーとその従妹であった。この中にはサクセナの親戚も含まれるが、現在ではハンダ、シトゥー以外は連絡がとれず、佼成会を離れている。この時に齋藤教会長の依頼で、板橋教会の尾島、有富、水野が手伝いに行った。尾島によると、「それまでは行くと青年がたくさんいたが、この時はいつも見る顔もほとんどなく、来ている青年もアルバイトのようだった。ともかく人がいなかった」と語っている。そこに参加した国伝次長の出張報告書の所感にも、インドは布教リーダーの伸びが弱いように感じられるとの記載がある。

2005年11月の齋藤教会長と国伝スタッフとサクセナとの話合いの中で、支部昇格時は生活支援のための財的支援について考慮するが、これはサクセナのみであること、そして渡航費サポートの原則が確認された。2006年の世界サンガ結集大会には、日本での滞在は本部負担だが渡航費支援はできないこと(サクセナは50%を要望)が通達された。なお、この時の報告書の中でDDCの青年の継続性にかかわる記述があった。国伝の萩原スタッフによって、青年リーダーミーティングが行われ、約50名の青年が参加した。その中で、8月にDDCで行われた南アジア教会青年錬成会参加者の感想を分かち合う予定だったが、その錬成会に参加したのはわずか2名(錬成会には10名が参加)にすぎず、DDCの青年リーダーが継続していないことがわかったのである。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真23 本部勸請本尊現地授与式で拝受者を代表してお礼の言葉を述べるシトゥー（2005年立正佼成会提供）



写真24 本部勸請本尊現地授与式記念写真（2005年立正佼成会提供）
 Bangladesh, Nepal, Indiaからの参加者27家に本部勸請の本尊が授与された。

(4) DDCの支部昇格と開祖生誕100周年記念行事

2005年5月に海外拠点運営ガイドラインの改正により、DDCの呼称がインド連絡所からインド法座に改称された。

2005年11月にサクセナは本部で教師⁽²¹⁾の資格を拝受した。12月にDDCはインド法座からインド支部に昇格し、翌2006年1月1日付でサクセナが支部長に任用された。2006年3月には、DDCはインド支部からデリー支部へと改称された。これは2007年にコルカタ法座が設置されることをみすえての改称と思われる。

2006年は開祖生誕100周年の年でさまざまな行事が行われた。2006年2月には、青年錬成会（ユースセミナー）が3日間にわたってDDCで開催され、本部からは青年本部スタッフ2名、国伝スタッフ1名、南多摩教会青年4名（男2名、女2名）、DDCからは33名（男16名、女17名）が参加した。そのうち2005年8月の錬成会参加者は5名だった。日本語への関心が高く、全員、サクセナの日本語教室の生徒だった。6月には女性対象に南アジア教会レディスセミナーが日本で行われ、デリーの5名は西多摩教会で布教実習をした（渡航費本部負担）。2006年9月には青年本部から3名と国伝から3名出張し、DDCで青年錬成会を実施した。

10月の本部での第3回世界サンガ結集大会にはデリーから15名（男9名、女6名）が参加した。12月には国伝から、次長とスタッフ1名が布教助成に訪れ、開祖生誕100周年記念行事としてDDCでスピーチコンテストが行われた。青年、壮年、婦人も含め約100名が参加した。その中の7名が日ごろの信仰体験についてのスピーチを披露した。その時に、日本からの出張者をまじえて法人理事会が開催され、本部側の会計報告の中の疑問点の指摘、DDC側の要望として会計担当者用のパソコン、ビデオ教材を見るための大型テレビ、エアコン、大人向けの学林入学（1カ月）、講師派遣、スタッフの雇用、車の買い替えと運



写真25 「第3回世界サンガ結集参拝」お会式で本部大聖堂前を行進するDDCからの参加者
(2006年 立正佼成会提供)

列の先頭がサクセナ。



写真26 「第3回世界サンガ結集参拝」に参加したDDC会員 (2006年 立正佼成会提供)
後列左から4人目がサクセナ、6人目がカマル・クマール。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真27 開祖生誕100年記念行事スピーチコンテスト前夜の研修の通訳をしているサクセナ
(2006年 立正佼成会提供)



写真28 DDCで行われたスピーチコンテストの様子 (2006年 立正佼成会提供)

転手の雇用など、さまざまな要求が出された。自助努力はなしに要求ばかりであることもDDCの特徴である。

(5) 本部からの布教支援・庭野日鑛会長のDDC訪問

2007年1月には国伝スタッフの仲原一嘉と在家布教師として板橋教会の有富が出張した。有富は日本語教師の資格をもっており、研修や日本語教室を行った。この時に有富は布施箱に入れたものが翌日なくなっており、サクセナがポケットに入れたことがわかった。またホテルの代金を清算する時に、サクセナが伝票の数字の書き換えをしていたのを見た。有富はサクセナが信用できないということを実感したという。この時に会計担当者用のパソコンとして50万円のものを購入し、仲原は金額が超過したことを国伝に謝っていた。果たして50万円もするものなのか、またはサクセナが手を打って店とつるんだか疑惑をもつところである。

同年9月には法人関係のことで、国伝スタッフの萩原と水藻が南アジア4拠点を訪問したが、DDCでは青年中心のセミナーをし、約40名の参加があった。そこでは主に日本語への質問や海外修養生についての質問が多く、佼成会の教えに共鳴している印象よりも、日本もしくは留学に対する興味や関心が高いように感じられた。

同年11月には庭野日鑛会長がデリーに立ち寄った（52分の予定が2時間になった）。参加者は約230名、80%以上が10代から20代の青年であった。この時の報告書には、DDCでは会員の出入りが激しいとの所感が述べられ、法人関係での公認会計士の請求が過度に高額（コルカタの50～100倍）であり⁽²²⁾、かつDDCは要求される最低限の法人事務も履行していなかったとの言及がある。また、サクセナからはヒンディー語経典の増刷、賃貸費用の増額、日本人リーダーの長期派遣などの要求があった。

これまでの記述からも、サクセナの金銭問題（金銭への執着とそれに伴うご

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真29 第3回世界サンガ結集参拝時の感想発表（2007年 立正佼成会提供）

本部から布教支援に来た時のカマル・クマールの発表。参加者の多くから日本人の思いやりの心に感動したとの感想があがった。左にいるのはサクセナ。



写真30 青年会員に読経供養のやり方を教える有富教順布教師（2007年 立正佼成会提供）



写真31 農村の会員宅での祀り込み（2007年 立正佼成会提供）

立って話をしているのがサクセナ、左隣が有富教順布教師。



写真32 青年会員による手どりと読経供養（2007年 立正佼成会提供）

まかし)、金銭や物品の過度の請求、そして会員の多くを占めるDDCの青年の定着度の悪さ、リーダーが育成されていないことなどが2005年以降明らかになっていく。本部からの出張者もサクセナに疑念を持ち始めた。2007年はサクセナおよびDDCの抱えている問題が赤裸々になった年である。2007年12月末時点での会員世帯数は2,625世帯とのことであるが、その多くは日本語教室の生徒を佼成会の会員として報告してただけで、実際の名簿管理はなされておらず、すでに来なくなった人も多数入っていると思われた。

6 サクセナにまつわる問題の顕在化とDDC内部での分裂の開始

(1) サクセナの金銭問題

サクセナには初期から(布教)活動費、賃貸費、そして2006年10月から齋藤が始めたサポートマネー(のちの業務委託費、生活費補助)が支給されていた。2003年8月からは板橋教会から月1,000ドルが送金され、2004年12月で終了したが、その部分を本部が補うかたちで、サクセナの収入は減少しなかった。支給金額は2004～2005年は年間18,000ドル、2006年17,400ドル、最も多いのが、2007年の19,200ドルであった。2008～2009年は約16,000ドル、2010年からは約12,000ドル前後で、これらは2013年12月をもって支給停止になった。

活動費がなければ布教できないとのサクセナの主張、様々な物品の請求、賃貸料も通常よりも多くを請求し、とくに半地下は倉庫の扱いであるにもかかわらず、4階と同じ賃貸料を請求していた。さらには、4階の部屋は初めからか途中からかわからないが、サクセナの所有する物件だとの話もあった。日本人が訪問した時は会員を集め、そこでの飲食代を過剰に請求してきた(板橋教会の時代にもデリーの物価に比して、あまりに高く請求してくる。また青年錬成会の費用に関しても過大な請求をしている)。ホテル代の伝票の改ざんなど、サクセナをめぐるお金の問題は常につきまとっていた。

半面、サクセナはパフォーマンスがうまく、観光ガイドの経験があるので、日本人がどのようにすれば喜ぶかをわかっていた。日本人が来た時には、会員のみならず、その友人、親戚も動員して、多くの人がいるようにみせた。しかし、セミナーをしてみれば、会員の大多数を占めた青年（日本語教室の生徒）は入れ替わりが激しく、それをサクセナは就職して他地域に転居した、仕事が忙しくなってこれられないなどと説明をしていたが、リーダーが定着しないことが次第に本部側にも明らかになった。また、集会での体験説法で、別の人が以前と同じ体験説法をしたのを聞き、サクセナが覚えさせてパフォーマンスをしていることがわかったと述べた日本人もいる。

サクセナの金銭問題については、シトゥーも次のように言及している。シトゥーは2004年2月に入会し、2006年10月にDDCに行くのをやめた。2006年9月に姉が亡くなり、そのショックで母が病気になり、母の世話と勉強が忙しくなったことが一番の理由だと語るが、サクセナの金銭にかかわることで嫌になった点もある。「サクセナさんについて、佼成会からたくさんお金をもらっている。パソコンも10万円のものなら、20万円と嘘をついて請求した。DDCでは4階と半地下の場所を賃貸しているが、4階はサクセナさんが購入したものなのに家賃をとっているという噂があり、半地下の部屋は家賃が安いのに、佼成会から高い家賃をもらっていた。日本の会員が来た時に買い物をする時には店と先に交渉して高い値段で売り、コミッションをもらう。板橋教会が布教支援に来た時、昼食代や飲み物代を高く請求するなど金銭的に悪い噂を聞いた。」

シトゥー自身は、「サクセナさんは佼成会からたくさんお金をもらったし、佼成会のお金をとった。悪いことをした。けれども、サクセナさんがいなければ佼成会の教えも広まらなかった。佼成会からたくさんお金をもらったことはあるが、真剣に佼成会の教えを教えてくれた。お経の読み方、読経供養の時のチャンティングリーダー（導師）、ゴングリーダー（脇導師）のトレーニングをさせ、ちゃんと教えてくれた」と述べる。感謝する心は、日本から来た人の

研修で学んだとしながら、サクセナの貢献についても述べている。

(2) リーダーを育成しないこと、日本人と連絡をとらせないこと

通常支部の場合、支部長の下には複数の主任がいる。サクセナの場合は、国伝や南アジア教会からの地域リーダー育成についてもリーダーは何人、サブリーダーは何人と言っていたと出張記録には残っているが、実際はリーダーを育成しなかった。これはできなかったというより、サクセナ自身が権益を独占するために、リーダーをつくらず、また、見込みがあった人を追い出す（排除する）傾向があった。

東デリー、北デリーに拠点をつくらうという話もしていたが、サクセナは拠点長をつくるとお金のことや秘密にしていることがわかってしまうので、やりたくなかった。また、ここは誰の担当と名前を挙げたこともあったが、組織をつくったわけではなく、サクセナだけが中心だった。シトゥーについても、東デリーのリーダーにするということを日本人に対してサクセナが語っていたが、実際にはそのようなことはなかった。シトゥーは「サクセナさんは佼成会に真剣になった人や本部で見込んだ人がいると、自分がやっていることがわかるので、避けていた。サクセナさんはリーダーをつくるのがいやだったのだと思う」と語っている。シトゥーによると、「日本人会員から名刺をもらっても、サクセナさんからは直接のやりとりはできないと言われた。メールアドレスを交換してもいけない。メールでのコミュニケーションは許さなかった。日本人が来た時に話をするのは、日本語を学んでいるものにとって楽しみだったので、その際にちょっと話すのを禁止したわけではないが、30分以上話していると、何を話しているのか、話すのをやめろと言われた」とのことである。

(3) 海外修養生を出さない理由

2005年の青年錬成会の時にも南アジアの他の国では海外修養生が活躍してい

のものにもかかわらず、DDCではそうした人がいないことが言及されていた。佼成会では学林とよばれる幹部養成施設で、寮生活をしながら、1年間は日本語学校に通い、2年目は佼成会の教えや実践について学ぶという海外修養生のシステムがある。サクセナは海外修養生について、日本語教室の中では強調しながら、また国伝からも候補者を出すようにと提言されながらも、推薦しなかった。DDCが初めて海外修養生を出すのは2011年のことで、それもサクセナの息子のアンキット・サクセナ（1989年生、男）だった。しかし、彼は2年間の年限にもかかわらず体調不良を理由に4カ月でインドに帰国してしまい、その後もDDCから海外修養生が出ることはなかった。

海外修養生について、かつて青年のリーダーであったシトゥーと海外修養生を希望していたアミット・クマール（1986年生、男、2005年入会、以下アミット）の聞き取りからその様子を見てみよう。

海外修養生について、シトゥーは、「2006年にアミットは佼成会の教えに関心があって、学林に行って海外修養生になりたいということで、パスポートや書類を提出したが、最後にサクセナさんが推薦せず、断られた（学林行きを阻止した）ということを知った。また、自分ともう一人の青年をリーダーとして育成するために、1カ月半、学林に送る計画があると齋藤さん（南アジア教会長）から聞いたが、サクセナさんはそれを自分には言わずに止めていた。」このこともシトゥーがDDCから離れた一つの要因であった。

2013年3月にデリーでアミットの聞き取りを行ったが、海外修養生の2年の年限を終わり、帰国してすぐの時だった。「2005年に無料の日本語教室をやっているというので、DDCに行くようになった。DDCの法座では、集まっている人々は自分はずいぶん、自分を認めてほしいという感じで、人の話を聞かずに自分のことを言おうとしていた。けれども日本人が来た時に法座をすると違っていた。温かい法座だった。この人達はどこで学んでいるのだろうと思って、サクセナさん、島村さん、尾島さんに聞いたところ、学林で学べるということ

がわかった。佼成会入会后1年半たった2006年に海外修養生としての入林希望を出した。3月31日までに応募書類を本部に出さないといけない。パスポートも作った。けれども書類をサクセナさんが送ってくれなかった。サクセナさんに聞いたらはっきりと答えてくれなかった。そこでいやになって2年間で佼成会をやめた。サクセナさんとはうまくいかなかった。日本語教室の生徒は学林で勉強したいと思っていた。けれども、サクセナさんは機会を作ってくれなかった。サクセナさんは言うこととやることが違う。サクセナさんの日本語はちゃんと習っていない感じがした。サクセナさんは自分よりも知った人が出るのをいやがる。日本人と名刺を交換するのもダメ、メールアドレスを交換してもダメと言われた。」

アミットはDDCを離れた後、日本語学校に入り週2回1時間半、2年間勉強し、日本に行く前に日本語検定3級を取得している。その後旅行会社に入社し、2年8カ月の間フルタイムでガイドとして働き、DDCから分かれた西デリー法座からの推薦で、2011年に海外修養生として学林に入学した。はからずもDDCから推薦されたサクセナの息子のアンケートと同期だったが、彼は4カ月で挫折したが、アミットは2年間で修了し、日本語検定1級を取得した⁽²³⁾。

サクセナは日本語教室をしており、そこで海外修養生のことを宣伝しながらDDCから息子以外は誰も推薦しなかった。本部から出すように言われてもそうしなかった。学林で勉強することによってサクセナより知識が多くなり、サクセナが主導権をとれなくなることを危険視し、拒否していたのではないかと思われる。

(4) サクセナ問題の本部への直訴

■サクセナへの不満の醸成

大人の会員はイベントをDDCでやった後、サクセナと夜遅くまで酒を飲んで話すことがあり、話を聞いているうちに、サクセナのあやしさを、サクセナ

がやっていることがわかってきた。サクセナの金銭問題については、2006年にはDDCの大人のメンバーの間では問題になっており、一部の青年にもメールで情報が流されていた。そして、サクセナは都合の悪い人を排除していった。〇〇さんはどうしたのかと尋ねる日本人には、他の宗教に行った、事故にあった、引っ越したとサクセナは説明していたが、実はサクセナによって追い出されたことがのちにわかった。

サクセナの金銭問題やサクセナの独善的態度に対する不満をもった人たちが、カマル・クマール（1970年生、男、以下カマル）を中心にして集まるようになった。サクセナは他の会員が日本人と直接連絡をとるのを極めて恐れていた。DDCの会員に直接日本人と連絡をとらせないようにしていたのは、秘密が多かったからだと思われる。大人はもとより青年の場合もそうである。シトウが述べるように「日本人の会員から名刺をもらったが、サクセナさんから私たちは直接会員とやりとりはできないと言われた」⁽²⁴⁾のである。サクセナは日本人と個人的に連絡を取ることを嫌い、阻止した。

2008年11月に国伝の萩原次長と水藻スタッフがDDCを訪問した時の報告書に、「昨年から懸念になっていたカマル・クマールとの関係を発端とした諸問題」との記述がある。2007年から2008年にかけてはサクセナの問題性が明らかになった転換点を構成する。カマルが萩原に出したメール2通が今回見つかった。カマルが萩原にメールを出したのは、2007年10月のことである。カマルからのメールにはサクセナの金銭問題について直接には書かれていなかったが、この問題が底流にある。

■カマル・クマールからの本部への告発

カマルは2004年3月に入会した。2007年当時37歳で、陸軍少佐までいって、早期退役した元軍人である。カマルは2007年10月12日に国伝次長の萩原に英語のメールを送った。カマルは、まずは2006年に世界サンガ結集参拝で日本に行っ



写真33 バンコク支部で開催された南アジア教会本部勸請本尊現地授与式で本尊を拝受した
DDCからの参加者（2007年 立正佼成会提供）

前列左から仲原一嘉（国際伝道本部スタッフ）、齋藤光史教会長、教団代表者の橋本恵市（総務部長）、鈴木孝太郎（国際伝道本部長）、サクセナ。後列左から2人目がカマル・クマール、5人目がモヒンダ・パル。ターバンを巻いているのはシーク教徒

てお会式パレードに参加したこと、2007年7月のタイでの本部勸請本尊の授与式でも萩原に会ったことについて言及している。サクセナにかかわる諸問題について、カマルは同じ気持ちをもつ西デリーの150人の人々に代わって書いているとしている。

萩原にメールを出したのは、萩原から名刺をもらい、メールアドレスがわかっていて、そして何より言葉の問題があり、カマルは日本語ができないので、萩原が英語で通じる相手だったことがある。言葉の問題で齋藤、有富などDDCに来た日本人には話せないこと、齋藤のアドレスはもっていないということあげている。

2006年の世界サンガで、佼成会の宿泊施設の第二団参会館の7階に宿泊していた時、日本人から名刺をもらった人がいて、その人からサクセナはその名刺をとりあげた。日本人の名刺をもらった人を含む3人をインドについてからメ

ンバーから削除したということにも言及している。

補足すると、2007年7月29日にタイのバンコク支部で本部勧請本尊現地授与式があったが、デリーからは6名（男6名）が本尊を拝受している。その時、カマルのほか、後に西デリー法座の主任になるモヒンダ・パル（1964年生、男、2004年12月入会、以下モヒンダ）もいた。

一般的には本部勧請本尊の自宅への安置は、教師資格を持つ人（DDCはサクセナのみ）が行うが、カマルはサクセナが自宅への安置をしてくれないので、自分自身で安置した。サクセナは手どりもせず、法座にも来ない。車のガソリン代がかかるから本尊安置の儀礼もしてくれなかったと述べている。

■天道へのDDC住所の貸与問題

もう一つの大きな告発は、DDCの住所・電話番号が「天道」という他の教団の所在地に使われているということである。カマルはメールの中で、「この教団は昨年（2006年）来ており、教団の本部は大阪（注：大阪には天道のビルがあり、総本山は兵庫県）で、祈りの言葉は“Ram Sanju, Ram Sanju”と唱え、佼成会と違う。そして彼らは木を燃やして祈る（護摩木をたく）。サクセナは、これは佼成会の他の支部で、彼らの祈りの言葉は違うが会長と創立者は同じと saying。しかし、世界サンガで日本の本部に行くと、これは異なる宗教団体だと確信した。サクセナは天道が来る時には佼成会の創立者の写真をその教団の中心人物の写真に換え、装飾物を変更する。天道は2007年10月4日から14日にかけて来る予定だったが、延期になった。サクセナが他の組織で働いている証拠写真を持っている。そして、このことについて南アジア教会長の齋藤さんに伝えたいが、アドレスはもっていないので、伝えてほしい。私たちはサクセナから離れたい。私たちを導き、150人のメンバーと一緒に西デリーに別の拠点をつくる方法を教えてほしい」と述べている。

萩原の返信に対して、10月21日に再度メールが来る。「あなたは私たちに助

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真34 カマル・クマールから本部宛に届いた、DDC拠点住所の「天道」への貸出を示す証
拠写真（2007年 立正佼成会提供）

DDCの住所や電話番号とともにサクセナのメールアドレスが記載されている。

けることができる唯一の人だ。言葉の問題で、斎藤教会長や他の日本人幹部にこの問題を話すことができなからだ。サクセナは人を助けるのではなく、いつも自分のことばかり考えている。DDCの中に日本人を知っている人が入ることを許さない。日本人が来る時に奨励金を与えて人集めをしているが、これらの人々はほんのわずかしか繰り返し来る人はいない。西デリーには150人のメンバーがおり、ハリヤナにも250人いる。この事実をより上位のところにつなぎ、真の仏陀の道を歩んでいる西デリーのメンバーを助けてほしい。天道の証拠写真を送る。そこにはDDCのアドレスが書かれている」と書いている。

証拠写真としてカマルが送ってきたのは、次のものである(写真34参照)。ラッキーコインは紅白のひもがついた日本の五円玉である。その収納袋には、表面には、ラッキーコインと英語で大きく書かれ、「このコインはあなたに大きな幸運をもたらす」とある。裏面には、「もしあなたがもっと幸福を欲しければ

電話をしてください」, 「天道インドミッション」と書いてあり, DDCの住所, 電話番号, サクセナのメールアドレスが記載されている。

また聖紙として, HAKUYOUSYUENFU (ハクヨウシュエンフ, 漢字不明), 「この聖なる紙はどのような夢や願い・希望も叶うので心を込めて書いてください」と名前・願いの欄があり, 「あなたが書いたこの聖なる紙を以下の住所に送ってください。私は心を込めて祈るので, あなたの願いは叶うでしょう」と書かれ, SEGYOKUJIIN (セギョク寺院, 漢字不明) と書かれた下にDDCの住所と電話番号が書いてある。つまり, DDCは天道にとってはセギョク寺院でもあったわけである。写真は天道の中心人物の徐錦泉であると確認できた。サクセナがどこで天道と知り合ったのかについては, ガイドの仕事との関係であると推測はされるが, ここからは天道が来た時に単に場所を貸しているというだけでなく, 連絡場所としてサクセナがDDCを使い, 天道に関する質問まで受けることも想定していたことを示している。

それでは天道というのはどのような教団なのか。日本にある中華系の教団である。ホームページ (<https://tendo.net/> 参照) によると, 天道の総本山は玉皇山弥勒寺といい兵庫県三田市にある。天道とは, 大宇宙, 森羅万象のすべてを創造した唯一の神につながる道で, 今から約五千年前, 中国に現れて以来, 皇帝から皇帝へと密かに伝えられ, また一人の聖人から一人の聖人へと伝承されてきた, あらゆる宗教の原点に秘められた救いの王道であるとされる。天道で礼拝している主神は, 天地創造の親である神であり, この宇宙の親神のまたの名を「無生老」(むせいろうむ), ラウム様と呼ぶ。ラウム様は「無始」, つまり始まりのない存在で, 宇宙が始まるよりも無限の前から存在する絶対唯一至高の神であり, 霊の源であるという。

また, 天道には人間としての教祖が存在せず, 組織としては人盤領導理事会を中心として, 道務が運営されている。写真の徐錦泉は, 天道総天壇領導理事会理事長で, 人盤統掌の天命を担う最高責任者である。徐は1921年生まれの高

湾新竹出身、17才で単身来日し、1963年に得道した。その後、全国に道を広め、今日の道体を築き上げた。未開の地に伝道し、道縁天壇での得道者数は30万人、行った研参会の数は2,000回を超えた。2018年に逝去した。

天道には護摩木、護摩符などの先祖供養・祈願成就の道具があり、一年を通して様々な護摩壇が焚かれる。護摩木、護摩符は、願い事を書き、護摩壇でお焚き上げすることによって、願いの成就を祈る天道の道具である。カマルのいう祈りの言葉の“Ram Sanjyu”のRamはラウムを指すと思われる。

かつてDDCのメンバーだったシトゥーは天道が来た時のことを覚えており次のように語っている。「DDCに行っていた2004年から2006年の間に天道は2回来た。佼成会では題目をあげるが天道では別の唱えことばがある。天道から村田先生が来て、護摩を焚いて願いを書いた白い紙を火にくべた。自宅近くの小学校で護摩を焚いたので手伝いをしたことがある。サクセナさんは天道について情報をくれなかったので、佼成会の別の組織なのだろうかと迷った。二つの組織があっっておかしい感じだった。それは2004年のことだ⁽²⁵⁾。願いの紙はサクセナさんが集めていた。火を使う儀礼なので、外でやる。2回目に来た時には DDCの裏の広場で護摩炊きをやった。DDCの内部に天道が来る時には天道のものを置いていたかはわからない。佼成会のものを取り払ったというカマルさんの話は本当かもしれないが、外でやる行事だったので、中のことはわからない。天道からは団体ではなく、村田先生1人しか来ていない。サクセナさんはメインは佼成会だが、天道のこともやっていた。」

■天道問題の一応の決着

2008年11月の出張報告書の中で、この問題について次のように記載されている。「DDC道場が、天道教の住所となって記載されていた件について、本部としては断固として許される行為ではないことを告げ、サクセナ支部長に説明を求め、また理事の意見を求めた。サクセナ支部長は、ガイドの仕事の一環として

住所を貸していたこと、実際には2年間の内に2回天道教の団体が訪問しただけであり、その際のガイド料金をもらっていたこと、その訪問に合わせて住所を貸したこと、DDCが常に佼成会の道場であったことなどが釈明された。また、理事会には一切知らせておらず、個人で行っていたとのことである。それぞれの理事からは、サクセナ氏の行為は、信頼を裏切るものであり、彼の間違った行動であり、彼に責任があるとの見解が全員からはっきりと示された。結論として、早急に以下の手続きを取る事となった。サクセナ支部長が本部宛に謝罪と、理事としての進退（注：サクセナも理事の一人である）を本部に委ねる旨の書簡を送る。デリー法人理事会より、全員の署名の入った、今後二度とこのようなことを起こさない旨の誓約書を送る。」

2009年1月7日付のサクセナからの謝罪文（手書きの英文で短いもの）は、「DDCの支部長のプラディープ・サクセナは4年間DDCの住所を天道の住所としても使っていた。これは自分の誤りで、心からの謝罪をする。このようなことは二度と起こさない。DDCは今後、佼成会の活動のみに使うことを約束する」というものだった。2008年11月の国伝次長とスタッフのサクセナとの話し合いの時の説明では2年間といているが、サクセナの謝罪文では4年間（2005年からと推定）、シトゥーの記憶では2004年からである。DDCの看板は厚紙をセロテープで貼ったようなものなので、看板の掛け替えも簡単であったであろう。なお、理事会からの誓約書は提出されなかった。

天道については国伝が新日本宗教団体連合会（新宗連）事務局員をとおして調べてもらい、国伝が天道に連絡し、サクセナが双方のデリー拠点代表になっていることを確認し、佼成会の側から削除を申し入れ、天道がサクセナとの連携を解消した。天道のホームページには現在インドの拠点は無い。2007年10月のカマルのメールから発した天道問題は一応の決着がついた。とはいえ、佼成会から賃貸費をとっていながら、天道の住所としても貸し出し、大人のカマルには天道は佼成会の支部だと説明し、青年には天道の護摩炊きの手伝いをさせ

るなどサクセナはなかなかのものである。

7. サクセナをめぐる問題の明確化とDDCの本部直轄化

(1) 齋藤とサクセナの対立・本部直轄化

2007年12月に南アジア教会は南アジア伝道区となった。バンコク教会、バングラデシュ教会の設立により、それを包括したものになる。伝道区長には南アジア教会長だった齋藤が就任した。板橋教会長時代からサクセナと蜜月だった齋藤との間は険悪化し、2008年にはサクセナから教会長を変えてほしい（伝道区に属する支部は教会長が齋藤）とのメールが国伝に来、またサクセナと齋藤との激しいメールのやり取りがあった。

2008年6月に行われた3泊4日での南アジア伝道区主任教育（バンコク主任セミナー）に齋藤はサクセナと対立するカマルを含む3人を招聘した⁽²⁶⁾。このセミナーは主任の育成を目的にしたものであるから、今後、西デリー法座という拠点をつくることを意図してのものだと思われる。

2008年10月の出張報告書によると、南アジア伝道区主任教育に対して、「誰がカマル氏を招聘したのか」と問いかけがなされ、萩原次長より「確かに現地の責任者であるサクセナ支部長に相談することも必要であるが、決定者は、あくまでも教会長の権限である」ことが確認された。つまり、齋藤としてはカマルを主任として育てようとし、サクセナの側からは支部長である自分を差し置いて招聘したことに対する不満があり、齋藤とサクセナの間はさらに葛藤が深まった。カマルの問題によって、今後はサクセナ以外とも本部はコンタクトをとること、リーダーの育成と組織化の必要性、そして現在は教師の資格を持つのがサクセナだけだが今後は教師資格拝受にふさわしい人を育成する必要があること、海外修養生の候補者を2009年には少なくとも1名選出すること⁽²⁷⁾、また本部からは財政的自立が求められ、活動費補助を2009年8月末で打ち切る



写真35 バンコク教会で開催された南アジア伝道区主任教育に参加するDDC会員（2008年立正佼成会提供）

前列右から3人目の男性がカマル・クマール。



写真36 主任教育で果物の盛り方を学ぶDDCからの参加者（2008年立正佼成会提供）

右から2人目がカマル・クマール。直後にDDCから分派することとなる。

旨の説明があった。これは本部に変わって布教しているので、財的支援は当たり前というサクセナの考え方の是正を目的とするものであった。

問題の背後にあるサクセナによる情報や資源の独占、海外修養生を出さない、財的依存というサクセナのもつ問題性への指摘がカマルの告発を契機に行われたことは意味がある。また、2008年3月の創立70周年を機に出された全会員への本尊・法号の勧請（額装本尊とよばれる本尊の絵像、総戒名、宅地因縁戒名、開祖・脇祖の法号から構成、写真38参照）にともないDDCの2,800名の会員名簿を整理し、データ化し、その中から不明者を削除し、最初の額装本尊拝受者の100名を選ぶことを求めた。また、理事会の席上で理事長、事務局長、財務担当者にもサポートマネーが欲しいとの要望があがった。これに対して、佼成会ではどこでも理事に対して報酬を払うことはないと返答した。これはサクセナがサポートマネーをもらっていることが明らかになったことによって、自分たちもほしいとの請求のように思われる。そして、サクセナのみを窓口にしてきたことの弊害への対応の是正の方向性が打ち出された。

齋藤とサクセナの葛藤への対処として、2008年10月にDDCを南アジア伝道区から本部直轄扱いとした。本部宛にサクセナから齋藤に対する強いクレームがあり、両者は応酬しあっていたが、もう関係の修復は難しく、その対応でのことであった。ただし機関決定はしていないので、対外的には伝道区直轄拠点であるが、実質的には国伝次長の萩原が教会長の役割を果たすことになった。

(2) サクセナが元霊友会支部長だったことの発覚

2009年初頭にサクセナに関連する問題がまた一つ明らかになった。サクセナは佼成会への入会動機に仏跡参拝のガイドをしているうちになぜ日本人は仏教に関心を持つのかに興味をひかれ、仏教を勉強したいということで佼成会を紹介してもらったという、その言説への疑義である。佼成会に入会する前にサクセナは霊友会（佼成会は霊友会からの分派）の支部長だったことが発覚した。

発覚した経緯は次のとおりである。国際伝道グループが事務局になって行われた法華三部経英訳改定プロジェクトに「在家仏教こころの会（霊友会の創立者久保角太郎の息子の元霊友会会長の久保継成が2004年に始めた教団）」の関連組織の「在家仏教こころの研究所」の上級客員研究員のアメリカ人Joseph M. Loganに入ってもらっていた。その関係で、所長の橋口豊彦と萩原は知り合いになった。橋口はインド霊友会に7～8年、駐在していた人である。萩原は、橋口から「サクセナさん、元気？」と言われた。佼成会のホームページの海外布教のところにサクセナのこと載っていたのを見たためである。そこで、サクセナがインドの霊友会で500人以上を導いており、曼荼羅の勧請を受けた支部長だったことがわかった。2009年2月に萩原と水藻はデリーでの額装本尊授与式に行くが、発覚したのはその2～3カ月前のことであった。2月の訪問時には、サクセナはいやがっていたそうだが、一足先に帰国した萩原の委託を受けて水藻はサクセナと一緒にデリー霊友会センターを訪問している⁽²⁸⁾。

2013年の筆者のサクセナに対する聞き取り調査の中で、霊友会に対する質問について次のように答えている。「霊友会で1回日本に行った（活動的な会員は全額霊友会負担で行ける）。その時は身延山、七面山⁽²⁹⁾にも登った。佼成会と霊友会の教えは大体一緒で似ているが、佼成会で初めて雑誌や本で勉強をした。霊友会では最初からトレーニングがあった。霊友会では筆で総戒名や戒名を漢字で書いた⁽³⁰⁾。佼成会はもっと簡単だ。導きは大好きで、霊友会でもたくさん導きをするので有名だった。霊友会ではほかにも支部長がいるが、佼成会では自分が初めての会員なので、『一粒種』はチャンスがあると思った。」

すなわち、サクセナは日本の仏教について知らないわけではなく、佼成会入会前に、すでに霊友会の支部長として活動していたのである。佼成会は霊友会からの分派教団であるので、似た要素も多い。サクセナはガイドをしながらチャンスを狙っていたのではないか。そこに佼成会がはまり、またサクセナと佼成会の縁をとりもったのが、庭野日敬の遺体を運んだ霊柩車の運転手であったと

いう幸運もあり、「一粒種」のメリットを充分享受していった。サクセナに金銭問題が常にかかわってくること、自分以外のリーダーを育成しないこと、DDCの会員の日本人との直接的な交流を忌避すること、自分より知識を学習してくる可能性のある海外修養生制度の存在を日本語教室の宣伝としては使いながらも実際には息子以外は推薦しなかったことも、独占ビジネスとして佼成会を狙っていたように思われる。

サクセナの問題性に加えて、天道へのDDCの貸与、すなわち2つの教団と二股をかけていたことの発覚、さらに霊友会の元支部長であったことも発覚し、仏教を知りたいという入会動機ですら計算づくであったことがわかり、サクセナの信頼性はおちた。

(3) DDCの財的依存体質・理事会構成メンバーの辞任・額装本尊授与式

■額装本尊授与式と理事会メンバーの辞表提出

2009年2月の出張報告書には、変わらず財的自立の問題（依存体質）があり、2009年8月末での活動費の打ち切りの通達（実際は2010年12月に打ち切り）をしたが賃貸費は継続の予定ではあるものの、これを機会に「本部からの財政的支援がなければ布教はできない」とか、「財政支援は当然」といった意識的な問題を解決し、「会員が増えれば増える程、お金がかかる」といった構造的な問題を解決していきたいと考えると記されている。海外修養生とリーダーの育成についても言及されている。

そして、額装本尊の授与式に行った国伝次長の萩原に、法人理事会のアヌジ・ニガム理事長とママタ・ニガム財務担当理事（両者は夫婦で、ママタはサクセナの妻の妹）の辞表が提出された。サクセナを除くその他の理事も辞意を表明しており、法人運営は困難な局面を迎えた。また、西デリー地区に本部関係者が出入りし、現地会員間で動揺があるとも記されている。

「109家の会員に額装本尊⁽³¹⁾の授与式（うち9家は本尊勧請家のため法号、

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真37 額装本尊授与式事前教育を受講中のDDC会員（2009年 立正佼成会提供）

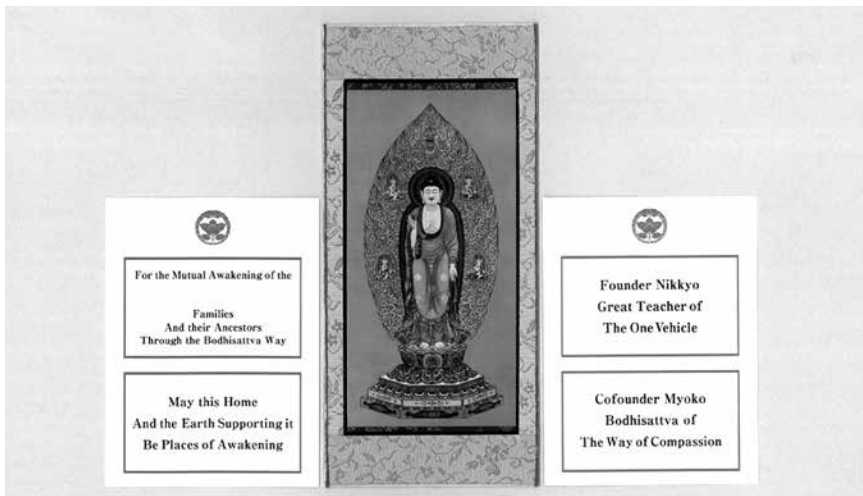


写真38 教団創立70周年を期して新たに勧請された額装本尊（2008年 立正佼成会提供）
中央に本尊の絵像、左側上部に総戒名（夫方・妻方または父方・母方の姓を入れる）、下部に宅地因縁戒名、右側上部に庭野日敬開祖の法号、下部に長沼妙俊脇祖の法号が配してある。



写真39 額装本尊授与の様子（2009年 立正佼成会提供）

右が国際伝道本部の萩原透公次長、中央がサクセナ。拝受者一人ひとりへ本尊が授与される。



写真40 額装本尊授与式記念写真（2009年 立正佼成会提供）

総戒名、宅地因縁のみ)を執行(実際の授与式参加者は78家)した。デリー支部には1,499世帯(2009年2月現在)の会員がおり、今回100家に額装本尊が授与されたものの、引き続き額装本尊の授与をする必要がある。しかしデリー支部の現状に鑑みて、一定数の本尊ならびに法号を現地に渡し、現地にて本尊・法号を管理するのは現実的ではない。(すなわち、それができるといふ信頼が持てない。)名簿上の会員として膨れ上がった会員数を整理しつつ、自覚のある会員をリーダー、ひいては幹部へと育成していくために、今後暫くの間は現地にて額装本尊の授与式を行いつつ、会員ケアと育成、サクセナ支部長との調整を進めていく方向性が妥当であると考えられる」と記載されている。

所感として、「南アジア伝道区の手から離れて、昨年(2008年)10月より本部直轄拠点としているDDCであるが、内部の分裂を始め、様々な課題を抱えている。本部で何も手を下さなければ、恐らく、遠からず消滅していくことであろう。様々な問題の原因は、サクセナ支部長に起因するという見方もある。このサクセナ支部長に関して、今まで明らかになっていなかったことである『霊友会の支部長だった』という事実や、信頼出来ないという評価もある。しかしながら、僅か1年程前には、会長先生にご巡教を頂き、また開祖さまのご尊体をお運びした霊柩車のドライバーとのご縁から入会されたサクセナ支部長の因縁を噛み締めたいと思う。そして、今までのこちらの不適切な対応、関わりも反省し、新たな関係を結び、DDCを活かしていきたいと思う」と萩原は記している。なお、サクセナより授与式の際に、拝受者、お役者に昼食を振る舞いたいとの要望があったが、今後の財的自立のための方向転換を図ることを目指し、飲み物と茶菓子程度の対応とした。こうしたこともすべて本部の費用でやろうとするのがサクセナ流である。この授与式には多くの青年がお役者として活躍した。リーダー育成につなげるために、彼らのリストを作った。

授与式の翌日以降、家庭訪問をして各家での額装本尊安置式を3家行った。その際にはサクセナばかりではなく数名のリーダーに同行してもらい、安置の

手順、心構えを伝えることによってリーダー育成の契機になることを期待した。本部直轄になって以降、額装本尊授与式と安置式を重視して布教支援していったのである。

■DDCの本部直轄拠点化と額装本尊授与式からみるDDCの状況

DDCは2008年10月より本部直轄扱いになり、国伝次長の萩原が教会長的役割を果たすようになった。南アジア伝道区から離れたということは、DDCは伝道区主催のタイのバンコクでの研修などの機会がなくなり、タイに行きたいという会員にとっては魅力も減少していった。

これまでサクセナの独断場であったインド布教は、2007年11月にコルカタ法座所が開設され、布教が伸びて行っている状況があり、本部としても伝道区としても力点がデリーからコルカタに移行していった。また、2008年6月のバンコクでの主任研修ののち、カマルを中心として西デリーの活動が始まった。西デリーには齋藤を中心に南アジア伝道区によって布教支援がなされていることもサクセナにとっては不安要因だった。

また2009年6月に、DDCで行われた額装本尊授与式で120家が拝受した。サクセナからは当日の参加者、お役者へのリフレッシュメント代、昼食代が要求された。そこでは新しい会員が目立った。すなわち、会員は定着しておらず、あいかわらず会員の出入りは多く、会員は日本語教室の生徒だった。これまでは拠点はDDCのみであったが、西デリーの活動がされているので、DDCは今後二つのうちの一つのグループとして活動していくようサクセナとの調整がなされた。かつて2004年に板橋教会の布教支援ミッションに同行した萩原は当時の状況について極めて肯定的な印象をもっていたが、サクセナの問題性が明らかになり、5年でその印象はすっかり変わった。齋藤とサクセナとの関係も葛藤状況に入っていた。

DDCは本部直轄扱いになり、それでも額装本尊授与式や布教支援が行われ

ている。2010年1月にもDDCで65家に額装本尊が授与された。7月にはサクセナが約2週間の第3期リーダー教育1年目に本部の渡航費支援を受けて訪日した。国伝側としては、サクセナがリーダー教育を受けて取り組み方を変えてほしいとの願いと、サクセナがまずリーダー教育に行かなければ他の人が行きにくいという理由もあった。

同年9月にはDDCで額装本尊授与式が行われた。拝受希望者は71名で、当日受け取った人はそのうちの50名である。前日の事前教育では、参加者は日本語教室の時のように白板の方を向いて座り、本尊拝受の事前学習会とは知らないと思われられる人が多かった。サクセナは有料の日本語ガイドクラス(30名)を開いている。サクセナに学んでもらい、拠点長であるサクセナが拝受者に事前研修をしたならばよいのではと感じたと出張者の尾島は述べている。授与式の説法者は2人とも1月の時と同じ説法をしていた(説法をしたのは別の人が、同じ説法をしていた。つまり、説法内容をサクセナが覚えさせていたのである)。リフレッシュメント代金として参加者人数分3ドル×2日を支払った。実際かかった金額より過大の請求があった。

なお、2010年12月をもってDDCへの活動費支援は終了した。賃貸費と業務委託費(サポートマネー)は継続している。

8. DDCの南アジア伝道区への復帰から支部長辞任に至るまで

(1) DDCの南アジア伝道区への復帰とDDCの状況

2011年1月にサクセナと萩原の打ち合わせが行われた。「サクセナ支部長は土日には日本語教室を行い、30~40名の学生がおり、有料(1カ月500ルピー、1,000円程度)である。会費は月額10ルピーで400名が払っているという。本部としては西デリーでグループを形成している実態を踏まえ、西デリーを正式拠点として認めていくことを伝えた。DDCに関しては、この3年間、実質的に

国際伝道本部の直轄拠点としてケアしてきたが、今後は、南アジア伝道区に移管し、長谷川伝道区長の元で運営されることとなる。一番、印象的であったのは、歳を取って体調の変化もあるであろうし、DDCが分裂したことや齋藤前伝道区長との確執等の精神的なことを含む様々な原因から、サクセナ氏に以前のようなアグレッシブさがなくなったことである」と記載されている。1月にDDCは南アジア伝道区に復帰した。

2月の尾島と工藤友紀乃の出張報告書には、「30～40名程度の人が集まっていた。うち初めて法座所に来た人が約10名程度。修行をしている人は10名程度。他はサクセナ氏から日本語を勉強している人たちだということだ。尾島スタッフの導師によるご供養のあと、佼成会とはどんな団体でどんな教えを信仰しているかということについて説明した。仏具の扱いがあまり良くないと思ったため、その扱い方についても説明した。質疑応答の時に、サクセナ氏からこの機会に、本部の職員に直接海外修養生制度について、聞きたい質問があれば聞くように、と参加者に対して質問を促した。今日はじめて来たという人たちからも奨学金について、日本でアルバイトをしても良いのか、など『日本での教育の奨学金制度』について質問が出た。誤解があるようなので、修養生制度のそもその狙いと、卒業生たちの進路についてきちんと説明をした。日本に行ってみたいと純粹に思っていた人が多かったようで、中には50代から60代と思われる男性から、なぜ修養生は28歳までなのかという質問もあった。短い期間で語学を学び、佼成会用語を理解した上で、日本の佼成会の教えをきちんと理解し、2年間で延べ数カ月にわたる教会での実習にしっかりと取り組み、なにより卒業後佼成会の教えを祖国に戻って広めることが修養生としての役割だと説明し、そのためには、20代までの若い人たちであることが望ましいということも伝えた。サクセナ氏は以前のような元気がなく、体調もあまり良くないように感じた。最近では本職である観光ガイドとしての仕事は若いスタッフに任せ、ほとんどの時間を家で過ごしているという。もう昔のように働けないと言っ

ていた。出張最終日、空港に向かう途中でサクセナ氏を訪ね、西デリーとの合意書にサインをしてもらった。サクセナ氏は、尾島、工藤の2名で来るものだと思っていたようで、空港まで付き添ってくれるため同行していた西デリーの会員を家に招き入れようとしなかった、と西デリーのモヒンダ氏、パンカジ氏は怒りを感じたようだ。西デリーの会員たちが同日の昼食にサクセナ氏を誘ったが、忙しいと断ったようだ。西デリー側の意見としては、自分たちはサクセナ氏と歩み寄りたいと努力しているが、サクセナ氏にはそのような気持がないと思えるとのことだった。サクセナ氏も、自らが手どりし入会した人たちが心変わりし、自分のもとから去ったことに心を痛めているようだが、そうなった理由については理解していないように見える。今後、共同で式典や教育を実施していくのであれば、西デリーの会員との関係を良くしていけるよう、サクセナ氏も努力が必要だと感じた。」相変わらずの日本行きや海外修養生に関心をもつDDCの様子やそれを率先して誘導しているサクセナ、そしてサクセナの体力の低下、西デリーとの確執について言及されている。

6月のDDC布教助成には尾島とインド留学経験者でヒンディー語ができる牧野江身が出張した。かつて板橋教会が支援していた時（2004～2006年）には読経供養もそろっていたというが、バラバラであることが語られている。

「サクセナ氏を中心に日本語の学習を中心にした活動が多く、初めての顔触れも多い。日本の文化への関心、日本語の学習が目的で、法座でも日本語を学びたい。日本に行きたいが中心で、法に触れた感動を話した人は少数だった。また、その青年たちの数人は日本人相手のガイドとしてサクセナ氏のもとで働いている。また、サクセナ氏の話によると毎朝10時から読経供養をしているということであったが、牧野がヒンディー語での読経供養での導師をしたところ、全員の読むペースがバラバラで普段お経をあげていないことが感じられた。木鉦の役をしていた人はサクセナ氏の信頼するリーダーだということだったが、普回向を3回読み上げるのを知らなかった。法座をしても日本語を学ぶこ

と、日本に行ってみたくことが中心になっており、とても違和感があった。またホテル代、タクシー代も多めに請求しており、ツーリストの客として扱っているようで、佼成会活動とビジネスを混同している。サクセナ氏は自分より優れた指導者になりえる人を排除する傾向があるが、4月にDDCから初めての海外修養生として自分の息子のアンケートを送りだした。帰国後はDDCの流れが変わることが期待される。また、サクセナ氏は体が弱ってきているようでもあり、「リーダーの育成が望まれる」と結んでいる。しかしながら、学林では2年の期間であるにもかかわらず、アンケートは4カ月で帰国した。

これらの報告書からも明らかのように、日本語教室は無料から有料に変わったものの、相変わらず出入りの激しい日本語教室の生徒を会員としてカウントしている事態は以前とかわらず、教えではなく、日本語や日本行きを強調している。ビジネスとしての佼成会の様子は全く変わっていない。

(2) DDCの末期の様子

2013年以降は、タイに居住し、南アジア伝道区の直轄拠点を担当する島村雅俊が主にデリーの布教支援を行う。サクセナからは研修をしてほしいとのことで、島村は研修や法座を行うが、それについては報告書の中で、以下のように描かれている。

「2013年2月24日(日)11時より『縁起観』の研修を行った。参加した約20名は多くが青年だったが、年配者も3名ほどいて、ちょっとDDCにも変化が出てきたのかな、という思いがよぎった。しかしながら、研修後の法座では、『どうしたら日本に行けますか』とか、『日本の会社で働きたいと思っていますが、どんな勉強をしたらいいですか』など、研修と関係のない、日本に関する質問が多く、いささかガッカリした。法座の最後には、サクセナ支部長から『学林の説明をして欲しい』という要望まであり、やはりDDCは日本語教室の流れの中にある、という思いを強くした。どうしても、日本語教室の延長としか受

けとめられない。道場内も、ひらがなやカタカナの50音図が貼られているし、日本地図も掲示されている。日本の絵葉書や、人形なども飾られている。その一方で、宗教的な掲示物が無い。コルカタ支部や西デリー法座には、教えを説いた掲示物があったりするが、DDCにはそのようなものは見当たらない。それに道場内に卓球台があり、研修・法座の後、青年たちがそれに興じている。以前には13時になった頃に、青年たちが日本語で『お腹が空いた』と口々に叫んだ。サクセナ支部長も、私の研修中に通訳をするわけでもないし、メモを取ったり、一生懸命聞く様子もなく、事務机に向かったり、道場内の仕切り壁に隠れてタバコを吸いに行ったりしている（タバコのおいが充満するのですぐわかる）。ここのテコ入れは相当な覚悟を以て本腰を入れないと無理だと感じられる。一方、限られた人的資源と時間的制約を思えば、それほど力を入れる意味がこの拠点にあるのだろうか、という思いにすらかられる。」

同年の7月には、島村はDDCで青年研修会を行った。「かねてからサクセナ支部長より、DDCの青年たちに仏教を教えてもらいたいという希望をいただいております、それが今回の研修会につながった。研修会ゆえ、プログラムも事前に調整し、佼成会の基本的なプログラムに沿った。研修の導入として、前回今年2月に実施した『縁起観』の研修に、どれだけの人が参加したか聞いてみたところ、1名だけであった（その1名は、今年3月にバンコクで実施した南アジア伝道区布教リーダー教育に参加したナレンダー・シン）。そのため、参加者に入会してどれくらい経っているか聞いてみたところ、23名中17名までが1カ月未満で、4名が1カ月以上3カ月未満、3カ月以上6カ月未満が1名、6カ月以上なのはナレンダーさんだけであった。この事実は、かねてから漏れ聞いている『DDCの会員とされている人たちは実は会員ではなく、サクセナ支部長が行っている日本語教室の生徒たちだ』という指摘と一致する。日本語教室に入っている時はご縁が結ばれるが、そこを修了するともうご縁が切れてしまう。サクセナ支部長は、動態の動きが激しい理由を、『デリーは都市部だから、

若い人たちは仕事を求めてインド各地に移動するから』と説明しているが、西デリー法座と比較しても動きが大きいの、それだけでは十分な説明にならなかった。この推測が事実だとすると、道場賃貸費として支援している月US\$400の意義が大きく問われることになる。サクセナ支部長への業務委託費（サポートマネー）の年内終了にあわせて、DDC道場のあり方も再検討されるべきであろう。研修会に先だって、サクセナ支部長を導師、青年リーダーを協導師にして読経供養を行ったが、まとまりがなく、協導師も鐘や木鉦を打つタイミングを間違えていたので、日頃から読経供養が実践されているようには感じなかった。これはサクセナ支部長が教師資格者であり、かつ準専従者であることを鑑みると、たいへん残念なことである。しかしながら、参加者は研修の時間は熱心に聞き、しっかりメモを取っている。一方サクセナ支部長は、研修中にも関わらず来客対応をしていて、研修に入ることはなかった。『自分も学び、次の機会に研修講師を務める』という意欲を感じなかった」と書いている。

2月の研修からわずか5カ月後の研修においてもリピーターは少なく、参加者の入会年月も浅い。このような状況の中では研修の成果をあげることは難しいと思われるが、サクセナからの研修依頼はどのような意味をもつのだろうか。推測するに佼成会の教えの学習というより、日本語を学んでいる人々の前に日本人が来て話をするという、そこで海外修養生の質問をして日本に行ける可能性を示す意味合いが強いのではないと思われる。

（3）サクセナに対する本部からの支援金終了とサクセナの支部長辞任

サクセナは活動費、賃貸費、業務委託費（サポートマネー）⁽³²⁾を本部からもらっていた。活動費の支援は2010年12月に打ち切れ、2013年12月には賃貸費支援および業務委託契約が終了した⁽³³⁾。DDC道場を閉鎖することにしたのは、直接的な理由は家主が次の契約更新から大幅な家賃アップを申し出たからであるが、サクセナがDDCで行っていた日本語教室の評判がよくないことも

一因だった。

本部としてはDDCと西デリーが入る新しい道場を設置することを考えていたが、2013年中に新しい道場を手配することができなかった。そこで、DDCの拠点用本尊を一旦サクセナの自宅で預かってもらい、2014年の早いうちに道場を探すことにし、2013年12月初旬に島村がDDCに出張し、本尊の遷座と道場備品の処分についてサクセナと話し合う予定だった。ところが、島村がDDCを訪ねたら備品のほとんどはすでに処分されており、床に敷かれたゴザの上に、本尊や開祖・脇祖の法号、過去帳が置いてあった。島村はこれを見てたいへんショックを受け、すぐに日本の国際伝道本部の水谷庄宏本部長（兼南アジア伝道区長）に電話をした。水谷も衝撃を受け、サクセナ宅で本尊を守ってもらう方針を即時撤回した。他にふさわしい場所に安置できないかとの問い合わせがあり、島村は時間的余裕もなかったので対応に困ったが、結局、西デリーのアマット宅に本尊、法号、仏具などを預かってもらうことになった。2013年4月には本部との取り決めに反故にし、公用車を無断で売却していたことも判明し、サクセナによる道場の私物化が目に見える状態であった。

2014年の1月、3月、5月、7月に島村がサクセナと面会した時には⁽³⁴⁾、サクセナは60歳までの雇用契約の継続を要求し、契約をやめたらDDCの活動はできないと言った。布教意欲がわからないとも語っていた。サクセナは平日の10時から読経供養と法座を行い、佼成会の活動を説明していると言い、先月は10名導きができたと言うが、DDCがなくなり、個人宅で場所が狭くなっているのも日本語教室の新規受講生が10名程度であると島村は受けとめた。また、サクセナは西デリーと合同でよいので、デリー中心部の交通の便がよいところで道場の物件を探してほしいと述べていた。しかしながら、西デリー法座主任のモヒンダとサクセナとの意見が合わず、物件はなかなか見つからなかった。有料の日本語教室を新しい道場で開くことは許可しないといったことも一因かと推測するが、2014年8月28日サクセナが突然支部長辞任を国際伝道本部宛に

申し出た。ここに、サクセナの入会からおよそ14年、DDCは開所して12年で幕を閉じた。金の切れ目が縁の切れ目ということを地でいったものだった。サクセナにとって佼成会とは何だったのか。単なる飯の種だったのか、ビジネスだったのか。「一粒種」になることをねらったという当初の意図があったが、本部側は日本やタイで多くの研修の機会を与えながら、それがサクセナのみにとどまり、他の会員と共有されなかった。また、サクセナ自身信仰を深めようという様子はいかがでなかった。初期には日本側に認められるためのパフォーマンスを演出したが、後半はそうしたこともしなくなった。支部長を辞任して以降、妨害はなかったとのことである。サクセナは2021年11月に亡くなった⁽³⁵⁾。享年62歳だった。

それでは次に西デリーに目を転じよう。

9 西デリーにおける布教展開

(1) 西デリーでの拠点開設と布教支援 (2008～2012年)

■西デリーでの活動開始 (2008年)

西デリーは、DDCといわば喧嘩別れし、サクセナの支部運営に同意できない人が独立し、他の会員にもよびかけて西デリー法座をたちあげたものである。6章で述べたように、2007年10月のカマルによる国伝の萩原次長宛のサクセナの行状の告発に端を発した。その内容は南アジア伝道区長の齋藤にも伝えられ、齋藤はカマルらを2008年6月にタイのバンコクで開催された南アジア伝道区の主任教育に招聘した。これは齋藤が西デリーに拠点をつくるつもりだったことを意味する。正式に西デリー法座所が開所するのは、2011年10月4日である。しかしながら、2013年7月に西デリー発足5周年記念式典をやっていることから、彼らの意識の中では、バンコクでのカマルらの主任教育の翌月、すなわち2008年7月から西デリーでの集まりが開始したとみてよいだろう。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真41 DDCから分かれて独自に始動した西デリー会員（2009年 立正佼成会提供）
最前列左がアミット・クマール，右端がシトゥー，後ろの女性がシミ・ハンダ，最後列右からカマル・クマール，2人目がモヒンダ・パル，3人目がパンガジ・クマール。



写真42 西デリーでのARMS DOWN！キャンペーンの様子（2010年 立正佼成会提供）
キャンペーンの特別大使に任命されたバンコク教会スタッフ、ケサリン・ソムリットによる説明。

西デリーが活動を開始する前年の2007年7月のバンコクで行われた本部勧請本尊の現地授与式には、デリーから拝受者として6名の人がいた。その中にはカマルとモヒンダという、のちに西デリーの中心になる人の名前がある。本部勧請本尊拝受者が西デリーにいたことは幸運であった⁽³⁶⁾。すなわち、紙ではなく、家庭用ではあるが本尊「像」があるということだからである。齋藤とサクセナとの間の葛藤・対立も激しくなり、その救済措置がDDCの本部直轄拠点預かりという扱いで、南アジア伝道区長の齋藤は西デリーに肩入れした。

■運営委員会方式の採用

DDCではサクセナ1人に権限が集中して問題が出ていたので、西デリーでは齋藤のアイディアで運営委員会（コミッティー）方式がとられた。最初の5人の運営委員会メンバーは、カマルを中心に、カマルの妻のアロカ、パンカジ・クマル（1973年生、男、以下パンカジ）、その妻のピンキ、モヒンダである。カマルとパンカジは兄弟、モヒンダは従弟である。2008年12月にシトゥーの家にカマルが来て、西デリーで行われるイベントに参加するように勧めた。そしてシトゥーがハンダを誘った。シトゥーもハンダも2005年にDDCで本尊現地授与式が行われた時に、本部勧請本尊を拝受している人で、2006年10月ころ、両者ともDDCを離れていた。そして運営委員会メンバーにシトゥーとハンダが加わり7名になった。カマルが主任（正式に発令される前だが日本語の主任という呼び名がつかわれていた。拠点長）、ハンダが副主任、シトゥーが秘書である。カマルは陸軍少佐まで上り詰めて早期退役した人、カマルの妻は看護師、パンカジは保険会社社員、ピンキは地下鉄職員、モヒンダは高校のパンジャビ語教師、ハンダは保健・家庭福祉省の国家公務員（薬剤師と栄養士免許所持）、シトゥーはアメリカン・エクスプレス社員だった。宗教的背景はみなヒンドゥー教徒である。カマルはリーダーシップのある人で、西デリーの拠点長候補だった。

法座所の場所は、カマルの実家（カマルとパンカジの父の持ち家。同所の階上にカマル家族、パンカジ家族が居住）の1階にある8畳くらいの大きさの部屋が無償で提供された。地下鉄の駅も近く、交通の便もよい場所だった。西デリーにはサクセナに不満を持つ人と新しいメンバーが集まった。シーク教徒もいた。DDCでは青年が多かったのに対して、西デリーは結婚している大人が多かった。シトゥーはDDCと西デリーの違いについて、「DDCではサクセナさんがいつも指示していた。本部とのコミュニケーションは他の人にはわからない。西デリーは個人に集中するのではなく、運営委員会メンバーがいて、本部からのメールについても、本部からこういうメールがきたがどうするかと知らせ、話し合うという透明性が魅力だった」と語る。

また、シトゥーは当時の状況について以下のように述べている。「DDCは日本語教室が目的で青年が集まったが、西デリーでは日本語教室ができる人がいないのでやらなかった⁽³⁷⁾。また、大人はそれにはあまり関心がない。そこで齋藤さんが知恵をつけて家庭教育を強調していく。大人はそちらの方に関心がある。また、サクセナさんがやったようなことは自分たちはやらないということで、西デリーは佼成会からお金をもらわずに、運営委員会メンバーが布施ということで一定金額を出し合って活動費用にした。時々日本人が来て布施してくれたものも使用した。西デリーでは法座、家庭教育、根本仏教が中心で、教えはDDCで学んだこと、日本から来た会員から学んだこと、文書は少ないが「シャンザイ」というインターネット版の国伝のニュースレター（英訳、および2011年から会長法話のみであるがヒンディー語の翻訳あり）も参考にした。またハンダさんは仏教に関心があっていろいろ本を読んでいたので、その知識を披露した。最初は週に1回、その後土日の週2回になった⁽³⁸⁾。」

■活発な布教支援・齋藤伝道区長の最終年（2009年）

2009年11月に定年で齋藤が伝道区長の職を交代するので、この年は齋藤の最

終年である。2009年の西デリーへの布教支援状況をみると（年表参照）、1月には南アジア伝道区の教務員李好史が布教助成のために西デリー訪問、3月には南アジア伝道区教務員の尾島由季子と委託布教師の水野晃三郎が西デリー訪問、6月には西デリーからハンダ、シトゥーの2名が南アジア伝道区・青年本部招聘教育参加のために、本部の渡航費支援を受けて訪日し、本部で8日間の研修および、東京の大田教会で2日間布教実習をした⁽³⁹⁾。また同じく6月には、西デリーからパンカジの妻のピンキを含む2名がバンコクで開催された南アジア伝道区家庭教育リーダー教育に渡航費支援を受けて参加、7月にはバングラデシュ教会長有富教順、南アジア伝道区教務員島村雅俊、布教助成のため西デリー訪問。9月には尾島が布教助成のため西デリーを訪問した。10月には西デリーからカマル、パンカジ・ピンキ夫妻を含む15名が南アジア伝道区お会式団参加のため訪日した。そして、カマルは訪日中に教師授与式に参加し、教師の資格を拝受した⁽⁴⁰⁾。

また、11月13日～17日までシトゥーが学林海外修養科体験入学のために訪日した。シトゥーの体験入学については本部側資料が残っている。18期生合格者（条件付）であったシトゥーが、ベジタリアンで厳しい食事制限があるため共同生活に耐えうるかを確認するためというのが目的だった。シトゥーを西デリーから最初の海外修養生候補者とみたのである。食事の問題はあったが日本語能力も日本語検定試験3級をもっており、その点ではほとんど問題はなかった。しかし、シトゥーは修養期間が1年のつもりで応募したが、2年ということがわかり、3年前に姉が病気で亡くなった後両親がショックを受け体調がすぐれず、自分が生活費をまかない、一家を支えているため、家を空けるのは、1年が限界ということでシトゥーの側から断った。

2009年には西デリーには布教支援に日本人が訪問し、また日本やタイのバンコクで渡航費支援を受けて研修等の機会をもった。滞在費は本部負担なので、日本に行きたい、タイに行きたいという人にとってはメリットでもあった。他

方、本部直轄拠点になったDDCには2月と6月に額装本尊授与式のために本部から出張があっただけである。

このように西デリーには南アジア伝道区長の齋藤が力を入れ、10月にはカマルは教師の資格を拝受した。これによって総戒名の祀り込みをすることができるはずだった。しかしながら、カマルの妻がインド政府の推薦で奨学金を得て、カナダの病院で1年間の看護実習をすることになり、妻に随伴して、2009年11月にカマルと息子もカナダに転居した。カマルは1年後にインドに戻ることを期待されていた。運営委員会のメンバーは5人になり、シトゥーによるとカマルに代わり、副主任だったハンダが主任になった。

■バンコクでの研修・家庭教育（2010年）

2010年も西デリーへの布教支援は継続し、1月には佼成会の関連団体である家庭教育研究所の丸山貴代所長を迎えて家庭教育リーダー教育および家庭教育公開講座が行われ、公開講座には約90名参加した。1～2月にかけて、西デリーからアミットを含む2名がバンコクで開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加した。3月には西デリーから2名が、バンコクで開催された南アジア伝道区主任教育に本部の渡航費支援を受けて参加した。7月には、西デリーからピンキがバンコクで開催された南アジア伝道区家庭教育講師養成講座に本部の渡航費支援を受けて参加した。

5月には「ARMS DOWN（アームズ・ダウン）」のキャンペーンの説明に国伝スタッフやバンコク教会スタッフがアンバサダーとして西デリーを訪問した。ARMS DOWNは、WCRP（世界宗教者平和会議）グローバル・ユースネットワークが、全世界で展開した、核兵器の廃絶、そしていのちを奪うために使われる軍事費の10%を、いのちを守るために使うことを要請する署名運動である⁽⁴¹⁾。

9月には西デリーから1名（ビシャル・ベルマ、シトゥーの弟）がバンコク

で開催された南アジア国際伝道センター法華経集中講座に渡航費支援を受けて参加した。また、同じく9月には、国伝スタッフの尾島他1名が、布教助成のため西デリー訪問し、西デリーでARMS DOWN！キャンペーン表彰式を実施した。感謝状とプレゼントは西デリーで用意したものである。西デリーでは、署名を1,000人以上集めた人が7人で、15人が真剣に取り組んだ。西デリー全体では1万人以上の署名が集まった。この時の出張報告書には、西デリーは規模は小さいが温かい雰囲気、バンコクでの教育参加者に刺激されて教えを学びたいという意欲が高まっているとの記載がある。DDCと異なり、学んだことを分かち合っている様子が見える。

2010年には、家庭教育の講演のほか、日本人による布教支援よりも、バンコクの南アジア国際伝道センターで行われたさまざまなプログラムに、西デリーの会員が渡航費支援を受けて参加した。西デリーではDDCのように各種支援金をもらっていないようだが、このように渡航費支援を受け、また現地での滞在費は南アジア伝道区負担であるので、自己負担が少なくバンコクに行けるというメリットは大きい。

2010年には運営委員会の構成員に変化があった。ハンダが辞めることになる出来事が起こったのである。日本人2人が布教支援に来た時に布施を封筒に入れて出したが、その一つからお金がなくなっていた。当時会計を務めていたハンダはその旨をモヒンダに報告したが、日本人が入れ忘れることはない、ハンダが抜き取ったと言い広められ、モヒンダやパンカジやピンキから責められ、それならば辞めるということでハンダは自分から辞めた⁽⁴²⁾。出張記録を点検して時期を検討すると2010年9月のことであると推定される。ここで運営委員会は、モヒンダ、パンカジ・ピンキ夫妻とシトゥーの4人になった。

■西デリー法座所の開所・海外修養生の送出（2011年）

2011年1月にはDDCからサクセナ、西デリーからモヒンダ、パンカジがバ



写真43 本部スタッフによる西デリー布教助成（2010年 立正佼成会提供）

右端が国際伝道本部の尾島由季子スタッフ、木鉦の前に座っているのがピンキ・クマール、右隣にモヒンダ・パル、男児の後ろに座っているのがピンキの夫パンカジ・クマール。



写真44 西デリー発足5周年記念の集い参加者の記念写真（2013年 立正佼成会提供）

アミット・クマールが実施している日本語クラスの受講者が多数参加。左から2人目はブラカシュ・クマール（のちに国際奉職員）。4人目は南アジア伝道区主査の島村雅俊。

ンコクで開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に渡航費支援を受けて参加した。そして1月31日～2月1日にかけて、長谷川伝道区長と国伝の萩原次長はデリーを訪問し、サクセナとモヒンダとの四者会談を行った。そこで、DDCと西デリーは同等の立場で存在することとし、代表者についてはDDCはサクセナ、西デリーはモヒンダとすることが決定された。つまりDDCの南アジア伝道区への復帰および西デリーの独立（正式な拠点設置）が合意されたのである。

この時の出張報告書に、西デリーの状況が記載されている。「西デリーは独自に運営委員会を組織して運営をしている。2008年にDDCから独立した当時は40名の会員で、2011年1月現在では150世帯になっている。道場は、DDCから最初に離れたカマル（現在カナダ在住）の自宅の1階の一室を道場としており、毎月2回、集まりをもって法座等を行っている。西デリーグループには、現在、教師資格者が不在であるため、新規の会員にどのように額装本尊の勧請をしていくか等、課題がある。また、法人格の問題もあり、現在では布施を受領しておらず、運営費は委員会の人間で出し合っている。今後もDDCとは別で存在し、布教して行きたいとの意向を示している。」この時の本部側との会合には、モヒンダ、パンカジ、ピンキ、シトゥーが参加しており、ハンダの名前はない。そしてモヒンダが西デリーの代表者になっている。また本部側の所感として、「DDCはサクセナ氏の日本語教室が機縁となった青年が中心で、信仰者としての成長があまり伺えない。西デリーはどちらかというと大人が中心になり、法座でも本当に教えが求められ、教えによって問題解決をしようという落ち着いた信仰活動が展開されている。ゆえにDDCのような派手さはないが、特にピンキ氏をはじめとした真摯なリーダーがいることは今後の可能性を秘めている」とポジティブな評価が述べられている。

2011年は、これまでのように国伝はDDC、南アジア伝道区は西デリーと個別に支援等が行われるのではなく、本部から布教助成に行った場合は必ず両方

の拠点を訪問するようになった。6月の国伝スタッフの出張報告書には「西デリーはモヒンダ、シトゥー、ピンキが中心になり、少しずつ布教が展開している。総戒名を待ち望んでいる人が多くいるが、教師の資格を持つ人がいないため、新規会員への祀り込みができない。教材、經典その他供養にかかわる仏具がすべて不足している。モヒンダさんはヒンディー語の教材がほとんどないことにもどかしさを感じ、自分で英語からの翻訳を実施している。ヒンディー語のシャンザイ（本部発行ニューズレター）が発刊されたことを聞いて喜んでいた」、「シトゥーさんは法を求める気持ちがとても強い。南アジア法華経研修参加のあと、ぜひ本部のリーダーセミナーに参加してほしい。段階を踏んで教師資格を拝受していただきたい」と言及され、今後少しでも早く、教師の資格をもつ人が必要であると課題について述べている。

この年に特筆されるのは以下のとおりである。1月にバンコクでの南アジア伝道区布教リーダー教育にモヒンダとパンカジが参加した。4月に西デリーから海外修養生としてアミットが学林に入林した。アミットはDDC時代にはサクセナから推薦を得られずあきらめた経緯があるが、西デリーで念願の海外修養生になることができた。

6月にモヒンダが西デリー法座主任の辞令を受けた。7月に西デリー発足3周年記念の集い（読経供養・法座）が行われ、約30名が参加した。9月の本部勧請式で西デリー法座用本尊が勧請され、10月に南アジア伝道区長の長谷川泰弘と教務員島村雅俊が出席し、拠点用本尊をパンカジ宅に安置し、西デリー法座所の開所式が行われた。2008年に活動を開始しながら正式な拠点開設までに3年がかかったのである。

西デリー法座の開所が遅れた理由は、カマルが、2009年11月に妻のカナダでの看護実習に随伴し、1年間の研修期間終了後、帰国すると思って待っていたわけであるが、実際にはカマル家族は帰国せず、カナダへの永住を決めたことにある。カナダに行く1カ月前の2009年10月に本部で教師の資格を拝受して、

翌11月にカナダに行ったのであるから、帰国後は西デリー法座の拠点長になることが期待されていた。帰国しないことが明らかになり、モヒンダを主任として西デリー法座が始められた。

■モヒンダとシトゥーの教師資格拝受（2012年）

2012年には、2月にバンコクで開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に西デリーからモヒンダ、パンカジ、ピンキ、シトゥーが参加した。7月には発足4周年記念の集いが開催され、約20名が参加した。10月には、モヒンダ、シトゥーが本部で教師資格を拝受した。これで、総戒名等を開眼し、祀り込みを行うことができるようになった。布教支援としては5月、7月、8月（家庭教育）、9月、12月と国伝や伝道区から日本人が訪問して布教支援が行われた。

（2）転換点としての2013年

■西デリーの活力低下と本部への資金助成の要請

2013年は西デリーにとって一つの転換点である。2月に島村は西デリー幹部（モヒンダ、パンカジ、ピンキ、シトゥー）からの聞き取りを行った。英文でかかれた報告書によると、西デリーでは会費もなく布施もなく毎月の費用はモヒンダ、パンカジ、シトゥーで各々2,000ルピーの支払いで賄っている。毎月の活動としては第二日曜と毎月最後の日曜に15時から17時まで集会を行っている。最後の日曜には幹部会議を実施している。そして年間の活動計画を示し、本部からの金銭的支援を求めた。仏教の教えに関するセミナー、家庭教育セミナーなどのセミナー関係、献血、貧者への無料医療支援、貧者への古着支援、困窮学生への奨学金、毎日曜の無料日本語教室、10月の訪日によるお会式への参加などが示されており、かかる費用の50%の本部からの資金援助を求めるものだった。金額の多いものでは無料医療支援では2～3万ルピーかかるが半分を本部がもってほしい、バンコクへの3日間のセミナーに10～15人の会員が行

きたいが航空運賃の50%と1週間の滞在費を負担してほしいなどである。2013年2月の本部あての島村の出張報告書では、特筆すべき点として、「西デリー法座幹部からは年内に実施したいプログラムへの資金助成の要望が強く出た。プログラム自体の意義は疑問を感じる面もあるが、現地幹部の布教意欲を持続させる観点から、1～2件のプログラムは多少の資金助成を行うことも可とすべきではないか。総額で10万円以内に収める程度で支援することを国際伝道本部と検討していきたい」と述べている。特筆すべきと書かれているように、これまでは西デリーは運営委員会方式で中核的メンバーが布施のかたちで活動資金を出し合っていた。これまでは西デリーからあからさまな金銭的な支援要求はなかったが、西デリーでも金銭的要求が出てきた⁽⁴³⁾。

また、島村は次のようにも書いている。「DDCに続いて、西デリー法座でも『縁起観』の研修をした。参加者は15名ほど。2月15日の幹部との面談では、毎月第2日曜日、その月最後の日曜日が定例集会日と説明されたが、この日はまさしく最後の日曜日、すなわち定例集会の日である。ところが参加者は少なく、しかもそのうちモヒンダ主任が所属している瞑想団体から4名ほど参加していた。他団体の人を誘っていただけることは有難いことであるが、会員への手どりが疎かになっているのではないか、という点が心配である。さらに面談では、その月最後の日曜日は集会を17時に終えた後、地区リーダーがそのまま残って運営会議を行うという説明だったのだが、この日集まった幹部は、モヒンダ主任、ピンキ副主任、パンカジ地区リーダーのみだった。つまり、主任以外は法座所を提供しているクマール家の一族のみである。集会後は運営会議も開かれず、それどころか運営会議を行うような雰囲気すらなく、面談内容の信憑性を疑ってしまった。西デリー法座の活力低下はかなり深刻なレベルまで達していると理解してよさそうである」と述べる。また課題として、「モヒンダ、パンカジの2家族で法座所の運営が仕切られているようで、ファミリービジネス化しているのではないか。拠点発足以来1年以上にわたって一度も月報が提出さ

れていないことから幹部育成は大変な仕事になる。モヒンダ主任は人柄はいいもののリーダーシップは期待できない。ピンキ副主任は強い性格で、一度言い始めると人の意見を受け付けない。本部に支援を求める以上、自助努力もお願いしなければならない」という。島村は2010年からインドを含む南アジア担当になるが、2013年からはとりわけインドに深くかかわっていく。布教支援で訪れるのは島村にほぼ限定されていく⁽⁴⁴⁾。

これまでみてきたように、とりわけモヒンダ、パンカジ、ピンキ、シトゥーにはバンコクでのさまざまな研修の機会が与えられていた。シトゥーは求道心にあふれた人で、2012年10月にはモヒンダとともに教師の資格を取得した。2012年末に結婚して以降は敬虔なヒンドゥー教徒である姑との関係で佼成会に出にくくなったこと、そしてモヒンダがサクセナがやったように金銭的なものに関心をもつようになったので2013年はたまに行くくらいになった。そして、同年9月には夫の仕事の関係で日本に転居した（2022年現在も日本在住である）。したがって、運営委員会からはすでにハンダは去り、パンカジ・ピンキ夫妻、モヒンダにシトゥーがいたが、シトゥーは次第に出なくなっていくので、モヒンダとパンカジは従弟の関係にあるのだから、ビジネスであるかはともかくファミリー運営になってしまっていることは事実であろう。

■元海外修養生アミットによる日本語教室の開始とモヒンダとの葛藤

西デリーにとって最も大きな変化は、2013年3月に海外修養科を卒林したアミットがインドに帰国したことである。アミットは5月から毎週日曜日に西デリー法座で、日本語教室を開くようになった。アミットは青年部をたちあげたいとして、日本語教室を始めた。2013年7月の島村の出張報告書によると、「日本語教室の参加者は変動があり15～30名で、固定参加者もいる。しかし、モヒンダら西デリー幹部からは、日本語の勉強ばかりでなく、もっと佼成会のことや仏教についても伝えて欲しいという希望がある。一方、アミットとしては、

佼成会の教えを日本語教室の中でしっかりと伝えているという認識であり、西デリー法座幹部に対しても、日頃からもっと布教をしてもらいたいという意見をもっており、両者の間に緊張関係がある。」

2013年12月の出張報告には「海外修養科を卒林したアミット・クマールさんが大活躍をしている。彼は住友系商社に勤務しながら、毎週日曜日には日本語教室と法座、計3時間を開催し、なおかつ日本語教室の生徒たちに呼びかけて街頭募金を実施、その浄財をストリート・チルドレンを対象に教育活動を実施しているNGOに寄付している。これは素晴らしい活動であるが、一方でモヒンダ主任、ピンキ副主任ら幹部による活動が盛り上がりせず、活動の再構築が必要とされている」と述べている。

2013年7月頃から、モヒンダとアミットの関係は悪化していった。アミットの言い分では、彼が無償で行っていた日本語教室以外に、モヒンダが布教活動を怠っていたからということである。アミットは主任の役にありながら布教活動を行わないモヒンダを軽視し、日本語教室の受講生たちに独自に佼成会の活動を説明し始め、それがひとつのグループに形成されていった。これはモヒンダにとっては面白いことではなく、そのため自宅を提供していたパンカジもモヒンダに気兼ねして、日本語教室の日に何の断りもなく外出し、自宅に施錠してしまうなど、嫌がらせも始まったことで、両者の関係がますます悪くなっていった。

これは他の国でもみられることでもあるが、海外修養生の経験者は本部で2年間研修（初めの1年目は語学学校通学が主）を受けてきたのであるから、自分は教えやあり方を知っているという気持ちもちがちで（実際知識量も多い）、こうしたトラブルはある意味起こりやすいともいえる。アミットの送り出しの母体は西デリー法座であるが、いくら現地の人に日本やタイでの研修の機会を与えたり、日本人が訪印しての布教支援があったりするとはいえ、やはり短期間のものである。このような状況の中で、アミットは後に西デリーからの分派

として中央デリーとなる自らのグループを作り始めた。鳥村としては、現地からの情報がアミットからのモヒンダに対する批判に偏っていることは認識しており、2013年にDDCの道場を閉めることで、本部としては新しく道場を設置することを考えているため、DDCと西デリー、そしてアミット派のグループが入る共有道場を2014年1月から開ければ、問題は収まるだろうという期待を抱いていた。

■西デリー法座所の移転とそれに伴う問題

2013年11月、西デリー法座所を無償で提供しているパンカジ宅の改築工事によって法座所が突然閉鎖された。鳥村のもとには事前連絡がなかった。もともと改築工事の計画については6月頃に聞いており、実施が決定したらすぐに連絡してもらおうよう鳥村はモヒンダに頼んでいた。ところが、実際に連絡が来たのは工事が始まる前日で、拠点の本尊はすでにモヒンダ宅に遷座した後であった。パンカジ宅の西デリー法座所には額装本尊が50体保存されてあったのだが、引越しのどさくさに紛れてその行方は不明のままである。パンカジ宅は地下鉄の駅にも近く交通の便がよかった。デリー南西部にあるモヒンダ宅はデリー市の近郊にあり、デリー中心部から地下鉄で1時間、最寄り駅からもタクシーやバスで10分かかり、交通の便が悪かった。

西デリー法座では毎週日曜日にアミットによる日本語教室が開かれていたが、この移転はアミットにとっても寝耳に水で、工事が始まったことを知らないアミットや受講生が10名以上もパンカジ宅にやってきている。この突然の出来事で日本語教室は代替場所を見つけることに苦勞し、12月末まで彼らは公園の片隅で野外教室を実施していた。アミットはモヒンダに対し、日本語教室を開催する場所の確保を頼んだが、モヒンダからは、日本語教室はアミットのプログラムだから自分たちで場所を探すようにという回答だったという。そのため、日本語の受講生の母親（バルティ・バトラ）が、2014年6月いっぱいまで

を条件に、日本語教室を実施する場所として自宅を無償提供してくれるようになった。このやり取りから、アミットも島村も日本語教室は西デリー法座の活動ではないと認識するに至ったという。

西デリー法座の活動自体もモヒンダの自宅はデリー市の郊外に位置し、西デリー法座の会員が集まるには不便で、またモヒンダの妻は2人の娘がいる家庭に見知らぬ不特定の人が入ることを好まず、自宅での集会開催に消極的で、そのため定例活動は実質的に停止した。知り合いの塾や空きスペースを借りて式典や集会を行ったため、場所が都度変更されわかりにくかった。パンカジやピンキはモヒンダのところに拠点が移ってからはあまり参加していなかった。

しかし、2014年1月にガヤで開催した「全インド布教幹部会議」では、毎月第2、第4日曜日は法座を実施している旨の報告がモヒンダからあった。どうやらこれは、アミットの日本語教室を指していたようである。西デリー法座は定例活動がなされておらず、モヒンダは自分の都合に応じてアミットの日本語教室を西デリー法座の活動として報告したり、あるいは別活動だと分けたりしているようであった。また、アミットが導いた青年の額装本尊の安置をモヒンダが先送りしていることなども含め、アミットのモヒンダに対する不信感が募っていた。島村は西デリー法座については、6月まで様子を見て、モヒンダとアミットの関係が改善されないようであれば、アミットを主任に任命し、主任2人体制として活動を分け、それぞれで布教を活性化していくことを検討していた。

2014年5月に島村はモヒンダ、パンカジ、ピンキと面談をしている。アミット側のモヒンダに対する不信があるが、モヒンダ側からもアミットに対する不信感があつた。モヒンダ側の言い分は以下のとおりである。

「アミットがモヒンダや西デリー法座幹部（ピンキ副主任、パンカジ地区リーダー）に対し、いろいろと批判をしている。彼が日本語教室を開くことは社会奉仕の一環でもあると思ひ了解したが、彼はそこで自分の部下をつくり、かつ

西デリー法座の会員がその日本語教室に参加しないことを非難している。西デリー法座の会員は別に日本語を学びたい人ばかりではないので、日本語教室への参加を強制することはできない。しかしそこがアミットには理解できないようだ。また、モヒンダや西デリー法座幹部が発言してもいないことを、『〇〇さんがこう言った』と周囲に吹聴している。彼には嘘が多く、それがもつて西デリー法座の調和が乱れている。こうしたことから、西デリー法座幹部の一致した意見として、アミットの家は東デリーに位置しているので、彼のグループを東デリー法座（ないしグループ）と位置付け、西デリー法座と一線を画していただきたい。」

島村は、「今回のモヒンダらとの面談では、アミットに対する不信感は強く、関係の修復は難しいと感じた。アミットは自己主張が強く、かつ学林修養科で勉強したという自負があるため、どうしても日本ではこうしているという姿勢になりがちで、モヒンダらとの調和が保てない。アミットには日本語教室の受講生らを中心にすでにグループができています。またアミットの日本語能力は今後のインド布教において貴重な人材となりうるはずである。双方の不信感がこれ以上増長しないようにアミットグループを東デリーグループとして認知し、額装本尊勧請が30世帯に達した時に東デリー法座として申請したいがどうか」と本部に伺いをたてている。島村は7月にもデリーを訪れ、西デリー法座発足6周年式典に参加し、その後西デリー法座幹部と打ち合わせをしたが、サンガ運営に関してモヒンダ、パンカジ、ピンキとアミットの溝は深く、日本人専従者が数カ月デリーに滞在するつもりで本腰を入れないと、関係修復は困難であると感じた。

モヒンダの家は妻が不特定多数の人の出入りをきらうので、創立記念日やインドの仏教行事の際は、知人宅や公民館のような施設を借りて活動しているが、転々としている状況なので、遠いことに加えて、会員の集まりが一気に落ち込んでいた。

隣家が新築工事を行った際の振動により、パンカジ宅が改修工事をする必要が生じ、それを機に1階部分を賃貸店舗に改造することになった。次の場所が見つかるまで一時的にモヒンダの自宅に法座所を移したが、パンカジからは改修後に賃貸費（当初1階部分全部で400ドル、のち一部屋で月250ドルの提案）を払ってくれるのであれば、道場として貸すことができるとの申し出があった。島村は水谷国伝本部長と相談し、幹部宅に賃貸費を支払うと、いろいろな誤解が生じるのでかえって布教上マイナスになるという観点から、断った。

2013年12月にはDDCの賃貸が終了するので、同年8月からDDCと西デリーの双方が入るかたちで道場候補を探していた。西デリーは私宅であるため、いつでも自由に利用できるわけにはいかず、2014年1月からDDCも西デリーも一つの道場を共有できるように2013年中にふさわしい物件を探すことが合意されていた。2013年中には見つからず、2014年にずれ込むことになった。

前述したように2014年8月にはDDCのサクセナは支部長を辞任し、同月にモヒンダからも道場を共有しないという返答があった。9月には新道場の賃貸契約が成立した。また、2014年12月に中央デリー法座が新設されたことで、デリー支部は西デリー法座と中央デリー法座の体制となった。同月にアミットに預けていたDDCの本尊が新しいデリー支部道場に安置された。しかしながら、西デリーは道場を共有しないという回答がモヒンダからあり、モヒンダ宅に自宅用本尊と西デリーの拠点用本尊の両方が安置されていたが、並存はいけないとの本部からの通達により、西デリーの本尊は2014年12月に島村が預かり、タイで保管している。

西デリーでは2015年7月に周年の集い（10名参加）、11月に開祖生誕を祝う街頭でのパレードを行い、西デリーから海外修養生として、ディワカール・クマールも出している（翌年日本語能力試験3級不合格のために帰国）。2016年には6月に第4回世界サンガ結集参拝に7名が参加、7月には発足8周年の集い（12名参加）を行った。そして2017年2月に、モヒンダは西デリー法座の主

任辞任を島村に申し出た。

したがって、現在のデリー支部は中央デリー法座のみが所属している。それでは次に、中央デリー法座ができるようになる経緯とそこでの展開や取り組みについてみていこう。

10 中央デリー法座の設立と展開

(1) 中央デリー法座設立の経緯

■道場の物件探し

これまで述べたように、2013年3月に海外修養科を卒林したアマットが帰国し、5月から西デリー法座所で日本語教室を開始した。これは西デリー法座青年部の立ち上げになると期待されるものであったが、本部で佼成会の教えを学んできたアマットと在家でありかつ佼成会について包括的な教育を受けてこなかったモヒンダとの間で、布教方針に差異が生じてきた。西デリーの会員の多くが、佼成会の教義よりも日本やタイに行く機会の方に関心が高かったこともあり、モヒンダは日本（本部）向けにアピールできる活動を重視した。一方、アマットは日本語教室の生徒を対象に、根本仏教の教義や法座、佼成会の社会活動を説明するようになった。こうした中で、モヒンダとアマットの間関係が悪化し、さらに2013年11月にパンカジ宅からモヒンダ宅へ西デリー法座所が移転し、日本語教室の会場探しに苦勞したアマットとのあいだの亀裂がさらに深くなった。

日本語教室については、2014年1月から6カ月という期限を区切って、生徒の自宅（母親がバルティ・バトラ）を無償で借りることで継続することができたが、アマットはもはやモヒンダと一緒に活動できないと決意し、日本語教室の生徒やこれまでの人間関係を頼ってハンダとコンタクトを取り始め、徐々に独自のグループを形成していった。島村はサクセナやモヒンダと話し合い、デ

リー法人の共有，デリー道場の共有について調整を図る努力をしたが，アミットからは早急な道場賃貸を強く求められ，さらにアミット，ハンダ，バルティ・バトラ（1969年生，女）が5月から独自に物件を探し始め，島村に紹介するなど，島村自身もそれなりの圧力を感じていたとのことである。島村としてはデリー布教の将来を鑑みた際に，日本語能力試験1級の資格をもち，かつ海外修養科で学んだアミットの存在は大きく，将来的に彼には佼成会の学林の本科（本科は3年の年限で，本科生は職員扱いで給与を支給。本科卒業後はスタッフとして雇用，外国人は日本語能力試験1級が条件）で学んでもらうことに本部として期待があり，内々の合意ができていたため，アミットの意見には耳を傾ける必要性があったという。

■中央デリー法座の発足とデリー支部道場の賃貸

法人の共有化，道場の共有化についての話し合いは，まずは2014年7月にDDCの法人登録は，年次報告をデリー市政府に長年にわたって提出していなかったため失効していることがわかった。8月にはサクセナは支部長を辞任し，またモヒンダからも道場を共有しないという意思が示された。そこで，アミット，ハンダらが独自に捜してきた物件で本部と調整することになり，その物件は，ハンダやバルティ・バトラの自宅と近く，またDDCや西デリーよりもデリーの中心部に位置していたことから，アミットグループを「中央デリー法座」と名付けることにした。道場は，「デリー支部道場」と呼ぶこととし，2014年9月，本部決裁を経て賃貸契約を結び，その年の12月に中央デリー法座を発足させ，西デリー法座と2法座体制になった。中央デリー法座の主任にはハンダ，副主任にはアミットが任命された。ハンダはDDC時代の2005年にすでに本部勧請本尊の拝受者であった。なお，道場の移転にともない，DDCと変則的であった名称をあらためデリー支部とした。デリー支部の本尊として，DDCからアミット宅に一時遷座していた本尊を安置した。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真45 中央デリー法座の会員（2014年 立正佼成会提供）

手前がかつてDDCを経て西デリー法座に所属していたアミット・クマール、左がブラカッシュ・クマール、ついで同じくDDCを経て西デリー法座に所属していたシミ・ハンダ、右端がバルティ・バトラ。



写真46 主任辞令を拝受するシミ・ハンダ（2014年 立正佼成会提供）

左は国際伝道グループの島村雅俊次長。

この時の道場は家主が経済的事情により道場賃貸物件を第三者に売却せざるを得なくなったため、道場から歩いて5分の家主の知人の物件を紹介してもらい、2015年3月に移転し、本尊の遷座式を行った。新道場も半地下であるが、以前より明るく、83m²とやや広く、トイレもよりプライバシーが保て、重要文書などを保管できる事務所も設置できた。賃貸条件も以前のもと同じで、かつ清潔で、好条件の物件だった。地下鉄の駅から徒歩10分の所に位置している。

■アミットの結婚と日本行き

アミットは日本語能力試験1級に合格し、2013年3月に海外修養科を卒林して帰国した。日本語能力試験1級が学林の本科に入るための条件だが、それをクリアしているアミットには本科に進むように本部からは期待されていた。2013年3月の卒林時にはアミットには妹が3人おり、そのうち2人が適齢期であるが、父親がいないため、一家の父親がわりとして、「ダウリー」という結婚のための持参金を準備する必要がある、そのために働かなくてはならないということで本科受験を1年遅らせるということになった。そして1番上の妹は2013年12月に結婚し、2番目の妹は2014年末には結婚ということになり、その問題は解決した。しかし、帰国後、観光ガイドをしている時に知り合った日本人女性と恋愛関係になり、2015年2月に結婚した。インドと日本のどちらに生活基盤を置くかを考えたようだが、相手はインド旅行をただけでヒンディー語はもとより英語も話せない。また彼女がインドで生活する自信がないということから、同年7月に日本に移住した。こうしてアミットの学林本科行きはなくなった。

結婚後日本への渡航準備が忙しくなり、日本語教室も終了し、活動に参加する頻度が落ちてきた。あらたに道場を借りてアミットのリーダーシップに期待していたところ、ハンダは梯子を外された感じになったという。中央デリー法座は発足したものの、時々道場を使用した活動を行うだけとなり、実質的には

ほとんど活動を行わないまま時間が経過していった。なお、道場はハンダの家から徒歩15分のところにあり、宝前への朝の給仕は、ハンダが出勤前に行っていた。

■モヒンダの西デリー主任の辞任・プラカッシュ・クマールの雇用

モヒンダは時折デリー支部道場に参拝したり、中央デリー法座の活動に参加してくれたりもしていたが、他の西デリーの会員の多くは顔を出さなくなった。また西デリーから中央デリーに移ってくる人が10名ほどいた。こうしたなか、西デリー法座は徐々にフェードアウトしていき、2017年2月にモヒンダから主任退任の申し出があり、受理された。

一方、ハンダは、「自分は国家公務員として働いているので、せっかく道場を借りることができたのにスタッフがいないと有効に活用できない。スタッフの雇用が必要だ」と訴えてきた。当初の計画のDDC、西デリー、中央デリーで道場を共有するという目論見がはずれ、実際には中央デリーだけが道場を使用することになったので、月のうちほとんどが施錠されたままという状態は望ましくないのは事実だった。ハンダはプラカッシュ・クマール（1988年生、男、以下プラカッシュ）の雇用を強く推薦した⁽⁴⁵⁾。彼はアミットの日本語教室参加を契機に、2013年6月に入会した。2016年に海外修養科25期を受験して落ちていたが、その後も佼成会の活動に参加し続けたことをハンダが評価したのである。プラカッシュは当時アマゾンの顧客サービス部門のチームリーダーで、顧客からのクレーム受付も担当していた。島村もプラカッシュは誠実な人柄なので、スタッフにふさわしいのではないかと思い、2017年7月から「業務委託契約者」として雇用した⁽⁴⁶⁾。勤務態度が十分評価できたことで、2020年に採用試験を受けてもらい、2021年1月から「国際奉職員」として勤務できるようになった（60歳までの終身雇用）。なお、プラカッシュは2019年9月に訪日し、本部勸請本尊を拝受した。また同年12月にバンコクで開催された現地教師資格

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真47 デリー支部の宝前・デリー支部で行われた教団創立79周年記念式典での読経の様子
(2017年 立正佼成会提供)
中央が島村雅俊南アジア国際伝道センター長、左がプラカシュ・クマール。



写真48 宝前のある部屋の様子・教団創立79周年記念式典後に行われた壮行会で、学林海外
修養科25期生として来日する直前のアンシュ・チョウドリー (2017年 立正佼成会提供)
右奥に立っているのがシミ・ハンダ、ついでアンシュ・チョウドリー。

拝授式で教師の資格を拝受した。教師資格を得たことで、中央デリーで総戒名の開眼ができるようになった。

■ハンダの生活史と佼成会

ここで中央デリー法座の主任となり、2022年12月にデリー支部道場での現地教師資格拝授式で教師資格を得て、デリー支部の支部長に任命される予定のハンダという人物についてみておこう⁽⁴⁷⁾。これまでDDCや西デリーの事例からも明らかなように、リーダーはその集団に大きな影響を与えるからである。また、ハンダは2004年10月にDDCで入会し、2006年10月頃にDDCを去り、2008年12月に西デリー法座に参加し、そこを2010年10月頃離脱し、2014年5月から中央デリー法座の前身にかかわるといふデリー布教の三つの集団とのかかわりを持った人である。

ハンダは1965年に生まれ、2022年現在57歳である。大学卒業後、公務員となった。もともとは事務職で職員になったが、研修を受けて伝統医薬と栄養士の資格を取得した。そのため介護施設や公立病院に派遣される時期があった。最後は本省に戻り、高齢者福祉（公営老人ホームの管理運営）を担当している部署に配属され、2020年5月、55歳で保健・家庭福祉省を早期退職した。

佼成会への入会は2004年10月で、DDCのメンバーだったヨガ教室で知り合った知人から、「日本語が学べ、また日本人と交流できる」ということを言われ、サクセナの日本語教室に参加した。DDCで日本人会員と会った時に、笑顔とやさしさに深く感銘を受け、その時に日本語を勉強できるということより、自分の精神性を成長させることができるのではないかと期待するようになった。宗教的背景はヒンドゥー教だが、さまざまな宗教に関心があり、ひとつにこだわっていない。現在は佼成会がメインになっている。朝夕読経供養をしているが、やると気持ちすがすがしくなる。また中央デリーの活動はほとんどすべて参加している。

「日常生活で佼成会の教えをどのように生かしているのか」という問いには、「人にやさしく接することを志している」。また、「入会して自分が変わったと思うことがあるか。ある場合、それはどのような点か」という問いには、「かつては短気で自分勝手だったが、人にやさしく接することができるようになったと思う」と答える。「佼成会の教えや実践で気にいっていることはあるか。ある場合、それは何か」という問いには、「仏さまが私たちのすぐそばにいて、いつでも私たちを見守り導いてくださっていると感じ、それが私自身の安心感につながっている」。「佼成会にどのような点で魅力を感じるか」という問いには、「人にやさしくすること。特に人の気持ちに寄り添おうという教えがとても魅力的に感じる。教えだけでなく、これまで触れてきた日本人会員たちが皆やさしかったので、教えが実際に生きていると感じた。精神性が豊かなのだと思うし、私もそのような人間になりたい」と答えている。

「日本についてどのように思うか」という問いには、「人知れず努力を重ねて、経済発展を遂げてきたことに敬意を感じる。日本人の勤勉さ、やさしさが、大きなチームワークにつながって成果をあげているのだと思う」。「佼成会が日本の宗教であることについての魅力はあるのか」という問いには、「魅力はある。日本では仏教が日常生活で活かされていると思う。ただ、日本も美しい国だと思うけれど、やはり同じアジアの国なので、私自身はヨーロッパの文化に関心がある」。「佼成会のご宝前をみて違和感をもつ点はあるか。それはどこか」という問いには、「違和感はまったくない。大聖堂のご宝前（聖壇のこと）はとても素晴らしいし、日本人会員のご宝前も、仏さまを本当に大切にしていると思う。ただ日本でみたお盛物は、私たちインド人にはとてもできないと感じた。たいへんな技術力と経験が必要だと思う」。「インド人の気質に合わせて、変えたほうがよいと思う点はあるか」という問いには「変えない方がいいと思う。日本のよさがあらわれているから。それが佼成会の魅力だと思う。それよりも、もっと頻繁に勉強会を開催して欲しい」。「どのような点をアピールしたら佼成

会が広まると思うか」という問いには、「まずは団体登録をしっかりとしなければならぬ。会計管理がきちんとできないと、よいことをしていても多くの人たちにアピールできない。最近ではインド政府も、宗教団体に厳しくなっている。団体登録さえ整えば、もっと多くの人にアピールできると思う」。

「お役をしているうえでの課題はあるか」という問いには、「特に感じない。ただ私自身は組織運営が苦手なので、理事会などの運営面はそちらに長けている人にやってもらいたい。理事になる気はない。信仰を深めるためのお役に専念したい」。カースト制度に関する問いには、「私自身はまったく気にならない。相手がダリット（不可触民）なのか、あるいはバラモンなのかなど、知りたいという気持ちもない」。

日本訪問については、「国際伝道部の主催したリーダー教育（2017年、2018年）に参加した。リーダー教育では、法華経を学んだ。それ以外でも、佼成会の基本的なことを学んだが、やはり人を尊敬しよう、思いやりの気持ちをもとうという姿勢が一番心に響いたし、それをデリーの布教では大切にしたいと思う」、「タイでの研修を受けたことはない」。「本部への希望はあるか」という問いには、「実践につながる勉強会をもっと開催して欲しい」と答えている。

またハンダはDDC、西デリー法座、そして中央デリー法座というデリーにおける佼成会の三つの組織にかかわった経験があるので、その特徴について聞いた。

「DDCのサクセナさんは、最初の頃は佼成会のことや、インド仏跡の話などをたくさんしてくれて、私自身とても勉強になった。ただ、私たちが日本からの訪問者と直接連絡を取り合うことを嫌い、またお金のことについても不透明なことが目立ってきたので、他の会員たちと一緒にサクセナさんと話し合いを重ねた。しかしサクセナさんの態度は変わらず、特にDDCで活動していた若い人たち（主に学生）に対して私たちの批判をするようになったと聞いたので、DDCから離れて行った。

西デリー法座には、DDCで知り合ったシトゥーさんに誘われて参加するようになったが、日本人が来る時以外に西デリー法座の活動はあまりなく、教えを学べることもなかったの、さほど魅力を感じていなかった。西デリー法座の会員は、教えよりも日本に行くことに関心があったと思う。それでもカマルさん、モヒンダさんとはDDC時代からの知り合いだったので、頼まれたら古い友人の一人としてお手伝いをしなければならない、という気持ちはあった。それがあつた日、モヒンダさんが私の批判をしているという話を耳にし、もともと西デリー法座の活動に魅力を感じていたわけでもないの、それならもう行くのをやめようと決めた。

アミットさんが学林の学びを終えて帰国してきたことで、彼から再び佼成会の活動に誘われた。アミットさんは佼成会の教えをよく学んでいたの、私も彼からさまざまなことを教えていただいた。それは自分の精神性を成長させることにとても有益であり、DDCの時から求めていたものだったから、あらためて佼成会の活動に参加することにした。そのアミットさんが日本人と結婚して日本に行ってしまったことは、とても残念だった。

デリーでは、多くの会員が日本に関心を抱き、日本に行けるチャンスを狙っていたと思う。しかし私自身は、これまでさまざまな国を旅行して、日本を観光することにはさほど関心をもっていなかった。それよりも、佼成会の教えを学ぶことにより、自分自身の精神性を成長させることができることに魅力を感じていた。それはこれからも続けたいし、また中央デリー法座は、佼成会の教えに関心のある人たちを中心に活動をしていきたいと思う。日本に行けると誘えば、多くの方が会員になるかも知れないが、そうするつもりはない。幸い、佼成会本部もそれを理解してくれているので、地道に教えを学び、分かち合っていきたいと思う。」

ハンダのあり方は、DDCのサクセナや西デリーのモヒンダとはリーダーという点でも一線を画している。ハンダは「精神性の成長」というように、スピ



写真49 老人ホームを慰問するシミ・ハンダ（2016年 立正佼成会提供）



写真50 デリー支部青年部員から近隣に居住する路上生活者へ毛布や古着を配布（2019年 立正佼成会提供）

リチュアル系にも関心がある。リーダーがどう考えるかによって集団の方向性は影響を受ける。それでは中央デリーでの活動の特徴について次にみておこう。

(2) 中央デリー法座の活動

中央デリー法座は2014年12月に開所したが、会員世帯数は設立初期の2015年2月には38世帯、2022年6月時点では59世帯である。全員世帯数は多くはなく、これまでの数を競う方向性と一線を画している。

中央デリーでは定例法座や主要行事を行っている。主要行事は降誕会、成道会、涅槃会、開祖生誕会、開祖入寂会、脇祖報恩会などのほか、現地のものとしてブッダ・プルニマ（仏陀の生誕会・成道会・涅槃会が合わさったもの）、および周年の集いなどが開催されている。

また、宗教的活動以外にも社会貢献活動や家庭教育講座などより広い活動をしている。非会員も関心をもちそうなテーマでのハンダによる講話もある。まだ小集団ではあるが、これらは社会的認知の獲得のためにも役立っていると思われる。中央デリーで着目されるのは、日本やバンコクに研修に行った人がその成果を発表したり、他の会員とそれを共有していることである。ここでは読経供養・法座といった毎月の定例活動や行事（ただし、行事の後に特記すべきことがある場合は記載）を除いて、対社会的活動や社会的認知を求めている活動、教えを深めるための活動などについて着目して、年ごとに抜き出してみよう。なお、デリー支部道場の近くには地下鉄の駅があり、その高架下にホームレスの人々や、学校に通っていない子どもたちもいる。貧困層の子どもやホームレスへの対応はそうした背景がある。また、一見宗教とは関係のなさそうなタイトルの講座もあるが、そこでも教えと結びつけて話が展開され、それによってまだできたばかりの中央デリー法座の活動に非会員が関心をもつきっかけにもなっている。それでは年ごとにみてみよう。

【2015年】

家主の都合で3月に現在の道場に移転した。5月には佼成会のことを地域に知らしめることを目的に、道場近辺の子どもを招いて絵画展を実施し、75名以上の子どもが参加して「仏さま」「平和」をテーマに思い思いの絵を描いた。7月に社会慈善活動として貧困家庭の子どもたちへの給食サービスを実施し、約100名の子どもたちが久しぶりのご馳走を喜んだ。なおこれらの活動はすべての費用を中央デリー法座の会員たちとその友人（非会員）が負担した。8月には日本の家庭教育研究所から講師を迎え、家庭教育講演会を実施し、約50名が参加した。

【2016年】

1月に「若さを保つ秘訣：感謝の心で日々を過ごす」をテーマに、ハンダが仏教講座を開催した。道場の維持管理費を捻出するため、参加費1人25ルピー（約50円）を徴収し、非会員も含め約30名が参加した。4月に「エイジ・リバー（年齢若返り）プログラム」を行い、約10名が参加した。5月には定例法座以外でも青年リーダーが集まって読経供養及び儀礼儀式研修を実施した。10月には道場近くの老人ホームにて衣類・生活用品の寄付活動を実施した。この社会福祉活動は開祖入寂会を記念してのもので、ハンダ以下9名が参加した。12月には全インド布教幹部会議（デリー会場）の受け入れを行った。

【2017年】

1月にはハンダが全インド布教幹部会議で学んだことを説明したほか、昨年6月にバンコクで開催された法華経集中講座での学びも共有した。2月にはハンダを講師に、瞑想修行を行い、16名が参加した。4月には日本から家庭教育研究所の講師を迎えてデリー支部道場にて家庭教育講演会を実施した。約40名の会員、非会員が参加した。5月にはハンダを講師に「仏性」について研鑽を行い、約10名が参加した。7月には国際伝道グループ主管の「リーダー教育」に参加したハンダが、本部で学んだことを会員と共有する会合を開き、8名が

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真51 デリー支部道場で行われた全インド布教幹部会議の様子（2016年 立正佼成会提供）
左に立っているのがシミ・ハンダ，前列奥に座っているのがバルティ・バトラ，中列手前に座っているのがモヒンダ・パル。



写真52 全インド布教幹部会議で研修をする島村雅俊南アジア国際伝道センター長（2016年 立正佼成会提供）
中央奥に立っているのが通訳をするコルカタのシュモン・バルア国際奉職員，前列手前に座っているのがシミ・ハンダ，ついでバルティ・バトラ，前列奥に座っているのがモヒンダ・パル。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

参加した。8月には19日から21日まで、コルカタのシュモン・バルア全インド担当教務員がデリー布教助成を実施した。期間中、支部道場で教会勧請本尊(額装本尊)4体の開眼供養を執り行い、また新規入会家庭での本尊安置式の実技指導を行ったほか、20日には仏教研修会も開催し、28名が参加した。また、同月には道場近くの公園にて植樹を行った。

7月1日付でデリー支部の業務委託職員になったプラカッシュに依頼し、毎月1日、15日に国伝から毎月発行しているオンライン上のニュースレターである「Living the Lotus (ヒンディー語訳)」の会長法話の抜粋を、また毎月4日に同じく開祖法語録の抜粋をそれぞれFacebook「RKK Central Delhi」に掲載し始めた。

9月にはハンダら支部リーダーが私立孤児院を訪問し、学習用品を寄贈した。脇祖報恩会のあとに佼成新聞の「らしんばん」を教材に、法座主育成研究会を行った。10月には釈迦牟尼仏命日の集いを執り行った。読経供養のあと、ハンダが「世界平和のために、自分たちの精神性を高めよう」と呼びかけた。同月にインドで盛大に行われるヒンドゥー教の祭事(光の祭典:ディワリ)にあたり、ストリート・チルドレンを道場に招き、会員5名がスポンサーになって文具とスナック菓子を配布した。11月には開祖生誕会の後、ハンダによる「精神性の向上」研修会が行われ、15名が参加した。12月24日のクリスマス・イブに、道場近隣で路上生活をしている家族の子ども7名を招き、菓子などをふるまった。

【2018年】

1月には月例法座後、7名の会員が参加し、道場近辺のホームレス家庭10家を訪問し、毛布を寄付した。2月にはシバ神生誕の祝日である14日、道場周辺の非就学児童約10名を道場に招待し、菓子類を配布するとともに、涅槃会の読経供養を行った。4月には家庭教育研究所講師を迎え、第2回家庭教育講演会を実施した。昨年よりも20名以上多い46名が参加した。5月にはハンダが講師

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真53 南アジア伝道区青年リーダー教育参加者からの学びの報告 (2018年 立正佼成会提供)



写真54 南アジア伝道区青年リーダー教育参加者から学びの報告を受けての法座 (2018年 立正佼成会提供)

となり、第2回家庭教育講演会のフォロー勉強会が開催された。会員、非会員を含め22名が参加した。5月には、デリー支部より2名がバンコクで行われる南アジア伝道区青年リーダー教育に参加した。また、精神的なストレスを発散することをめざし、ハンダが主導してダンス・セラピーを実施し、約10名が参加し、ダンスを楽しみながら交流を深めた。6月には、道場にて「十界」をテーマに島村による研修・法座を行い、18名が参加した。同月ハンダが講師となり、「仏性」をテーマに研修を行い、24名が参加した。

7月には3月にバンコクでの布教リーダー教育に参加した会員が講師を勤め、「リーダーシップ」をテーマに研修を行い、10名が参加した。8月にはコルカタのシュモン教務員が会長法話に基づいて「正見」の研修を行い、ハンダら8名が参加した。同8月には、布教リーダー会議を開催し、島村と幹部8名が参加してデリー特別市への団体登録について意見交換を行った。9月にはシュモン教務員が「中央デリー法座発足4周年の集い」に参加した。また、会長法話に基づいて「正思」の研修を行い、ハンダら12名が参加した。10月、開祖入寂会の式典を厳修し、読経供養の後、会員による体験説法、そして法座を実施した、22名が参列した。11月には開祖生誕会を執り行った。プラカッシュが開祖の足跡をパワーポイントで紹介したのち、参集した会員12名が読経供養した。その後、道場近隣で路上生活をしている子どもたち約20名に誕生日ケーキを振る舞い、またそのうち5名に毛布を寄贈した。12月には青年5名がセーターなど防寒着の古着を持ち寄り、近所に住む貧しい子どもたちに寄贈した。

【2019年】

1月には、(2018年12月にガヤで行われた)全インド布教幹部会議で説明された2019年次教団計画大綱や諸情報を支部リーダー6名と共有した。同日にはハンダが主催して「ヨガ・瞑想と心の平安」をテーマに学びの場を開催し、会員、非会員ら約20名が参加した。3月、支部道場にてヨガの講習会を実施し、約20名が参加した。同3月、島村が「四諦の法門・十二因縁」の研修及び法座

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真55 デリー支部で行われた家庭教育講演会（2018年 立正佼成会提供）

手前でマイクを手に立っているのが通訳のシュバラ・ラージプト、ついで奥に立っているのが家庭教育研究所の鈴木克枝所員。



写真56 家庭教育講演会での質疑応答の様子（2018年 立正佼成会提供）

左でマイクを手に立っているのが家庭教育研究所の鈴木克枝所員、ついで中央が通訳のシュバラ・ラージプト。右手に英文の家庭教育のポスターがみえる。

を実施し、約15名が参加した。

4月には釈尊降誕会を道場で執行、12名が参加した。プラカッシュがスライドを使って釈尊の一生について発表をした他、道場周辺の貧しい子どもたちに文具の寄付を行った。同4月、道場にて日本から講師を招いて家庭教育講演会を実施し、会員、非会員ら28名が参加した。この講演会に参加した人からは、「親子のコミュニケーションが不足していると感じた」、「重大な問題こそ家族で共有すべきなのに、重大な問題ゆえ私たちはそれを話し合うことを避けていることに気づいた」などの感想が寄せられた。またプラカッシュの手どりが実り、久しぶりに西デリー法座の会員が家庭教育講演会に参加した。この講演会を機に、導きが1名できた。

5月にはブッダ・ブルニマを行った。読経供養とハンダによる挨拶のあと、仏陀の生涯をスライドで振り返り、最後に法座を行った。6月には島村による仏教学習会を開催。18名が参加した。同月瞑想修行会を行った。7月には孟蘭盆会の読経供養を行った。また、バンコクでの布教リーダー教育に参加した会員による体験説法も行われた。8月にはハンダによる老化予防の一環として、顔面マッサージの講習会を行った。会員、非会員約18名が参加した。こうした活動は佼成会の布教とは直接的に関係しないが、水道代、電気代など道場の維持運営費を捻出するため、ハンダが工夫して行っている。9月には脇祖報恩会を実施した。同式典に道場近辺で路上生活を送っている子どもたち約20名を招き、プラカッシュがその子たちに長沼脇祖の生い立ちを説明し、慈悲の大切さを伝えた。9月には中央デリー法座発足5周年記念式典を開催。読経供養の他、8月にバンコクで行われた青年リーダー教育に参加した2名の会員がその体験を分かち合い、続いて法座をした。最後には誕生日ケーキで祝い、プログラムを締めくくった。

10月には道場周辺に在住しているストリート・チルドレン約10名を招待し、道場にて開祖入寂会を行った。なおこの子どもたちには、プラカッシュが断続

インド・デリーにおける立正佼成会の展開



写真57 デリー支部で行われた青年セミナーで研修をするシミ・ハンダ（2019年 立正佼成会提供）



写真58 青年セミナーでの法座（2019年 立正佼成会提供）
中央奥で右手をあげているのがプラカッシュ・クマール。

的にヒンディー語と英語を教えている。入寂会では「庭野開祖も小学校卒で、苦労しながらも世界平和に取り組んだ」ことを子どもたちに紹介し、「希望をもって、努力をして未来を切り開いていって欲しい」と励ました。また最後に、子どもたちに菓子をプレゼントした。

10月にはデリー支部青年セミナーを開催。11名の青年が集い、「佼成会の概要」や「国連持続可能な開発目標（SDGs）」について学び、「デリー支部青年宣言」でSDGsから3つのテーマを選んで、2020年に具体的な取り組みを行うことを決議した。青年セミナー終了後、ハンダ以下布教リーダー8名が集まって「布教リーダー委員会」を結成した。同委員会の目的は、デリー支部の運営や勧請申請、南アジア伝道区主管教育参加者の人選などを民主的に行うようにするためである。11月には7名が自主的に仏跡参拝を行い、その様子は法座で報告された。12月には全インド布教幹部会議が各拠点での開催形態に変更されたため、支部でリーダー会議が開催され、「私たち会員の信行方針」の意義をかみしめた後、教団計画大綱について理解を深めた。また、青年部会議が開催され、同じく「私たち会員の信行方針」を学んだ他、2020年次の活動について話し合った。2019年は法人関係の団体登録手続きについての会議が頻繁に行われた。

【2020年】

1月には読経供養・法座のあと、リーダー会議を開催し、バンコクでの青年リーダー教育参加者の人選を行った他、団体登録の準備について話し合った。（密室で人選されないということがポイントである。）2月に青年部会議を開催し、7名が参加した。社会に貢献できる活動を中心に青年部活動の柱を立てることで合意し、具体的な計画について打ち合わせを行った。引き続き、夕方に大人の会員5名も加わっての法座をし、Living the Lotus 2月号の会長法話を学んだ。また、別の日に青年部員7名が集まって、市街地で「一食を捧げる運動」⁽⁴⁸⁾について説明しているリーフレットを配布した。

2020年3月からはコロナ禍の中で活動が制限される。それではコロナ禍でどういう取り組みがなされたのかをみていこう。

(3) コロナ禍でのオンラインの取り組み

デリー支部道場もインド政府の外出禁止令の影響で、2020年5月31日まで閉鎖が決まった。また、2020年3月に教団本部が教会の閉鎖を通知してきたことから、デリー支部も道場を閉鎖し、活動を休止した。6月からFacebook, WhatsApp⁽⁴⁹⁾, Zoomなどのオンライン・コミュニケーションツールを活用しながら、対面できないことを補う取り組みが行われた。読経供養、法座、セミナーなどはオンラインで徐々に再開していった。オンラインでの取り組みについては、プラカッシュの役割が大きい。

【2020年】

5月にはプラカッシュがデリー支部のFacebookページにLiving the Lotus 英語版をアップし、WhatsAppで青年部法座を行って会長法話を学び、互いの気づきについて話しあった。同月にはハンダが中心となってZoomを使った法座が行われた。参加者は8名だった。その時に参加者の提案でヨガの練習も行い、自宅での生活が続いている中、サンガのつながりを深める機会となった。6月にはZoomを活用してのオンライン法座、及びストレス解消のためのヨガ・レッスンを行った。また、Living the Lotus をWhatsAppで共有し、感想や気づきをそれぞれ書き込むオンラインでのテキスト法座を行った。また、青年部が中心となってWeb法座を行った。

7月にも、WhatsAppを利用してLiving the Lotusを配布し、それを読んだ上でテキスト・メッセージによる法座を行った。同月にはFacebookのRoom機能を用いてオンライン法座を行い、14名が参加した。8月にはWhatsAppを利用してLiving the Lotusを会員に配布し、テキスト・メッセージで感想や気づきを分かち合った。8月には、7月30日に移住先の米国で亡くなったハンダの父

を偲び、Zoomを活用して会員有志で読経供養を行った。9月には、Zoomを利用してオンラインで脇祖報恩会を執り行い、18名が参加した。

10月にはZoomを利用してオンラインで開祖入寂会を執り行い、12名が参加した。同月には、オンラインを活用し、Living the Lotusの会長法話を学んだ。11月にはZoomを利用してオンラインで開祖生誕会を執り行い、7名が参加した。同月末にはオンライン法座を実施した。Living the Lotusの会長法話を読み合わせ、気づきを発見した。13名が参加した。12月には成道会の読経供養・法座をオンラインで開催した。12名が参加した。同月には全インド布教者幹部会がオンラインで実施された、同月には布教リーダーの父の逝去を受け、オンラインで慰霊供養を執り行った。

オンラインでの慰霊供養が2件行われたが、これははじめての試みである。またコロナ対応初年度であるため内部に限られたオンラインの使用であった。

社会貢献活動にかかわるものとして、12月23日、デリー支部有志5名が道場周辺の路上生活者に毛布を寄付した。これは市内で凍死者が出たことを知ったハンダの呼び掛けで急ぎょ実施されたが、急な呼びかけにもかかわらず日本円に換算すると2万円を超える寄付が集まり、12名の毛布を購入・寄付することができた。

【2021年】

2020年が突然のコロナ禍の中で、手探りで対応を行ってきたのに対し、2021年にはだいぶ慣れ、内部向けのものばかりでなく外部に向けてもオンライン配信がおこなわれた。また内容についても充実してくる。会員以外の人々を意識したハンダによる健康セミナーも非会員に佼成会のことを知らせるのに有効であった。

1月にはハンダによるオンライン健康セミナー（栄養のある食材について）を開催され、70名以上が参加した。セミナーの前に読経供養をし、創立者である庭野日敬開祖の紹介をし、佼成会のことを広く知ってもらう機会ともなった。



写真59 デリー支部道場宝前の前に置かれた路上生活者への毛布寄贈活動を示すボード
(2022年 立正佼成会提供)



写真60 デリー支部道場に集められた路上生活者への寄贈用の毛布 (2022年 立正佼成会提供)
右奥がブラカッシュ・クマール国際奉職員。

また24日にはオンライン法座を開催し、こちらには16名が参加した。新しく参加する人が少しずつ増えてきており、オンライン法座が根付いてきている。2月には、27日にオンラインで月例法座を開催し、約10名が参加した。同日、引き続き健康セミナーを開催。ハンダが講師となり、「怒りを抑える」をテーマに講演した。こちらには非会員を中心に70名以上が参加した。これらの非会員対象の健康セミナーは、その冒頭で佼成会のことを少し説明することから、よい種まきの機会となっている。また、「怒りを抑える」というテーマも、コロナ禍でストレスが高まる中で、時宜を得たテーマであった。ハンダが、「佼成会は、普通に考えたら自分にとって都合の悪い現象を、前向きに受けとめて功德に変えてしまうところだ」と発言した。表立って信仰のことを出さずに、ハンダは仕事上会得した知識を元に皆が関心のある健康にかかわるテーマを取り上げ、そこで教えによるとらえかたにも言及した。またオンライン講座であることは参加しやすいという点で垣根を下げています。

3月にはLiving the Lotus英語版、ヒンディー語版を、SNSを通じて会員に配布した。7日にはオンラインで教団創立記念式典を開催。読経供養の後、会員による録画メッセージ（祝辞）を紹介し、法座を行った。12名が参加した。ブラカッシュが、庭野光祥著の『開祖さまに倣いて』（英語版）の第1章をヒンディー語訳し、SNSを通じて会員に配布した。27日には、ハンダが社会貢献活動の一環として「栄養のある食材」と題してオンライン講座を開催。非会員を中心に60名以上が参加した。

5月1日から2週間にわたって「コロナ感染者への病氣平癒祈願供養」を執り行った。参加者は平均5名である。Living the Lotus英語版、ヒンディー語版を、SNSを通じて会員に配布した。さらに、16日にバンコクでの「布教リーダー教育」受講生事前学習会を開催。学習会のテーマや目的、プログラム概要の確認をし、Zoom通訳機能の使い方について説明した。30日には月例法座を開催し、読経供養の後、布教リーダー教育受講生7人が学びを共有したほか、

コロナ禍で経済的に困窮している家庭に気持ちばかりの支援を行うことについて話し合った。プラカッシュが、『開祖さまに倣いて』英語版の第4章、5章をヒンディー語訳し、SNSを通じて支部リーダーに配布し、それを読んだの気づきにかかわる法座を行った。

6月12日にはハンダが講師となり、「Covid-19後遺症に効果のある食材」と題するウェビナーを開催。70名以上が受講した。7月10日の命日にオンライン式典を開催。その際、会員の希望により「法華経学習」を実施した（オンラインにすることによってバンコクにいる島村ともつながり、島村が法華経の講義を行った）。16名参加した。25日には定例法座をオンラインで開催。12名が参加した。法座ではプラカッシュがミニ説法を行った。

8月には、デリー支部でも15日に「戦争犠牲者慰霊・平和祈願の日」のオンライン式典を開催。7名が参加した。また、29日には月例法座及び8月に亡くなった会員の慰霊供養を行い、16名が参加した。プラカッシュが、Living the Lotusのヒンディー語版と英語版を、デリー支部のWhatsAppグループに投稿し共有した。

デリー市内のコロナ感染状況がずいぶん改善したことから、9月11日より道場を開館。プラカッシュが日々の宝前への給仕、読経供養を始めた。但し、念のため5名を超える集いは自粛した。

9月にはプラカッシュが、Living the Lotusのヒンディー語版と英語版を、デリー支部のWhatsAppグループに投稿し共有した。また、『開祖さまに倣いて』の第10章、第11章をヒンディー語に翻訳し、布教幹部と共有した。脇祖報恩会では読経供養の後、オンライン法座を開催し、脇祖の生涯に思いをはせた。13名が参加した。

10月には、開祖入寂会をオンラインで開催。読経供養の後、開祖の功績を偲ぶ映像資料（英語）を視聴し、その後法座を行った。11月には、開祖生誕会をオンラインで開催。読経供養の後、開祖の功績を偲ぶ映像資料（英語）を視聴

し、その後法座を行った。

12月にはオンラインで開催された「全インド布教幹部会議」を受け、18日に島村がオンラインでフォローアップを実施した。特に「信行方針」を法座でとりあげ、来年次計画についてさらに具体的に話し合った。また、年末の30日は青年部員3名が道場清掃を行った。

中央デリーでは、2021年は現地リーダーが相談し、何かしらの工夫をしながらオンライン活動を続けている。ハンダが公務員時代の知識を生かして、コロナ禍の時節にも適した健康セミナーを非会員も対象にオンラインで行っており、それに佼成会の教えの要素を入れている。オンラインで非会員がかかわることができることも敷居を低くしているのではないと思われる。プラカッシュは書籍の翻訳をし、SNSを通じて毎月新しい知識の提示があり、それを共有し、読んで感じたこと、気づいたことについての法座を行うなど、新しい展開がみられる。そして、特定の人に集中せずに、月例法座も毎回法座主が交代して役割を果たすなど、とてもよい雰囲気が醸成されているという。また、タイ在住の島村がオンラインでかわり、「法華経学習会」が開催できたことも新しい展開である。中央デリーの特徴として、セミナーなどで得た知識は自分の中だけにしまわず、会員が相互に共有する方向性であることは、これまでDDCや西デリーではみることのできなかつたポジティブな展開であると思われる。

2022年4月、デリー支部は正式に道場での対面活動を再開した。一方で、オンライン布教も継続して行っている。対面にまさるものはないかもしれないが、今回コロナ禍で活用しなければならなかつたツールによって有効に情報発信をすることができ、人をつなげる役割も果たすこともわかつた。

■中央デリー法座の取り組みの評価

中央デリーはDDCから分派した西デリー、そしてそこからまた分派した集団であるが、アミットが日本に行ってしまったことは痛手だったが、ハンダを中心にDDCや西デリーではみられなかった要素がみられる。これまで展開過程を追ってきてもきわめて民主的であり、たとえば日本やバンコクへの研修者も特定の人の権益ということではなく布教委員会を組織し、合議方式で決めていく。これについては、これまでのDDCや西デリーの反省もあり、本部側の意向も反映していると思われる。しかし、ハンダはおそらく他者を排除するのではなく、協調して皆の力を合わせてやってくタイプだと推察する。佼成会のデリー布教は新しい段階にきて、数を誇るようなかたちではなく、日常的な活動も地道に行われているようである。それには、ハンダという人材やプラカッシュという専従者を得た意味も大きい。デリー支部はようやく安定して行事やセミナー、法座を行うようになり、また他者への支援活動も自分たちの力で行っている。ハンダはスピリチュアルなことにも関心がある人で、分かち合うことのできる広い心の持ち主であるように思われた。2017年と2018年にハンダが国際伝道部の主管する各年2週間の「リーダー教育」を日本で受講したことで、教えや儀式、儀礼、実践を学び、中央デリー法座が安定した活動を実施することにつながっていった。また、バンコクでの伝道区主管リーダー教育に参加した人たちが、インド帰国後もリーダーとして引き続き活動をし、その結果現在は、ハンダを中心に10人ほどのサブリーダーが活躍している。

これまでのデリーの佼成会の課題だったリーダー育成も行われ、なにより日本やタイでの研修の成果を他者と分かち合い、またそれによって研修を受けた人自身が成長するプロセスがあるのではないかと思われる。

これまでのDDCや西デリーみると、日本やバンコクでの研修や日本からの布教支援も含めて、その場かぎりのものようであった。異なる展開がみえはじめたことは今後のデリーの新しい息吹であると思われる⁽⁵⁰⁾。

おわりに

インドのデリーにおける佼成会の展開に関して、これまで詳細にみてきた。デリーへの拠点設置は2000年12月のサクセナの入会に始まり、2002年7月にインド初の拠点DDC（デリー・ダルマセンター、インド連絡所）ができた。2005年12月に支部に昇格し、2014年8月のサクセナの支部長辞任によってその幕を閉じた。デリーでは西デリー法座（実質的には2008年7月、正式な拠点開所は2011年10月）がDDCから分派したが、2017年2月にモヒンダが主任辞退を申し出、西デリー法座はなくなった。他方、西デリーから中央デリーが分派し2014年12月にハンダを主任として中央デリー法座が新設された。このようにDDC、西デリー、中央デリーといわば分派が発生し、母体がなくなっていく状況になった。

デリー布教はなぜこのようなことになったのか。デリー布教の一番の問題は、「一粒種」サクセナの問題がある。そこで、DDCの展開とその結末について時期区分してみよう。

（1）DDCの展開とその結末

DDCの展開過程を段階区分して概観しよう。

I 期：サクセナの入会と板橋教会の支援による活発な活動期（2000～2004年）

2000年12月、日本人相手の観光ガイドをしていたサクセナが佼成会に入会した。仏教発祥の地インドという点に加えて、紹介者が佼成会の開祖庭野日敬の葬儀の際の霊柩車の運転手だったことによって縁を感じ、佼成会側としては期待をもった。2002年6月の本尊勧請式の時に東京の板橋教会（齋藤光央教会長）を尋ねたことが機縁になり、板橋教会から毎月多額の支援金、物品、古着、文房具の送付や板橋教会会員の派遣による布教支援を受けるようになった。齋藤は教会長に着任して2年で2003年12月に他部署に異動になったが、教会長交代

後も1年間はデリーへの板橋教会による支援が継続した。サクセナは日本語教室を開催し、それを布教の手段としており、そこには日本語や日本に関心をもって集まった人が多かった。古着や文房具の貧民層への配布、日本人との交流、日本語が話せる機会など、デリーの会員（実際は日本語教室の生徒がほとんど）にとって板橋教会の支援は大きな力になり、DDCの歴史の中で最も活発な時期だった。

Ⅱ期：サクセナをめぐる問題が顕在化した時期（2005～2007年）

教団組織の点では2004年12月に南アジア教会が設置され、インドはその直轄拠点となった。教会長には元板橋教会長の齋藤が就任した。2007年12月には南アジア伝道区となり、齋藤が初代伝道区長になった。この時期には、次第にサクセナの過大な金銭や物品の要求、不正使用などが明らかになった。またサクセナはリーダー育成をせず、会員が日本人会員と直接連絡を取ることも禁止した。本部は教育の機会を提供するがそれを会員と共有する傾向はなかった。また、海外修養生の存在を日本語教室で宣伝しながら、のちに息子を送るまでは誰も出さなかった。会員というのはほとんど日本語教室の生徒であることも明らかになった。情報を独占し、金銭的な不正疑惑の中で、サクセナ問題を本部に直訴する人、カマルがあらわれた。さらに、天道という日本にある中華系宗教団体に本部から賃貸費がでていたDDCを拠点として又貸ししていたことも発覚した。

Ⅲ期：西デリーの分裂とDDCの本部直轄化（2008～2010年）

板橋教会時代からサクセナとの関係がよかった齋藤とサクセナの間が決裂した。齋藤はカマルらをタイのバンコクでの南アジア伝道区主催の主任研修に呼んだが、それはカマルのグループを西デリーとして育てたいとの意図があった。DDCと西デリーの対立の中で、国伝はDDCを本部直轄拠点とすることで収拾を図ろうとした。また、サクセナが入会動機として語っていたこととは異なり、サクセナはかつてインドの霊友会の支部長であり、「一粒種」としてのチャン

スを佼成会に求めて近づいたことも発覚した。本部直轄化によって国伝側はDDCを額装本尊の授与式を通じて育成しようとするが、南アジア伝道区主催の研修の機会を失い、日本やタイに行けることが魅力だった人々は離れた。サクセナは金銭的には相変わらず過大な請求をしていた。

Ⅳ期：南アジア伝道区への復帰とDDCの消滅（2011～2014年）

DDCと西デリー、国伝幹部との話し合いのもと、2011年1月にDDCの南アジア伝道区への復帰と、西デリーの独立が決まった。西デリーは2008年7月から活動を始めており、南アジア伝道区からの日本人派遣による布教支援や現地会員のタイでの教育などの支援があったが、諸事情があり正式な認可は遅れた。DDCは相変わらず日本語教室が中心で、日本語を学び日本で働きたい、日本に行きたいという動機の人々が多数で佼成会の教えを中心としたものではなかった。2011年にDDCから初めて海外修養生を出したが、それはサクセナの一人息子であり、しかも2年間の修養期間を貫徹せず4カ月で帰国した。家族のビジネスとして息子が跡を継いでいくという可能性もなくなり、サクセナの体調がよくないこともあって活力がなくなった。サクセナには活動費、賃貸費、布教委託費（サポートマネー）がでていたが、活動費は2010年12月に終了し、2013年12月に賃貸費と布教委託費も終了した。本部側としてはDDCと西デリー法座が共有する道場の賃貸を考えていたが、2014年8月にサクセナは支部長を辞任した。いつまでもお金の問題がつきまとったDDCだった。

（2）西デリー法座の展開とその結末

西デリー法座に目を転じると、ここはサクセナの支部運営に意を唱える人々が分派・独立したものである。2007年10月のカマルによる国伝へのサクセナの行状に関する告発状に端を発する。2008年6月のカマルのバンコクでの主任研修の後、7月から実質的には西デリー法座が始まる。場所はカマルの実家で一室が無償で貸与された。西デリーでは運営委員会方式を採用し、そのメンバー

が布施として資金を出し合って運営した。また、情報を一人が独占するのではなく運営委員会メンバーで共有した。2009年は齋藤の伝道区長の最終年で、西デリーに対する活発な支援が行われ、日本人が布教支援で訪問したり、渡航支援をうけて日本やタイでの研修に行った。2010年には日本から講師が来て家庭教育の講演会があったが、それ以外はバンコクでの様々な研修プログラムに参加することが主だった。2011年4月には西デリーからアミットを初めての海外修養生として送り出した。2011年10月に西デリーは正式拠点として開所した。開所が遅れたのは、拠点長（主任）と目されたカマルが妻の研修についてカナダに渡航し、予定の1年をすぎても帰国せず、結局は永住することになったことが大きな要因であり、モヒンダが主任になった。

幹部会員の布施によって活動費を捻出し、運営委員会方式でやってきた西デリーであるが、2013年になると活動計画に対して本部からの資金援助を要請するようになった。また、2013年3月に海外修養科をおえ、日本語能力検定1級を取得して帰国したアミットが日本語教室を始めた。2013年11月に改修工事のため、法座所がパンカジ宅から交通の便が悪いモヒンダ宅に拠点が移転したことによって活動はさらに不活発になった。アミットとモヒンダは布教方針の違いから関係が悪化した。また、モヒンダは2014年8月に新しい道場ができて、共有しないと回答し、活動は縮小し、2017年2月に西デリー主任を辞任した。こうして西デリー法座も消滅した。

(3) 中央デリー法座の展開

アミット派は西デリーから分派し、中央デリーをたて、そこにかつて西デリーの運営委員会に入っていたが、2010年に西デリーを離れたハンダに加わってもらうように頼み、ハンダを主任、アミットを副主任というかたちで2014年12月に中央デリー法座ができた。ところがアミットは観光ガイドをしている時に知り合った日本人女性と2015年2月に結婚、7月には日本に移住した。西デリー

から中央デリーに移ってきた人もいたが、現在ではハンダと国際奉職員に採用されたプラカッシュが中心に活動を行っている。デリー支部道場はDDC、西デリー、そして中央デリーで共有する方向で本部は考えていたが、結果として中央デリーのみになった。しかしながら中央デリーの活動はDDCとも西デリーとも異なり、まだ会員数は少ないながらも日本やタイでの研修参加者の民主的な選定、研修結果の会員間の共有、リーダー育成への取り組み、ボランティア活動など対社会に開かれた活動など新たな方向性を模索していることが感じられる状況になった。

南アジアの「一粒種」は日本と当該国との経済格差もあり、金銭の問題が伴いがちである。デリー布教については、すでに日本の新宗教である霊友会に加入した経験があり、500名を導いて支部長になっていたサクセナが、大勢の中では芽がでないと思い、意識的に他教団で「一粒種」になる機会を探していたことがある。そうなるに仏跡参拝のガイドをしていた時になぜ日本人はインドで生まれた仏教に関心があるのか、ということから仏教を学ぶ機会をさがしていたというのとは全く異なる状況がうかびあがる。筆者の2013年の聞き取り調査で、サクセナはすでに霊友会で日本に招待され、法華系教団の聖地の身延山や七面山を訪れ、霊友会での訓練も受けていた。そして、いみじくも筆者の質問にたいして語っていたように、佼成会ならば自分は一粒種なので、もっとチャンスがあると思ったのである。佼成会は霊友会からの分派教団であるから似ている側面もある。当初の近づいてくる動機からして、このようにしかけられた事例はこれまでみたことがない。初期においてはサクセナも佼成会の教えを説いていた様子があり、儀式儀礼のやり方の伝達も行われていた。したがって初期に日本から来た人々は感激したのである。サクセナは日本人相手のガイドをしていたこともあり、どうしたら日本人が喜ぶかについても熟知していた。パフォーマンスは上手、話も上手だった。

ビジネスとして、金を稼ぐことを目的に佼成会にかかわってきたサクセナは他の会員が直接日本の会員や本部と連絡をとることを忌避し、リーダーができることを極力排除しようとしてきた。これにはお金に関する不明瞭さが発覚することを恐れるということもあったようである。したがってよい資質の人は拒否され、離れていく結果にもなった。

無料日本語教室の新聞広告をみて人は集まってきた。日本や日本語に対する関心は高かった。インド人にとって日本はよいイメージで、発展している国であり、日本に対する尊敬の念がある。特に1945年に広島・長崎に原爆をおとされたのに、経済復興したということについて学校で学習するので、そうしたことに對しても尊敬があるとのことである。南アジアの他の国も日本の宗教が布教していくにあたってポジティブな要因の一つは日本という国の存在である。親日的な傾向も強い。そこからいかに宗教としてもアピールしていくかが課題でもあり、またそこにどのような人がかかわるのかという問題もある。デリーにおいても日本やタイでの研修の機会が与えられ、日本から布教支援に訪れるが、それらが必ずしも効果的に機能したとはいえなかった。そこで学んだことの共有ということは学んだ本人にとってもそれを聴く他の会員にとっても重要である。これがDDCでは全くなされず、本部からの支援を受けて日本やタイに行く機会を与えただけのような扱いであった。西デリーも日本やタイに行くことに関心のある大人の人々の集まりが主だった。今回中央デリーの事例をみて興味深かったのは、日本やタイで学んできたことについては、必ず報告会が行われ、分かち合いが行われることである。なかなか難しかったデリーでの佼成会の布教展開であるが、新しい展開の糸口がみえてきた。

前述したように、インドでの佼成会の布教拠点、デリー以外に、コルカタ、ガヤ、パトナがある。コルカタはバングラデシュ経由で入会した人によって始まり、主としてバルア仏教徒の間に佼成会の教えが広まっている。またコルカタの拠点を尋ねた青年からガヤやパトナへの布教が広まった。これは新仏教徒

と言われるカースト最下層の人々がヒンドゥー教のカルマの世界（カーストは固定）からのがれるために、仏教徒になった人々が構成員である。これらは仏教徒への布教になるが、デリーとは全く異なった展開を示している。今回はデリーのみになってしまったが、コルカタとガヤについては、個人への綿密な聞き取り調査を行っているので、いずれ稿を改めたい。

註

- (1) 第二次大戦後、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒が対立し、1947年にインドとパキスタンが分離独立した。インドを間にはさみ、西パキスタンと東パキスタンに分かれた。西パキスタンでは使用言語はウルドゥー語、東パキスタンはベンガル語である。1971年に東パキスタンがバングラデシュとして独立、これは西パキスタンに政治的主導権をにぎられたベンガル人としての民族的アイデンティティを基盤にしたものである。バングラデシュには人口の0.6%の仏教徒がおり、少数民族の仏教徒もいるが、その多くはバルア仏教徒である。コルカタとバングラデシュとは元々ベンガル地方として人の行き来があり、言語も同じベンガル語である。
- (2) 当時のインドでは、立正佼成会の招聘状があった方が、日本への短期滞在ビザが取得しやすかった。本部を訪問する際には、日本での滞在費が本部もちであるという魅力があった。また、タイでの研修においては航空運賃の補助や場合によっては全額補助、滞在費が無料であるという利点もあった。
- (3) コルカタ・ガヤではコルカタ支部長のシュモン・バルアの尽力によって、極めて質の高い調査が可能であり、様々な人からインテンシブな聞き取りができた。デリーの場合は、もともとの中心人物であったサクセナがすでに布教意欲を減退させ、他のリーダーも育成しておらず、サクセナと青年部リーダーという人からの聞き取りを行っただけである。西デリーでは法座の集まりに参加して、参加者からの話を伺ったが充分なものではなかった。その他、学林・海外修養科から帰国したばかりのアミット・クマールからの聞き取りを行った。したがってデリーについては情報が少なかった。今回デリーの佼成会については様々な資料を探索し、追加の聞き取りを行い、謎解きの世界に入った。
- (4) 2013年3月に実施した調査でのサクセナからの聞き取りによる。
- (5) 2001年3月のサクセナの本部および板橋教会での研修後の感想文に「私と佼成会の出会い、きっかけは、今から4年前に遡ります。日本の旅行者の藤井さん（当時ヤナセ、現ハクゼン）という方の観光ガイド・適訳をさせて頂いたのが始まりです。以来、藤

- 井さんとは手紙などで交流が続きました」とあるので、1997年頃と推定した。2013年の聞きとりでは、サクセナは1999年3月と言っていたが、検討の結果、2001年の文書の方が正しいのではないかと思い、1997年説をとった。
- (6) 博善は1887(明治20)年から続く葬儀社である。1986年に藤井の父の教海が取締役社長に就任、1999年7月に本社を東京都神田錦町に移転(神田博善)、2005年に藤井城が取締役社長に就任した(神田博善のHP <http://www.hakuzen.co.jp/profile/history.html>より)。佼成会の海外布教課長あての2001年6月6日のメールでは藤井城の肩書は営業統括部長になっている。インターネット上の情報では、藤井は2022年1月現在56歳とあるので、1966年あたりの生まれで、2000年当時は30代半ばの年齢であった。庭野日敬の葬儀の際の霊柩車の運転手を務めることはありうるが、一介の運転手でもなかった。
- (7) サクセナの入会年については、1999年説と2000年説があった。佼成新聞にも1999年、2000年と異なる年で記載されているものがあり、またサクセナ執筆の*DHARMA WORLD*の英文記事(2015年)では1999年となっていた。筆者が2013年にサクセナにインタビューした時にも、入会は1999年と語っていた。また本部で作成した資料も1999年となっているものもあった。今回、さまざまな資料にあたり、サクセナの入会年は2000年であると特定できた。この時期が重要になるのは、庭野日敬開祖が1999年10月に亡くなるが、その前か後かということとかわることだからである。これはサクセナを佼成会に紹介した藤井が開祖葬での霊柩車の運転手であったことも関連する。*DHARMA WORLD*の記事には、サクセナが本部を初めて訪問した時、庭野日敬は入院中だったとも語られている。日本語を学ぶ経緯についても筆者が聞いたものと異なっている。のちに明らかになるように、サクセナは佼成会に入会する前に霊友会の支部長であったのだから、日本の仏教を知らないわけでもなく、サクセナが自分の位置を特別にするためのパフォーマンスとしてみても、あながちありえないことではない。
- (8) 結果としてサクセナは、リーダー育成もしなかったし、地区での展開もしなかった。また、書籍を他の人に提供することもなかった。
- (9) コンピュータ教室については他の出張報告書や日本人訪問者から聞いたことがない。ただし、2003年5月に西南アジア幹部錬成会がバンコクで行われインドから4名参加(渡航費80%補助)したが、その際、インド連絡所のパソコン購入費用と経典印刷費を本部から寄贈とある。2004年に入会したインド人女性シトゥーも日本語教室のみに言及していた。実態があったかどうかは不明である。
- (10) 本部からの支援金は、2002年7月から月の活動費100ドル、賃貸費300ドル、2003年からは活動費年間1,000ドル、賃貸費300ドル、板橋教会からの支援金は6月1,000ドル、8月からは毎月1,000ドルで、2003年は合計10,600ドル、2004年からは活動費毎月200

ル、賃貸費300ドル、板橋教会からの支援金1,000ドルで、年間18,000ドルになる。2005年からは板橋教会からの支援金がなくなったのに対し、賃貸費を600ドルにあげ、臨時支援の名目で月に700ドル、年間で18,000ドルと、おそらくサクセナの強い交渉によって、板橋教会からの支援金分を本部が負担し、額面は変化していない。

- (11) シトゥーとは2013年3月の西デリー法座での調査で面識はあったが、2022年9月に日本で聞き取りを行うことができた。彼女のおかげで、出張報告という日本人側の短期出張での印象のみならず、当時DDCでどのようなことが行われていたのか、インド人の視点から見ることができた。彼女は重要なインフォーマントとなった。なお、ここで言及されているように、実際にサクセナから東デリーを任されるというようなことはなかった。
- (12) 小柳和史は第4回の時に同行した国際伝道グループ次長からの勧めで学林に入学することになり、現在佼成会の職員である。したがって人生においても転換点を構成した。
- (13) 法人管理や会計に意識を払っていないことが、お金よりも導きという姿勢のあらわれではない。サクセナの金銭の問題はあとあとまで大きな問題となる。この時点ではこのような印象を与えたということである。
- (14) 1カ月後の第5回布教支援の際、前述したように鳥村は、祀り込みされていない数百もの総戒名が保管されていたのを見つけた。また後述するシトゥーによると日本人会員が来た時に祀り込みを行っているとの証言もあり、サクセナが祀り込みに歩いているということはあまり考えられない。日本人が来る時のサクセナのパフォーマンスに騙されているともみることができる。
- (15) インドでは効果があるならさまざまな神々を自宅に勧請することについては抵抗がない。
- (16) 佼成会の先祖供養がインドで受容されやすいという考え方は間違いではないか。さまざまな宗教のものを置くのは一般的なもので、何か効力がありそうならばやりたいということで、先祖供養を理解しているのではないのではないか。かたちとして総戒名を含む3点セット（写真10参照）の祀り込みをしたからといって先祖供養を理解したとはいえない。形だけを見ると間違ってしまう。
- (17) カーストは大きく分けると上位からバラモン（僧侶・司祭）、クシャトリア（王侯・戦士階層）、バイシャ（商人階層）、シュードラ（上位3カーストに奉仕するカースト）、そしてその下にダリット（不可触民）がいる。サクセナのカーストについては、出張報告書の中にクシャトリアと書かれている時もあるが、インドを訪問した国伝スタッフにバラモンと説明した時もあった。2013年に筆者が尋ねたところバイシャと答えた。シトゥーによるとサクセナはバイシャであるという。カーストについても人によって操作していたのもサクセナならありうるのではないかと思われる。また後に霊友会のインド担当者が、サクセナはバイシャだからビジネスが得意といった話を聞いてなる

ほどとも思った。

- (18) 本部勸請本尊は、導きが3家以上、活動に定期的に参加し、供養や法座にも熱心に取り組んでいる家庭が対象である。
- (19) シトゥーがこのように言っていることを鳥村に提示したところ、サクセナはDDCを始めた当初は、かなり積極的に佼成会の教えを説いていたと記憶していると語る。シトゥーが言うように、「自分が変われば相手が変わる」という話はよく会員にしており、「朝の挨拶をする」「ハイという返事をする,」「履物を揃える」という庭野日鑑会長の指導である「三つの実践」については、サクセナは日本語教室の生徒によく話していた。最初はサクセナも教えに対する感動があったのだろうと思うが、自分がインド布教の中心にいないと不安になり、本部が他の人をサブリーダーとして育成しようとしていったころから、徐々におかしくなっていくように思うと述べている。
- (20) 教会長インド仏跡参拝研修団は、2008年以降はデリーに行ってもDDCを訪問していない。一説によるとサクセナからの物品の要求が強くなり、そのためDDCには行かなくなったという話もある。またコルカタでの布教が拡大していき、2007年11月にコルカタ法座所が開所したので、コルカタの会員との交流が主体となっていく。教会長インド仏跡参拝研修団には、現在は任用3年目の教会長が参加している。
- (21) 「教師」は個人に与えられる資格で、英語では、Dharma Teacher と訳されている。本人による導きと導きの子の導きが合計で10家以上、導きの子の少なくとも1家が本部勸請本尊を拝受していることが条件である。また、法座主や儀式儀礼の作法を習得していることが基準となっている。具体的な役割は、総戒名、もしくは額装本尊のうちの総戒名を準備し、開眼供養（神入れ）を行うことが一番大きなものである。儀式の中核を担うことも重要な役割である。
- (22) 齋藤は2022年8月の筆者への書面での回答の中で、「法人資格取得のために弁護士と契約したが、10万円が最高額の相場を100万円支払ったが、ほぼ全額サクセナが搾取した」と述べている。
- (23) サクセナの息子のアンキットものに日本語検定1級を取得し、現在はインドの日系企業で働いている。
- (24) シトゥーは「サクセナさんが日本人会員と直接連絡をとってはいけないというのは変だと思ったが、それより佼成会の教えに興味があった。他の人に感謝というのを教えられたので、間違った人でも感謝することを実践してきた。こうしたことは日本から来た会員による説法や研修から学んだ」と述べている。
- (25) シトゥーの姉は2004年10月に出産したが、妊娠中だったので2004年であったことは確かであるという。
- (26) サクセナは2013年の筆者との面談で、ネパールでの事故、主任教育へのカマルらの招聘についての不満を述べていたのでサクセナにとっては恨みのある出来事である。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

- (27) 2008年にサクセナの息子のアンケートが願書を提出したが、とりさげた。これはなぜかと思っていたが、サクセナは形だけそれに対応するようにしたものと思われる。サクセナの息子は高校卒業後、大学入学を選んだ。日本語教室の生徒に対しては海外修養生の可能性を言っておきながら、サクセナは身内以外を出すつもりがないことがわかる。
- (28) 出張報告書に記載されている2009年2月に行われた霊友会についての水藻による聞き取りでは、全インドに14,000人の会員があり、内1,000人がデリーに居住している。インド国内のデリーを含めた7つの都市に拠点があり、デリーが統括している。支部長（曼荼羅を拝受した幹部）は全インドで50人ほどおり、内15人がデリーにいる。法人は1979年にSocietyを取得している。8年ほど前から日本人の常駐スタッフはいない。センターで雇用されているのは運転手を含め7名、給与は全額日本側が負担している。年に3～4回日本からスタッフが派遣され、講習会等を開いている。年に3～4人が日本に招聘され、教育を受けている。費用は全額日本側で負担されている。現地での収入はインド人会員からの月額5ルピーのみが収入源になっており、日本からの支援なしには運営はできない。霊友会には布施のシステムはない。霊友会では、インドに進出するにあたり、言語以外には何も変化させる必要がないと認識しているとのことで、日本のものをそのまま受け継いでいる。10年ほど前から総戒名はヒンディー語に翻訳したのもも用いており、会員の希望により日本語かヒンディー語かを選んでいる。
- (29) 身延山には日蓮宗の総本山久遠寺がある。七面山は七面大明神を祀る山として法華経に帰依する多くの信徒が登詣する聖地である。
- (30) 「法名入心」といって漢字で総戒名や戒名の千体修行をする。外国人でも筆で漢字を書く。これについて、筆者はブラジルの霊友会の調査をしたが、ブラジル人は「絵」といいながら筆で字を書いていた。ブラジルでも経典は現地語に訳されていたが、基本的な修行や実践は日本のものを踏襲している。
- (31) 額装本尊の中の総戒名には父方・母方もしくは夫方・妻方の姓を記入（印字）するのが原則だが、現地より「姓を明らかにすることで出身カーストが判明するため、姓ではなく名（ファーストネーム）による記入を認めてほしいとの要望があった。庭野日鏡会長より特別の場合にかぎり、教会長の判断によって上記の措置をとることへの許可があった。
- (32) サポートマネーは南アジア教会長（初代南アジア伝道区長）の齋藤光央が2006年から始めたものである。齋藤の退任後、雇用にふさわしい制度を国際伝道部と人事グループが話し合いを重ねてきた。その制度変更之际には、「60歳までの終身雇用となるため、教団にとって有意な人材のみを新制度（現在の国際奉職員制度）で継続雇用する。正式雇用となると教団が責任を負うことになるため、トラブルを生みそうな人との契約は、ここで一区切りつける」という話し合いがあった。サクセナはそのため、「国際奉職員」として選ばれず、業務委託契約の打ち切りとなった。

- (33) 2013年3月に筆者がサクセナからの聞き取り調査をしていた時も、本部に支払いを継続してくれるように頼んでもらえないかとサクセナが筆者に言った。同行の国伝スタッフの三浦志津代が筆者は調査研究に来たもので、そのような立場の人ではないと言ったところ、2001年のネパールでの事故、2008年に齋藤がカマルらをタイでの主任研修に呼んだことについて言及し、その点を恨んでいたのではないかとも思った。
- (34) インドは外国人が観光ビザで再入国するためには2カ月、間をあげなければならなかった。
- (35) サクセナ死亡の報は2021年11月16日にモヒンダから伝えられた。死亡日の正確な日にちや死去に際しての詳細はわかっていない。
- (36) 2007年の次の本部勸請本専授与式は2009年で、それ以降は3年に一度バンコクで現地本専授与式が行われる。インドの拝受者は、2009年5名、2012年4名、2015年13名（このうちには4名のガヤの会員、1名のパトナの会員を含む）で、これはすべてコルカタ支部に属する人々である。デリーからは、2019年のブラカッシュ・クマールまでない。佼成会のインド布教の軸がデリーからコルカタに移ったことがわかる。
- (37) 2009年11月のシトゥーの学林への体験入学の報告書では、シトゥーが日本語教室をやっていると記載されている。シトゥーはサクセナの日本語教室に参加し、よりきちんとした日本語を学ぶために、デリー大学の日本語コースで学んで、ある程度日本語ができるので、日本人との交流の中でも直接教を学ぶことができたと思われる。
- (38) シトゥーは2012年末に結婚後、ヒンドゥー教の敬虔な信者である姑が佼成会に行くことを好まなかったため、西デリーの活動にはあまり出ていない。また2013年9月からは夫の仕事の関係で、東京に住んでいる。
- (39) 2010年1月の出張報告書で、尾島は2009年6月の本部で行われた青年セミナーへのハンダとシトゥーの招聘について、以下のようにコメントしている。「招聘教育で日本の佼成会にふれてもらおうというもので、青梅錬成、研修、教会実習に参加し、実践を学んでもらおうとするものである。ハンダはDDCを離れて後、インターネット等で独学をしたため、佼成会の教えとは違うものを身に着けているようだったが、少し違和感がなくなった。シトゥーも教えはもっと生活に密着した実践的なものであることを学んで帰った。招聘教育は他国の会員から学ぶことも多く、成果は大きい」。
- (40) お会式団参の場合は航空運賃は個人負担が原則だが、西デリーの拠点長にと目されていたカマルには、教師資格取得のために、齋藤の指示により日本への航空運賃を南アジア伝道区で負担し、10月に本部で教師の資格を拝受したという話もある。
- (41) WCRPは佼成会の開祖庭野日敬が中心になって設立した団体である。このキャンペーンを日本ユニセフ協会も応援した。署名の目標数は5,000万人で、集まった署名はキャンペーン終了後、国連事務総長、国連安全保障理事会常任理事国、各国の国家元首や総理大臣、国会議員に提出された。日本国内では教会全体をあげて取り組んだキャ

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

ンペーンで、国際伝道本部では海外拠点で100万人の署名を目標としていたが、結果は23万人強だった。

- (42) シトゥーの話だとハンダは公務員でお金に困っていない。また尾島に、西デリーに委託されてたくさんのお金を渡すことはあったのかと聞いたところ、そうしたことはなく、個人的な布施の場合はそれほど多い金額ではないとのことである。シトゥーにモヒンダが主任になりたかったのかと聞いたところ、いい質問だと言われたので、そうかもしれない。2010年9月の報告書にハンダの家に訪問したとの記載があり、この時まではハンダがいたことは確かである。2011年1月の出張報告書では運営委員会の4名と会合とあり、ハンダの名前はなかったので、ハンダが盗みの嫌疑をかけられ西デリーから離れたのは2010年9月のことでないかと推測できる。
- (43) シトゥーからの聞き取りによると「モヒンダさんはどういう人かあまり知らない。タイに研修に行った時に法座所の場所を他に借りようという話になった。また、彼も本部からお金をほしかったのではないかと思う。だんだん4,000円の布施を毎月するようになった。日本人が来てお金がかかった時は、後で皆でかかった費用を分担するが、たとえば200円のを500円というようにオーバーチャージしてくる。だんだんサクセナさんがやったように金銭に関心をもつようになり、賃貸料をもらうことにも興味をもったようだ。本当に教えを広めようとするなら、それは不要だと思ったので、私は次第に行かなくなった」と述べている。
- (44) 島村は2014年からは国際伝道グループ次長・南アジア伝道区直轄拠点教会長となる。
- (45) ブラカッシュは、ビハール州出身で、地元ビハール州の州立ティルカマンジバガルプール大学の商学部を2008年に卒業し、2010年によりよい条件の仕事を見つけるため、すでにデリーで働いていた叔父（母の弟）を頼ってデリーに来た。最初の1年は、衣料品裁縫工場で梱包作業の仕事だったが、働きながら、朝6時30分から8時30分までNGOが運営している私塾（政府に正式登録していない教育機関）で英語を学び、また終業後21時30分から23時まで、コンピューター操作の私塾に通った。その努力の甲斐あって、2011年にインドの携帯電話AirTel、さらに2012年には米国系通信会社のAT&Tインド事務所でコールセンター業務に就くことができた。

2013年1月、キャリアアップを目指し、さらにスキルをあげるため、日本語学校で日本語の受講を始めたところ、担任の教師から同校の先輩であるアミットを紹介してもらい、アミットが始めたばかりの日本語教室（西デリー法座）にも通い始めた。なお、アミットが生徒を紹介してほしいと頼んでいたとのことである。

アミットは日本語教室を始めるにあたり、最初から「この日本語教室は佼成会という仏教団体の活動として行っている」ということを説明し、そのうえで、無料で日本語を学ぶ条件として入会する必要はないが、授業を開始する際には題目を三唱し、授業が終わったら読経供養を行うので、それは了承してほしいと受講生たちに説明した。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

さらに、日本語教室の合間に佼成会の活動、教義についても説明した。

- ブラカッシュは、日本語をマスターしてより給料の高い仕事に就こうという動機のもと日本語教室に通い始めたが、そこで佼成会の教えを学び、平和活動に積極的に取り組んでいることにたいへん深く感銘したことから、入会する決意をした（2013年6月）。このときはまだ AT&T勤務だったが、その後2014年に Amazon India に転職した。一時期、配送担当にもなったが、主には顧客サービス部門で働き（e-mailによる問い合わせ対応、電話による問い合わせ対応）、チームリーダー（グループ長クラス）になった。
- (46) 2016年12月に島村はモヒンダに会い、ブラカッシュの国際奉職員雇用について相談したが、賛同が得られず、当初2017年1月を予定していた雇用契約締結を延期した。しかし2017年2月にモヒンダが主任を辞任するとの申し出たことから、同年7月にブラカッシュの雇用につなげることができた。
- (47) ハンダに対する聞き取りは2022年9月26日に、筆者の質問票をもとにタイ在住の島村氏が電話で聞き取りを行ってくれた。
- (48) 「一食を捧げる運動」とは佼成会が取り組んでいる活動で、一食を抜いて空腹感を感じ、その抜いた分の食費を様々な支援活動に役立てる分ち合いの運動である。
- (49) WhatsAppはアメリカのフリーウェアで、ユーザーはテキストメッセージや音声メッセージを送信したり、音声通話やビデオ通話を行ったり、画像、ドキュメント、ユーザーの場所、その他のコンテンツを共有したりすることができる。
- (50) シトゥーは現在東京に住んでいるが、いずれインドに帰国したいとの希望もっている。中央デリーのハンダとも親しく、シトゥーの弟も中央デリーにかかわっている。シトゥーは日本では江東教会に属しており、また国伝で翻訳などもしている。聞き取りを行ったときの感触も教えをしっかりとつかんでいるように思われた。デリーの初期からの会員では、ハンダとシトゥーが残ったといえるのかもしれないが、シトゥーの帰国後はハンダやブラカッシュと協力して、デリー布教もよりよい方向にいくのではないかとと思われる。

【参考文献】

- 「布教に励むアジアの仲間インド／バングラデシュ」『佼成新聞』2001年4月13日号。
- 「インドに初の布教拠点誕生 積尊の教えが里帰り／ご法の一粒種・サクセナさんの尽力で 積尊の教えが2500年の時を経て里帰り」『佼成新聞』2002年7月19日号。
- 「お釈迦さまの教えが五十展転して デリー・ダルマセンター」『求道』2002年7月号、22-23頁。
- 「会員7人をインドに派遣 現地の会員たちと交流／板橋教会」『佼成新聞』2003年5月18日号。
- 「南アジア支部長研修会」『佼成新聞』2005年7月3日号。

- 「庭野会長 南アジア各地を訪問 親しく現地会員と交流 デリー支部」『佼成新聞』2007年12月16・23日号。
- ハンダ, シミ「体験説法」, *Shan-Zai*, 国際伝道本部, 2006年4月号(日本語版), vol.7, p.5.
- クマール, プラカッシュ「私の人生を変えたご法の実践」, *Living the Lotus*, 国際伝道部, 2018年10月号(日本語版), vol. 157, pp. 4-7.
- Sakusena, Pradeep, “The Dharma Taught Me Self-Reliance and Equality”, *DHARMA WORLD* May-June, Vol.32, pp. 32-34, 2005.
- 渡辺雅子, 2001, 『ブラジル日系新宗教の展開——異文化布教の課題と実践』東信堂。
- 渡辺雅子, 2003, 「仏教系新宗教のブラジル布教——霊友会と立正佼成会の場合——」, 『近代仏教』第10号, 21-36頁。
- 渡辺雅子, 2009, 「アジアの人道問題への日本宗教の取り組み——WCRP・ACRPの場合」, 国際宗教研究所編『変革期のアジアと宗教』秋山書店, 45-69頁。
- 渡辺雅子, 2013, 「立正佼成会のアメリカ布教——非日系人布教が展開しているオクラホマ教会の事例——」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』140号, 1-31頁。
- 渡辺雅子, 2014, 「バングラデシュにおける立正佼成会の信仰受容」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』141号, 65-122頁。
- 渡辺雅子, 2018, 「スリランカにおける立正佼成会の布教展開と信仰受容の諸相」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』149号, 61-194頁。
- 渡辺雅子, 2019, 『韓国立正佼成会の布教と受容』東信堂。
- 渡辺雅子, 2022, 「台湾における立正佼成会式先祖供養の抱える困難——台湾の祖先祭祀と双系の先祖・「総戒名」の困難——」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』159号, 75-110頁。
- 渡辺雅子・廣瀬幾世, 2021, 「台湾における立正佼成会の展開」『明治学院大学 社会学・社会福祉学研究』157号, 131-224頁。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

立正佼成会インド・デリー布教史年表

年	出来事	関連事項
1997	3月 プラディーブ・サクセナ、インド仏跡参拝にヤナセ（自動車輸入販売大手）の社長の随行で来ていた藤井城と出会う。この時、サクセナは通訳・ガイドを務める。	
1999		10月 開祖庭野日敬逝去。
2000	8月 サクセナ、東京の藤井を訪問。佼成会を紹介してもらい、佼成会に関心を示す。東京の本部を訪問し、渉外課長根本昌廣と面会。 9月 海外布教課がサクセナへコンタクト。以後、海外布教課スタッフ山本宜亮を中心にメールのやり取りが始まる。 12月 海外布教課長長谷川泰弘、第23回教会長インド仏跡参拝研修のため訪印し、サクセナ宅に総戒名を祀り込み。サクセナ、正式に入会。	
2001	1月 海外布教課長長谷川泰弘、布教助成のため訪問。 2月 第24回教会長インド仏跡参拝研修に参加していたサンフランシスコ教会長川端健之、ニューヨーク教会長畠山友利、会員宅に総戒名を祀り込み。 3月（18～29日）サクセナ、本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で6日間研修および、板橋教会（教会長杉原のりよ）で4日間布教実習。サクセナ、この時に4家に総戒名の祀り込みがなされ、51家が祀り込みを希望していると発言。 5月 ネパールで開催された南アジア布教リーダー教育に、本部の渡航費支援を受けてサクセナ夫妻・息子アンキットを含む家族3名およびインド人会員2名が参加。プログラム終了後、この5名が乗車していたタクシーが交通事故にあう。治療費の一部を本部が負担。 7月 タイ・バンコク布教員高村雅俊、負傷会員の見舞いのため訪問。 8月 『経典』ヒンディー語翻訳者ナレシ・マントリ、サクセナ宅を訪問面会。	3月 海外布教課長長谷川泰弘、佼成出版社洋書出版課（課長吉田晃一郎）を通じてサルボダヤ日印文化センター所長ナレシ・マントリに『経典』のヒンディー語訳を依頼。 12月 教務部海外布教グループへ組織改編。 12月 山本宜亮、松戸教会長に就任。 12月 齋藤光央、板橋教会長に就任。
2002	2月 海外布教グループ次長長谷川泰弘、布教助成のため訪問。この時、会員数は48世帯。	7～12月 本部道場賃貸費（年間総額1,800ドル）・活動費（年間総額600ドル）を支援。

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>6月 サクセナ、勧請式での本尊拝受のため訪日。同時に、拠点用本尊勧請。板橋教会(教会長齋藤光央)、松戸教会(教会長山本宜亮)を訪問。</p> <p>7月 DDC(インド・ダルマセンター、インド連絡所)開所式。本部より海外布教グループ次長長谷川泰弘出席、拠点用本尊安置。この時、会員数は65世帯。拠点開設にともない4階部分の賃貸(2008年4月まで)および、本部より道場賃貸費・活動費支援開始。</p> <p>8月 バンコク支部で開催された南アジア布教リーダー教育に、本部の渡航費支援を受けてサクセナを含む4名が参加。</p> <p>8月 板橋教会、インド布教支援(古着・文房具送付)開始(約3年間継続)、古着約80着をDDCに送付(空輸)。</p> <p>9月 板橋教会、古着約100着を航空便で、約60着を船便で送付。</p> <p>10月 サクセナ訪日、板橋教会長齋藤光央と海外布教グループ次長長谷川泰弘と面会。板橋教会、茨城教会(教会長松永行央)を訪問。</p> <p>11月 板橋教会、文房具約1,000点を送付(空輸)。</p> <p>12月 ☆鈴木啓太郎、海外布教グループ次長(本部直轄拠点教会長兼務)に就任。</p> <p>12月 板橋教会、古着約1,100着を送付(空輸)。</p> <p>12月(19~23日) 板橋教会第1回インド布教支援ミッション(教会長齋藤光央、インド布教支援委員会委員長尾島由季子を含む4名参加)。この時、古着約100着、文房具約400点、中古の数珠約50個、大聖堂・普門館の航空写真2枚を持参。</p>	<p>* ナレン・マントリ、『経典』ヒンディー語翻訳終了。</p>
2003	<p>1月 板橋教会、DDC4階での宿泊を可能とするため、毛布34枚、シーツ34枚、枕10個を購入。これらと古着約2,500着を送付(空輸)。</p> <p>2月(16~24日) 板橋教会第2回インド布教支援ミッション(総務部長、インド布教支援委員会委員長尾島由季子、小柳和央を含む7名参加)。日本語教則本2冊、カセットテープ2個、「菅沼から世界へ」と第1回インド布教支援ミッションを記録したビデオテープを持参。</p> <p>2月 DDCの会員動態報告書が本部へ送られるようになる。この時、会員数は102世帯。</p>	<p>1~12月 本部、道場賃貸費(年間総額3,600ドル)・活動費(年間総額1,000ドル)を支援。</p> <p>9月~12月 板橋教会、活動費(年間総額4,000ドル)を支援。</p> <p>12月 教務部国際伝道グループへ組織改編。</p> <p>12月 小野田雅一、板橋教会長に就任。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

- | | |
|--|-----------------------------|
| <p>3月 本部理事会でDDCの団体登録化を承認。これにより、サクセナを拠点長とし、DDCが本部直轄拠点として正式にスタートする。</p> | <p>12月 小野田雅一、板橋教会長に就任。</p> |
| <p>3月 第27回教会長インド仏跡参拝研修団43名、訪問参拝、交流。</p> | <p>* 本部で南アジア教会設立計画が始まる。</p> |
| <p>5月 4階に加えて、半地下の賃貸開始（2013年12月まで）。</p> | |
| <p>5月 バンコク支部で開催された南アジア布教リーダー教育に、本部の渡航費支援を受けてサクセナを含む4名が参加。この時、パソコン購入費用とヒンディー語訳『経典』仮製本の印刷費用をサクセナへ寄贈。</p> | |
| <p>6月 DDC、デリー政府への法人登録完了。サクセナを理事長とし、他6名の会員が理事に就任。</p> | |
| <p>6月 サクセナ、本部で開催された海外支部長・本部直轄拠点長教育に、本部の渡航費支援を受けて参加。この時、本部へ財政支援の増額（月1,000ドル）を要望。板橋教会を訪問。この時、板橋教会から1,000ドルの支援金贈呈。テレビとビデオデッキの購入資金も提供されたもよう。また、お会式・営沼参拝・第2回インド布教支援ミッションを記録したビデオテープを寄贈。</p> | |
| <p>9月 板橋教会、月1,000ドルの支援開始（2004年12月まで）。</p> | |
| <p>9月 海外布教グループ次長鈴木啓太郎、布教助成のため訪問。本尊が4階から半地下へ移されていたことを知る。</p> | |
| <p>10月 会費制度（月5ルピー）開始。</p> | |
| <p>11月（23～30日）板橋教会第3回インド布教支援ミッション（教務部長、インド布教支援委員会委員長尾島由季子を含む6名参加）。ゆめボッケ（紛争等で心に傷を負った子どもを物心両面から支援するため、玩具や文房具等を袋に入れたもの）120個、「法華七論」「平和への道しるべ」「21世紀にむかって」のビデオテープ、古着約50着を持参。</p> | |
| <p>12月 ☆川本貢市、国際伝道グループ次長（本部直轄拠点教会長兼務）に就任。</p> | |
| <p>12月 掛川教会インド仏跡参拝研修一行、訪問参拝、交流。</p> | |

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	* ヒンディー語訳『経典』初版をDDCが印刷・発行。	
2004	<p>2月（12～18日）板橋教会第4回インド布教支援ミッション（インド布教支援委員会委員長尾島由季子、有富教順、小柳和央を含む5名参加）。国際伝道グループ次長川本貢市、スタッフ萩原透公、布教助成のため訪問、板橋教会と合流。この時、本部の予算でFAXを購入、DDCに寄贈。</p> <p>3月（18～24日）板橋教会第5回インド布教支援ミッション（インド布教支援委員会委員長尾島由季子、水野晃三郎を含む3名参加）。</p> <p>3月 第28回教会長インド仏跡参拝研修団29名、訪問参拝、交流。会員宅に総戒名祀り込み。</p> <p>4月 バンコク支部で開催された南アジア布教リーダー教育に、本部の渡航費支援を受けてサクセナを含む5名参加。引き続き行われた本部勧請本尊の現地授与式で、3名本尊拝受。</p> <p>6月 サクセナを含む3名、海外支部長・本部直轄拠点長教育参加のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で5日間研修および、板橋教会で教会発足45周年記念式典参加、4日間布教実習。</p> <p>8月 本部、ヒンディー語訳『経典』の増刷代をサクセナへ送金。</p> <p>10月 サクセナ、お会式参加のため訪日。</p> <p>12月 ☆南アジア教会新設（教会長に齋藤光央就任）。DDC、本部直轄拠点から南アジア教会直轄拠点となる。</p> <p>12月（9～18日）板橋教会第6回インド布教支援ミッション（教会長小野田雅一、インド布教支援委員会委員長尾島由季子を含む7名参加）。国際伝道グループスタッフ萩原透公、佐藤詠子、布教助成のため訪問、板橋教会と合流。第1回年次会員総会開催（約390名参加）、シミ・ハンダが会員を代表して体験説法。この時、板橋教会の支援金によりミネラルウォーターサーバーと洗濯機を購入。</p> <p>12月 南アジア教会長齋藤光央、布教助成のため訪問。</p> <p>* モヒンダ・バル（のちの西デリー法座主任）入会。</p> <p>* ヒンディー語訳『経典』第二版複製本をDDCが印刷・発行。</p>	<p>1～12月 本部、道場賃貸費（年間総額3,600ドル）・活動費（年間総額2,400ドル）を支援。板橋教会、活動費（年間総額12,000ドル）を支援。</p> <p>10月 本部理事会で、タイ・バングラデシュ・ネパール・スリランカ・インドを包括する南アジア教会設置を承認。</p> <p>12月 バンコク布教員島村雅俊、青年本部へ異動。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>2005</p>	<p>1月 学林本科41期生、インド練成のため訪問参拝、交流。</p> <p>1月 教務部長長谷川裕史、南アジア教会長齋藤光央、国際伝道グループスタッフ萩原 透公、南アジア教会会長就任式のため訪問。</p> <p>2月 東京教区大学生25名、インド練成のため訪問参拝、交流。</p> <p>3月 第29回教会長インド仏跡参拝研修団21名、訪問参拝、交流。会員宅に総戒名祀り込み。</p> <p>4月 サクセナ、妻子とともに訪日。教会長小野田雅一を含む板橋教会一行と山梨観光、波木井山・身延山参拝。大和教会（教会長東伸吉）参拝。</p> <p>6月 サクセナ、アジア法人理事長研修会・南アジア支部長研修会のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で6日間研修および、南多摩教会（教会長志村憲一）で7日間布教実習。</p> <p>8月 DDCを会場に南アジア教会青年練成会開催、バンコク支部・バングラデシュ支部・ネパール法座・スリランカ法座・インド法座から51名参加（本部からの出張者および、板橋教会からの参加学生2名を含む）、DDCからシミ・ハンダ、サビトリ・ベルマ（通称シトゥー）、アンキット・サクセナを含む10名参加。本部から青年本部次長志村叡彦、スタッフ3名、南アジア教会長齋藤光央、国際伝道グループスタッフ萩原透公、服部喜美枝、藤貫早苗参加。</p> <p>9月 DDCを会場に南アジア教会各拠点を対象とした本部勧請本尊の現地授与式開催、バングラデシュ支部・ネパール法座・インド法座から27名本尊拝受。DDCからシミ・ハンダ、サビトリ・ベルマ（シトゥー）を含む11名本尊拝受。本部から参務庭野皓司、南アジア教会長齋藤光央、儀式行事グループスタッフ1名、国際伝道グループ次長川本貢一、スタッフ李好史、服部喜美枝、板橋教会から本部予算で水野晃三郎、有富教順、尾島由季子参加。この時、本部の予算で発電機と音響機器を購入、DDCに寄贈。</p> <p>11月 南アジア教会長齋藤光央、国際伝道グループスタッフ萩原透公、藤貫早苗、布教助成のため訪問。この時、ヒンディー語訳『経典』の増刷代をDDCに支出。</p>	<p>1月 板橋教会、活動費（年間総額700ドル）を支援。</p> <p>1～12月 本部、道場賃貸費（年間総額7,200ドル）・活動費（臨時支援を含む年間総額10,100ドル）を支援。</p> <p>2月 本部大聖堂改修工事着工。</p> <p>5月 本部、DDC公用車購入支援を決定。</p> <p>5月 海外拠点運営ガイドラインの改正によりDDCの呼称をインド連絡所からインド法座へ改称。</p> <p>10月 国際伝道グループを発行元とする多言語ニュースレター「Shan-Zai」創刊。</p> <p>11月 本部、南アジア教会ネパール法座・スリランカ法座・インド法座支部昇格を承認。</p> <p>12月 沼田雄司、教務部長に就任。</p> <p>12月 コルカタのシュモン・バルア入会。</p> <p>* 『経典』ヒンディー語翻訳者ナレシ・マントリ、『法華三部経』ヒンディー語翻訳に着手。</p>
-------------	---	--

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>11月 サクセナ, 教師授与式参加のため訪日, 教師資格拝受。</p> <p>12月 DDC (インド法座), 支部昇格。</p> <p>12月 家庭教育研究所所員丸山貴代, 南アジア教会長齋藤光央, 国際伝道グループスタッフ末永和子, 佼成出版社記者1名, 家庭教育講演会実施のためタイ・ネパール出張。ネパール会場での家庭教育講演会にDDCから2名参加。</p> <p>12月～2006年3月 南アジア教会からの依頼で, 多摩教区が古着を収集, 本部予算でDDCへ送付(空輸)。</p> <p>* 本部と折半し公用車購入(本部, 11,500ドルを拠出)。</p>	
2006	<p>1月 サクセナ, 支部長辞令拝受。</p> <p>1月 学林本科42期生, インド練成のため訪問参拝, 交流。</p> <p>2月 南アジア教会青年練成会を拠点ごとに開催, DDC会場で33名参加。青年本部スタッフ2名, 国際伝道グループスタッフ末永和子, 南多摩教会青年会員4名, DDCに参加。</p> <p>3月 第30回教会長インド仏跡参拝研修団24名, 訪問参拝, 交流。</p> <p>6月 サクセナ夫妻を含む5名, 南アジア教会レディーズセミナー参加のため, 本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で5日間研修および, 西多摩教会(教会長佐山貢一郎)で5日間布教実習。</p> <p>9月 南アジア教会青年練成会開催。前半は拠点ごとに, 後半はバンコク支部に集合。青年本部スタッフ2名, DDCでの練成参加。本部の渡航費支援を受けて, DDCからアンキッド・サクセナを含む5名, バンコク支部での練成会参加。</p> <p>10月 サクセナ, 本部と業務委託契約締結(2013年12月まで)。</p> <p>10月 サクセナ, カマル・クマールを含む15名, 第3回世界サンガ結集参拝参加のため訪日。西多摩教会訪問参拝, 交流。</p> <p>12月 国際伝道本部次長川本貢一, スタッフ松岡志帆, 布教助成のため訪問。開祖生誕100年記念行事スピーチコンテストに約100名参加。</p> <p>* サクセナ, 理事長職をアスジ・ニガムへ交代。</p>	<p>1～12月 本部, 道場賃貸費(年間総額8,400ドル)・活動費(年間総額7,800ドル)を支援。</p> <p>3月 DDCの呼称をインド支部からデリー支部へ改称。</p> <p>5月 本部大聖堂改修落慶。</p> <p>10～12月 本部, サクセナへ業務委託費(年間総額1,200ドル)を支出。</p> <p>12月 教務部から独立し, 国際伝道本部へ組織改編(本部長に鈴木孝太郎就任)。</p> <p>12月 齋藤光央, 南アジア教会長兼任で台湾教会長に就任。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>2007</p>	<p>1～2月 国際伝道本部スタッフ仲原一嘉、委託布教師有富教順、布教助成のため訪問。本部の予算で会計報告用パソコンを購入、アヌジ・ニガムに寄贈。</p> <p>2月 南アジア教会青年練成会を拠点ごとに開催、DDC会場で約55名参加。青年本部スタッフ2名、国際伝道本部スタッフ末永和子、DDCに参加。</p> <p>3月 第31回教会長インド仏跡参拝研修団17名、訪問参拝、交流。</p> <p>7月 サクセナ、バンコク支部で開催された南アジア各拠点理事長・支部長指導会に本部の渡航費支援を受けて参加。引き続き行われた本部勧請本尊の現地授与式で、カマル・クマール、モヒンダ・バルを含む6名本尊拝受。</p> <p>9月 南アジア教会青年練成会を拠点ごとに開催。青年本部スタッフ2名、学林関西光樹生牧野江身、DDC訪問。</p> <p>9月 国際伝道本部スタッフ萩原透公、水藻克年、法人整備に関する実態調査のため訪問。法人ステータスの変更（一時団体登録から常設団体登録へ）を現地と合意。</p> <p>10月 西デリーで活動を開始したカマル・クマールからサクセナの支部運営に関して本部に投書が届く。</p> <p>10月 アンキット・サクセナ、ハワイ教会・コナ・リトリートセンターで開催された第2回ワールドユースミーティングに本部の渡航費支援を受けて代表参加。DDCからオンラインで31名参加。</p> <p>11月 会長庭野日鑑夫妻、時務部長國富敬二、他2名、国際伝道本部スタッフ萩原透公、カトマンズ支部道場入仏・落慶式の途上、DDC・コルカタ法座所訪問。</p> <p>12月 ☆南アジア伝道区新設（伝道区長に齋藤光央就任）。DDC、南アジア教会直轄拠点から南アジア伝道区直轄拠点（伝道区長が教会長兼務）となる。</p>	<p>1～12月 本部、道場賃貸費（年間総額8,400ドル）・活動費（年間総額6,000ドル）を支援、サクセナへ業務委託費（年間総額4,800ドル）を支出。</p> <p>6月 本部、コルカタ法座設置を承認。</p> <p>6月 本部理事会で「第十次教団基本計画（国際伝道基本計画）を基とした国際伝道計画（第一次国際伝道計画）」承認。</p> <p>7月 本部理事会で南アジア教会を再編し、南アジア伝道区・バンコク教会・バングラデシュ教会設置を承認。</p> <p>7月 本部勧請式でコルカタ法座所用本尊勧請。</p> <p>11月 コルカタ法座所開所式・拠点用本尊安置。</p> <p>12月 バンコク教会新設（教会長に長谷川泰弘就任）。</p> <p>12月 バングラデシュ教会新設（教会長に有富教順就任）。</p> <p>12月 萩原透公、国際伝道本部次長に就任。</p> <p>12月 南アジア伝道区設置にともない、李好史・竹野貴則、南アジア伝道区へ異動。</p> <p>* 本部、ヒンディー語訳『経典』簡易製本版作製。</p>
-------------	---	--

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

2008	<p>4月 4階部分の賃貸契約終了。</p> <p>6月 バンコク教会で開催された南アジア伝道区主任教育に、本部の渡航費支援を受けてカマル・クマールを含む3名参加。</p> <p>7月 カマル・クマール、西デリーでサンガを形成・DDCから分派。</p> <p>7月 南アジア伝道区教務員李好史、DDC拠点用法号、総戒名・宅地因縁戒名安置ならびに全会員への本尊および法号勧請説明会実施のため訪問。</p> <p>7～8月 サクセナからカマル・クマールの主任教育参加に端を発するクレームが届く。</p> <p>10月 本部、DDCを南アジア伝道区直轄拠点から一時的に本部直轄拠点預かりとする。</p> <p>11月 国際伝道本部次長萩原透公、スタッフ水藻克年、布教助成のため訪問。</p> <p>* アンキット・サクセナ、学林海外修養科16期生に内定していたが、自己都合により辞退。</p>	<p>1～12月 本部、DDCに道場賃貸費（年間総額5,250ドル）・活動費（年間総額6,000ドル）を支援、サクセナへ業務委託費（年間総額4,800ドル）を支出。</p> <p>3月 教団創立70周年を期して、全会員への本尊および法号勧請がスタート。</p> <p>4月～2019年1月 本部理事会で南アジア国際伝道センター設置を承認。</p> <p>12月 教務局国際伝道本部へ組織改編（教務局長沼田雄司）。</p> <p>12月 南アジア伝道区長齋藤光央、台湾教会分割ならびに台北・台南教会新設にともない台湾教会長兼任解除。</p> <p>12月 島村雅俊、尾島由季子、南アジア伝道区へ異動。</p>
2009	<p>1月 サクセナから日本にある中華系宗教団体の天道への拠点住所貸出に関する謝罪文が届く。</p> <p>1月 南アジア伝道区教務員李好史、布教助成のため西デリー訪問。</p> <p>2月 国際伝道本部次長萩原透公、スタッフ水藻克年、額装本尊および法号授与式実施のためDDC訪問。100家へ本尊および法号授与、9家へ法号授与。デリー霊友会センター訪問。この時、アヌジ・ニガム理事長夫妻、理事の辞表提出。サクセナを除くその他の理事も辞意表明。</p> <p>3月 南アジア伝道区教務員尾島由季子、国際伝道本部委託布教師水野晃三郎、布教助成のため西デリー訪問。</p> <p>5月 外務グループ次長赤川恵一、アジア宗教者平和会議（ACRP）執行委員会参加の途上DDC訪問参拝。</p>	<p>1月 シュモン・バルア、国際奉職員として本部雇用開始。</p> <p>1～12月 本部、DDCに道場賃貸費（年間総額4,200ドル）・活動費（年間総額6,000ドル）を支援、サクセナへ業務委託費（年間総額4,800ドル）を支出。</p> <p>3月 バンコク教会敷地内にて宿泊施設も兼ねた南アジア国際伝道センター建設着工。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>6月 西デリーからシミ・ハンダ、サビトリ・ベルマ（シトウー）、南アジア伝道区・青年本部招聘教育参加のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で8日間研修および、大田教会（教会長植原伸江）で2日間布教実習。</p> <p>6月 国際伝道本部次長萩原透公、スタッフ工藤友紀乃、北米国際伝道センター（RKINA）スタッフニコラス・オズナ、額装本尊および法号授与式実施のためDDC訪問。119家へ本尊および法号授与、1家へ法号授与。</p> <p>6月 西デリーからピンキ・クマールを含む2名、バンコク教会で開催された南アジア伝道区家庭教育リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>7月 バングラデシュ教会長有富教順、南アジア伝道区教務員島村雅俊、布教助成のため西デリー訪問。</p> <p>9月 南アジア伝道区教務員尾島由季子、布教助成のため西デリー訪問。</p> <p>10月 西デリーからカマル・クマール、クマール夫妻（パンカジ・ピンキ）を含む15名、南アジア伝道区お会式団参加のため訪日。</p> <p>10月 カマル・クマール、訪日中に教師授与式参加、教師資格拝受。</p> <p>11月 カマル・クマール、一家でカナダへ移住。</p> <p>11月 西デリーからサビトリ・ベルマ（シトウー）、学林海外修養科体験入林のため訪日。</p> <p>11月 ☆南アジア伝道区長齋藤光央退任。</p> <p>12月 ☆長谷川泰弘、バンコク教会長・南アジア国際伝道センター長兼任で南アジア伝道区長就任。</p>	<p>4月 コルカタ法座から国際奉職員シュモン・バルア、バイシャリ・バルアを含む5名、バンコク教会で開催された本部勧請の本尊現地授与式で本尊拝受。</p> <p>9月 ナレシ・マントリ、『法華三部経』ヒンディー語翻訳途上で逝去。</p> <p>12月 南アジア国際伝道センター（RKISA）新設（長谷川泰弘、南アジア伝道区長・バンコク教会長兼任でセンター長就任。笹川佳央、同センターへ異動）。</p> <p>12月 スリランカ教会新設（教会長に山本宜亮就任）。</p> <p>12月 島村雅俊、竹野貴則、尾島由季子、国際伝道本部へ異動。</p>
<p>2010</p> <p>1月 丸山貴代家庭教育研究所所長、国際伝道本部スタッフ尾島由季子、家庭教育リーダー教育・公開講座実施のため西デリー訪問、ならびに国際伝道本部次長萩原透公、スタッフ水藻克年、額装本尊および法号授与式実施のためDDC訪問。相互に合流し、西デリーでの家庭教育公開講座に約90名参加。DDCで65家へ本尊および法号授与。</p> <p>1～2月 西デリーからアミット・クマールを含む2名、南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p>	<p>1月 ガヤのバリ・クマール・バスワン、コルカタ法座所に立ち寄った縁で入会。</p> <p>1月 庭野会長夫妻を迎え、南アジア国際伝道センター落慶式実施。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>3月 西デリーから2名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区主任教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>5～6月 バンコク教会スタッフケサリン・ソムリット, 国際伝道本部スタッフ末永和子, ARMS DOWN! キャンペーンのため西デリー・DDC訪問。</p> <p>7月 西デリーからピンキ・クマール, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区家庭教育講師養成講座に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>7月 サクセナ, 第3期リーダー教育(1年目)参加のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部・菅沼で9日間研修および, 神戸教会(教会長根本昌廣)で3日間布教実習。</p> <p>9月 西デリーからビシヤル・ベルマ(シトゥーの弟), 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア国際伝道センター法華経集中講座に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>9月 国際伝道本部スタッフ尾島由季子, 斎藤華央留, 布教助成のためDDC・西デリー訪問。DDCで額装本尊および法号授与式実施, 50家へ本尊および法号授与。西デリーでARMS DOWN! キャンペーン表彰式実施。</p> <p>12月 DDCへの活動費支援終了。</p>	<p>1～12月 本部, DDCに道場賃貸費(年間総額5,400ドル)・活動費(年間総額2,700ドル)を支援, サクセナへ業務委託費(年間総額4,800ドル)を支出。</p> <p>4月 バトナのヨゲシュワール・ナンダン, 入会。</p> <p>9月 島村雅俊, 南アジア伝道区(タイ・バンコク)へ異動。</p> <p>10月 コルカタ法座から国際奉職員シュモン・バルア, マヤ・バルア, 教師授与式参加のため訪日, 教師資格拝受。</p>
<p>2011</p> <p>1月 DDCからサクセナ, 西デリーからモヒンダ・バル, パンカジ・クマール, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>1～2月 南アジア伝道区区長谷川泰弘, 国際伝道本部次長萩原透公, DDC・西デリー訪問。サクセナ, モヒンダ・バルも交え, 四者によりDDCの南アジア伝道区復帰, および西デリーの独立に合意。</p> <p>2月 国際伝道本部スタッフ尾島由季子, 工藤友紀乃, 布教助成のためDDC・西デリー訪問。</p> <p>4月 西デリーからアミット・クマール, DDCからアキキット・サクセナ, 学林海外修養科19期生として来日・入林。</p> <p>5月 南アジア伝道区区長谷川泰弘, 教務員島村雅俊, 布教助成のためDDC・西デリー訪問。</p>	<p>1～12月 本部, DDCに道場賃貸費(年間総額5,400ドル)を支援, サクセナへ業務委託費(年間総額6,000ドル)を支出。</p> <p>3月 コルカタ法座, 法人登録完了。</p> <p>6月 本部, 南アジア伝道区直轄拠点として西デリー法座設置を承認。</p> <p>12月 教務局国際伝道本部国際伝道グループへ組織改編(水谷庄宏, 国際伝道本部長に就任)。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>6月 国際伝道本部スタッフ尾島由季子、牧野江身、布教助成のためDDC・西デリー訪問。</p> <p>6月 学林海外修養科19期生アンケート・サクセナ、体調不良によりインドへ一時帰国。</p> <p>6月 モヒンダ・バル、西デリー法座主任辞令拝受。</p> <p>7月 学林海外修養科19期生アンケート・サクセナ、退林願を本部へ提出。</p> <p>7月 サクセナ、第3期リーダー教育（2年目）参加のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で8日間研修および、神戸教会（教会長原章雄）で5日間布教実習。</p> <p>7月 教務局長沼田雄司、南アジア伝道区教務員島村雅俊、国際伝道本部スタッフ水藻克年、南アジア各拠点視察のためDDC・西デリー訪問。DDCでの読経供養・法座に約15名参加。西デリーでの発足3周年記念の集い（読経供養・法座）に約30名参加。</p> <p>8月 家庭教育研究所所長丸山貴代、国際伝道本部スタッフ尾島由季子、中村悦子、家庭教育研修会実施のためDDC・西デリー訪問。DDCでの家庭教育研修会に17名参加。西デリーでの家庭教育研修会に12名参加。</p> <p>8月 学林海外修養科19期生アンケート・サクセナ退林。</p> <p>9月 本部勸請式で西デリー法座所用本尊勧請。</p> <p>10月 バンカジ・クマール宅を拠点として西デリー法座所開所式。南アジア伝道区長長谷川泰弘、教務員島村雅俊出席、拠点用本尊安置。</p> <p>12月 ☆有富教順、バングラデシュ教会長・南アジア国際伝道センター長兼任で南アジア伝道区長就任。</p>	<p>12月 有富教順、南アジア伝道区長・バングラデシュ教会長兼任で南アジア国際伝道センター長就任。</p> <p>12月 笹川佳央、バンコク教会長に就任。</p> <p>12月 島村雅俊、南アジア伝道区長補佐に任命。</p> <p>* アジア・アフリカ語学院インド語学科講師雪下洋一の翻訳、元富山国際大学人文学部教授長弘毅の校閲により「Shan-Zai」ヒンディー語6～12月号（会長法話のみ）発刊。</p>
<p>2012</p>	<p>2月 DDCからサクセナを含む2名、西デリーからモヒンダ・バル、バンカジ・クマール夫妻、サビトリ・ベルマ（シトゥー）、南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>5月 南アジア伝道区長有富教順、伝道区長補佐島村雅俊、布教助成のため西デリー訪問。</p>	<p>1～12月 本部、DDCに道場賃貸費（年間総額5,400ドル）を支援、サクセナへ業務委託費（年間総額6,000ドル）を支出。</p> <p>2月 本部、コルカタ法座支部昇格を承認。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>7月 国際伝道本部長水谷庄宏、南アジア伝道区長補佐島村雅俊、布教助成のためDDC・西デリー訪問。DDCでの読経供養・法座に約30名参加。西デリーでの発足4周年記念の集い（読経供養・法座）に約20名参加。</p> <p>8月 家庭教育研究所所長丸山貴代、国際伝道グループスタッフ金尾江利子、家庭教育講座実施のためDDC・西デリー訪問。</p> <p>9月 インド留学中（2013年5月まで）の国際伝道グループスタッフ牧野江身、布教助成のため西デリー訪問。</p> <p>10月 西デリーからモヒンダ・バル、サビトリ・ベルマ（シトゥー）、教師授与式参加のため訪日、教師資格拝受。相模原教会（教会長宇野哲弘）で4日間布教実習。</p> <p>12月 ☆水谷庄宏、国際伝道本部長兼任で南アジア伝道区長就任。</p> <p>12月～2013年1月 インド留学中の国際伝道グループスタッフ牧野江身、布教助成のためDDC・西デリー訪問。</p>	<p>4月 国際奉職員シュモン・バルア、コルカタ支部長辞令拝受。</p> <p>9月 コルカタ支部からタヌシュリー・バルアを含む4名、バンコク教会で開催された本部勧請の本尊現地授与式で本尊拝受。</p> <p>12月 バングラデシュ教会長有富教順、南アジア伝道区長・南アジア国際伝道センター長の兼任解除。</p> <p>12月 笹川佳央、バンコク教会長兼任で南アジア国際伝道センター長就任。</p> <p>12月 島村雅俊、南アジア伝道区主査に就任。</p> <p>* シュバラ・ラージプトの翻訳、雪下洋一、国際伝道グループスタッフ牧野江身の校閲により「Shan-Zai」ヒンディー語9～12月号（会長法話のみ）発刊。</p>
2013	<p>2月 南アジア伝道区主査島村雅俊、布教助成のためDDC・西デリー訪問。</p> <p>3月 DDCからサクセナを含む2名、西デリーからモヒンダ・バル、南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>3月 学林海外修養科19期生アミット・クマール卒林・インド帰国。</p> <p>3月 明治学院大学教授渡辺雅子、研究調査のため国際伝道グループスタッフ三浦志都代同行のもとDDC・西デリー訪問。</p> <p>4月 DDCの公用車に関して、購入時の本部との取り決めを反故にし、無断で売却していたことが判明。</p>	<p>1～12月 本部、DDCに道場賃貸費（年間総額5,400ドル）を支援、サクセナへ業務委託費（年間総額6,000ドル）を支出。</p> <p>5月 本部、コルカタ支部コルカタ北法座設置を承認。</p> <p>6月 コルカタ北法座所開所式。タヌシュリー・バルア、主任辞令拝受。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>5～6月 南アジア伝道区主査島村雅俊、布教助成のためDDC・西デリー訪問。西デリーで海外修養科を卒林したアミット・クマールが毎週日曜日に日本語教室・法座を開催、青年を中心に10～15名参加。</p> <p>6月 西デリー、インド北部・ウッタラーカンド州集中豪雨による災害被災者に対し、総理府を通じて義援金（約3,200円）の寄付、および食材などの緊急援助物資を寄贈。</p> <p>7月 モヒンダ・パルとアミット・クマールの関係悪化。</p> <p>7月 南アジア伝道区主査島村雅俊、布教助成のためDDC・西デリー訪問。DDCでの青年日帰り練成会に28名参加。西デリーでの発足5周年記念の集いに約30名参加。</p> <p>8月 本部、DDCの賃貸契約を終了し、西デリーと共用での新道場賃貸・移転、および布教組織体制変革を検討。</p> <p>10月 南アジア伝道区主査島村雅俊、布教助成のためDDC・西デリー訪問。ベンガル語・ヒンディー語翻訳・出版調整のため訪印していた国際伝道グループ主査吉田晃一郎、スタッフ三川江身（旧姓牧野江身）と合流、アミット・クマールと面会。</p> <p>11月 西デリー法座所を提供しているパンカジ・クマール宅改修工事のため、モヒンダ・パル宅へ法座所移転・拠点用本尊遷座。</p> <p>12月 南アジア伝道区主査島村雅俊、DDC賃貸契約終了ともなう本尊遷座式実施および布教助成のためDDC・西デリー訪問。サクセナ宅への拠点用本尊遷座を諦め、アミット・クマール宅に一時遷座。この時、「Living the Lotus」翻訳用に本部の予算でプリンタを購入、西デリーに寄贈。</p> <p>12月 DDCへの道場賃貸費支援およびサクセナとの業務委託契約終了。</p>	<p>10月 国際伝道グループ主査吉田晃一郎、スタッフ三川江身（旧姓牧野江身）、訪印時に元ナラランダ仏教大学教授チャンドラ・シュカル・プラサッドに『法華三部経』のヒンディー語および、元デリー大学哲学科学部長シッデーシュワル・ラメーシュワル・バットに『法華三部経』のヒンディー語校閲を依頼。</p> <p>11月 チャンドラ・シュカル・プラサッド、『法華三部経』ヒンディー語翻訳に着手。</p> <p>12月 竹谷祐市郎、国際伝道グループ次長に就任。</p> <p>* アミット・クマールの翻訳、シュバラ・ラージプト、国際伝道グループスタッフ三川江身の校閲により「Shan-Zai」ヒンディー語1～4月号・6～7月号・10～11月号（会長法話のみ）発刊。12月号から「Living the Lotus」へ改称。</p>
<p>2014 1月 南アジア伝道区主査島村雅俊、国際伝道グループスタッフ中山悦宏、全インド布教幹部会議開催および布教助成のため訪印、サクセナと面会。ガヤで全インド布教幹部会議開催、西デリーからモヒンダ・パルを含む2名参加。</p> <p>1月 西デリーからピンキ・クマール、南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区教会教務員教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p>	<p>9月 本部、デリー新道場賃貸費半年分・前払金・設備代（総額252,000ルピー）を支援。</p> <p>* シッデーシュワル・ラメーシュワル・バット、『法華三部経』ヒンディー語訳校閲に着手。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>3月 南アジア伝道区主査島村雅俊，布教助成のため訪印。サクセナと面会，西デリー訪問。</p> <p>5月 アミット・クマール，独自の動きとしてシミ・ハンダやバルティ・パトラと物件探しを始める。</p> <p>5月 南アジア伝道区主査島村雅俊，布教助成のため訪印。サクセナと面会，西デリー訪問。</p> <p>7月 南アジア伝道区主査島村雅俊，布教助成のため訪印。西デリー（外部施設）での発足6周年記念の集いに約50名参加。サクセナと面会。この時，DDCの団体登録が，年次報告書を長年にわたり市政府へ提出していなかったことから失効していることが判明。</p> <p>8月 サクセナ，本部に支部長辞任を申し出。</p> <p>8～9月 南アジア伝道区主査島村雅俊，青年本部「大学生塾」インド（コルカタ）渡航受入および布教助成のため訪印。アミット・クマール，シミ・ハンダ，バルティ・パトラ，ブラカッシュ・クマール，デリー新道場候補地選定。</p> <p>9月 デリー新道場賃貸契約締結，2年契約で賃貸費月額19,000ルピー。</p> <p>12月 ☆島村雅俊，国際伝道グループ次長（南アジア担当/南アジア伝道区直轄拠点教会長兼務）に就任。</p> <p>12月 シミ・ハンダを主任，アミット・クマールを副主任とする中央デリー法座新設。デリー支部を中央デリー法座，西デリー法座体制とする。</p> <p>12月 国際伝道本部長兼南アジア伝道区長水谷庄宏，国際伝道グループ次長島村雅俊，スタッフ又來秀光，デリー支部新道場本尊遷座式実施および全インド布教幹部会議開催のため訪印。DDCからアミット・クマール宅に一時遷座していた本尊安置。引き続き，同道場で全インド布教幹部会議開催，中央デリーからシミ・ハンダ，バルティ・パトラ，西デリーからモヒンダ・パル，パンカジ・クマールが参加。この時，西デリーが別の道場への移転を希望したことから，西デリー拠点用本尊を島村がタイへ持ち帰る。</p>	<p>* サビトリ・カプール（旧姓サビトリ・ベルマ，通称シトゥー）の翻訳，シュバラ・ラージプト，国際伝道グループスタッフ三川江身の校閲により「Living the Lotus」ヒンディー語1～2月号（会長法話のみ）および、『法華三部経』ヒンディー語翻訳者チャンドラ・シェカル・ブラサッドの長女パラミタ・シェカルの翻訳，三川江身の校閲により11～12月号（開祖随感・会長法話）発刊。</p>
2015	<p>1月 国際伝道グループスタッフ三川江身，翻訳・出版打合せのため訪印。中央デリー訪問。</p>	<p>2月 本部，デリー支部に道場賃貸費（年間総額190,000ルピー）を支援。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>2月 中央デリーからバルティ・バトラ、西デリーからビジンドラ・シン、南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p>	<p>9月 コルカタ支部からソナリ・バルア、ジテンドラ・クマール・ロイ、ナンダン・ヨゲシュワールを含む13名、バンコク教会で開催された本部勧請の本尊現地授与式で本尊拝受。</p>
<p>2月 国際伝道グループ次長島村雅俊、大分教会布教使節団受入および布教助成のため訪印。団から元教会長飯澤一雅が残り、デリー支部訪問。西デリーでの法座に約20名、中央デリーでの法座に約15名参加。</p>	<p>11月 チャンドラ・シェカル・ブラサッド、『法華三部経』ヒンディー語翻訳終了。</p>
<p>2月 アミット・クマール、日本人女性と結婚。</p>	<p>12月 部局体制が再編され、国際伝道部国際伝道グループに組織改編。</p>
<p>3月 国際伝道グループ次長島村雅俊、第39回教会長インド仏跡参拝研修団受入およびデリー支部道場本尊遷座のため訪印。デリー支部道場が家主の都合で売却されることとなり同区域内の別道場へ移転（賃貸費月額19,000ルピー）。</p>	<p>12月 バンコク教会長笹川佳央、南アジア国際伝道センター長兼任解除。</p>
<p>3月 西デリーからディワカル・クマール、学林海外修養科23期生として来日・入林。</p>	<p>12月 コルカタ支部ガヤ地区、州政府への団体登録完了。</p>
<p>5月 中央デリーから1名、南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p>	<p>* パラミタ・シェカルの翻訳、国際伝道グループスタッフ三川江身、国際奉職員シュモン・バルアの校閲により「Living the Lotus」1～12月号（開祖随感・会長法話）発刊。</p>
<p>5～6月 国際伝道グループ次長島村雅俊、スタッフ中山悦宏、布教助成のため訪印。シミ・ハンダを含む中央デリー会員2名、準教師資格拝受。</p>	
<p>7月 アミット・クマール、日本へ移住。</p>	
<p>7月 西デリー発足7周年の集いに約10名参加。</p>	
<p>8月 家庭教育研究所所長二平貴代、所員黒田いくよ、国際伝道グループ次長島村雅俊、スタッフ三川江身、家庭教育講演会実施のため訪印。中央デリーでの家庭教育講演会に約50名参加。</p>	
<p>11月 西デリーで開祖生誕を祝う「一乗パレード」を街頭実施、約80名参加。</p>	
<p>12月 ☆島村雅俊、南アジア国際伝道センター長（南アジア伝道区直轄拠点教会長兼務）に就任。</p>	
<p>12月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊、布教助成および全インド布教幹部会議実施のため訪印。コルカタで全インド布教幹部会議開催、中央デリーおよび西デリーから3名参加。</p>	

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

<p>2016</p>	<p>1月 シミ・ハンダ, 中央デリーで仏教講座実施, 約30名参加。</p> <p>1月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 北九州支教区インド(ガヤ)渡航(国際伝道支援プログラム)受入・布教支援のため訪印。西デリー・中央デリー訪問。</p> <p>3月 中央デリーからアンシュ・チョウドリー, 西デリーから1名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>3月 学林海外修養科23期生ディワカール・クマール, 日本語能力試験不合格のため, 退林・インド帰国。</p> <p>6月 西デリーから7名, 第4回世界サンガ結集参拝参加のため訪日。南アジア伝道区普沼練成参加, 一食平和基金1,800円相当を本部へ寄贈。</p> <p>6~7月 中央デリーからシミ・ハンダ, プラカッシュ・クマール, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区法華経集中講座に参加(プラカッシュ・クマールは事務局員として本部渡航費支援を受けて参加)。</p> <p>7月 西デリーでの発足8周年の集いに12名参加。</p> <p>7~8月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 布教助成のため訪印。</p> <p>10月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 国際伝道グループスタッフ山尾和正, 布教助成のため中央デリー訪問。</p> <p>12月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 国際伝道グループスタッフ小柳和央, 齋藤佑助, 全インド布教幹部会議実施のため訪印。デリー, ガヤ2会場に分かれて全インド布教幹部会議開催, デリー会場に中央デリーからシミ・ハンダ, バルティ・バトラ, アンシュ・チョウドリーを含む4名, 西デリーからモヒンダ・パル, パンカジ・クマールを含む4名参加。中央デリーからプラカッシュ・クマール, 西デリーからディワカール・クマール, 受入担当。デリー支部(中央デリー・西デリー)を一つの法人として再登録すること, プラカッシュ・クマールを両者を代表するスタッフとすることに合意。</p>	<p>1~12月 本部, デリー支部に道場賃貸費(年間総額228,000ルピー)を支援。</p> <p>3月 コルカタ支部からセジュティ・バルア, 学林海外修養科24期生として来日・入林。</p> <p>4月 チャンドラ・シェカル・ブラサッド, 『法華経の新しい解釈』ヒンディー語翻訳に着手。</p> <p>7月 本部, コルカタ支部ブッダガヤ法座設置を承認。</p> <p>7月 ブッダガヤ法座所開所式。ジテンドラ・クマール・ロイ, 主任辞令拝受。</p> <p>10月 本部理事会で, コルカタ支部新道場建設を承認。</p> <p>11月 コルカタ支部からバイシャリ・バルア, シーマ・バルア(海外修養科第24期生セジュティ・バルア母), ソナリ・バルア, サスミタ・バルア(国際奉職員シュモン・バルア妹), ジテンドラ・クマール・ロイ, ヨゲシュワール・ナンダン, 教師授与式参加のため訪日, 教師資格拝受。</p> <p>12月 中野泰秀, 国際伝道グループ次長に就任。</p> <p>* パラミタ・シェカルの翻訳, 国際伝道グループスタッフ三川依美吏(旧選名江身), 国際奉</p>
-------------	--	--

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

		<p>聞により「Living the Lotus」1月号（開祖随感・会長法話・部長コラム）・2～12月号（開祖随感・会長法話・家庭教育・部長コラム）発刊。</p>
2017	<p>2月 モヒンダ・バル, 南アジア国際伝道センター長 島村雅俊に西デリー法座の主任辞任を申し出。</p> <p>3月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 布教助成および北九州支教会インド（ガヤ）渡航（国際伝道支援プログラム）・第41回教会長インド仏跡参拝研修団受入のため訪印。デリー支部での教団創立79周年記念式典に12名参加。</p> <p>3月 デリー支部からアンシュ・チョウドリー, 学林海外修養科25期生として来日・入林。</p> <p>3月 デリー支部からブラカッシュ・クマールを含む2名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>4月 家庭教育研究所所長矢部和子, 所員鈴木克枝, 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 国際伝道グループスタッフ永末和子, 家庭教育講演会実施のため訪印。デリー支部での家庭教育講演会に約40名参加。</p> <p>7月 プラカッシュ・クマール, 本部と業務委託契約締結。</p> <p>7月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 布教助成のためデリー支部訪問。</p> <p>7月 シミ・ハンダ, 第8期リーダー教育（1年目）参加のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部・菅沼で8日間研修および, 板橋教会（教会長佐藤和代）で4日間布教実習。</p> <p>8月 シュモン・バルア全インド担当教務員, 布教助成のためデリー支部訪問。</p> <p>9月 デリー支部からブラカッシュ・クマールを含む2名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p>	<p>1～12月 本部, デリー支部に道場賃貸費（年間総額228,000ルピー）を支援。</p> <p>3月 コルカタ支部から ショウモ・バルア（国際奉職員シュモン・バルア末弟）, 学林海外修養科25期生として来日・入林。</p> <p>4月 国際奉職員シュモン・バルア, コルカタ支部長退任および, 全インド担当教務員辞令拝受。マヤ・バルア, コルカタ支部長辞令拝受。</p> <p>7月 本部, コルカタ支部パトナ法座設置を承認。</p> <p>8月 ヨゲシュワール・ナンダンを主任としてパトナ法座所開所。</p> <p>12月 教団創立80周年を期して, 今後20年間の指針となる新たな「教団基本構想」が打ち出される。</p> <p>12月 齋藤高市, 国際伝道部長に就任。竹谷祐市郎, 国際伝道グループ次長に再任。堀内謙次, 南アジア伝道区へ異動。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>9月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, シュモン・バルア全インド担当教務員, 布教助成のためデリー支部訪問。</p> <p>11月 シミ・ハンダ, デリー支部で研修会実施, 約15名参加。</p> <p>11~12月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 全インド布教幹部会議実施のため訪印。デリー, コルカタ, ガヤ3会場に分かれて全インド布教幹部会議開催, デリー会場に6名参加。</p>	<p>* パラミタ・シュカルの翻訳, 国際伝道グループスタッフ三川依美史, 全インド担当教務員シュモン・バルアの校閲により「Living the Lotus」1~8月号・10~11月号(開祖随感・会長法話・家庭教育・部長コラム)・12月号(開祖随感・会長法話・法華七論・部長コラム)発刊。</p>
<p>2018</p>	<p>3月 プラカッシュ・クマール, 教団創立80周年記念式典受入支援・本部での教育受講のため本部の渡航費支援を受けて訪日。</p> <p>3月 デリー支部から2名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>3~4月 家庭教育研究所所員鈴木克枝, 国際伝道グループスタッフ金尾江利子, 家庭教育講演会実施のため訪印, 全インド担当教務員シュモン・バルア同行。デリー支部での家庭教育講演会に約40名参加。</p> <p>5月 デリー支部から2名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>5~6月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 布教助成のため訪印。デリー支部幹部と団体登録について会合。</p> <p>7月 シミ・ハンダ, 第8期リーダー教育(2年目)参加のため本部の渡航費支援を受けて訪日。本部で7日間研修および, 板橋教会(教会長佐藤和代)で5日間布教実習。</p> <p>7月 デリー支部で独自に研修会実施, 10名参加。</p> <p>8月 全インド担当教務員シュモン・バルア, デリー支部で研修会実施, 8名参加。</p> <p>8~9月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 布教助成のため訪印, デリー支部で布教リーダー会議に8名参加。</p>	<p>1~12月 本部, デリー支部に道場賃貸費(年間総額246,000ルピー)を支援。</p> <p>3月 学林海外修養科24期生セジュティ・バルア, 卒林・インド帰国。</p> <p>* パラミタ・シュカルの翻訳, 国際伝道グループスタッフ三川依美史, 全インド担当教務員シュモン・バルアの校閲により「Living the Lotus」新年号(年頭法話)・1~6月号(開祖随感・会長法話・法華七論・部長コラム)・7~12月号(開祖随感・会長法話・法華三部経各品のあらましと要点・部長コラム)発刊。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>9月 デリー支部で中央デリー法座発足4周年の集い実施, 全インド担当教務員シュモン・バルアの研修に12名参加。</p> <p>12月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 全インド布教幹部会議実施のため訪印。ガヤ, コルカタ2会場に分かれて全インド布教幹部会議開催, ガヤ会場にデリー支部を含め9名参加。デリー支部団体登録について, 拠点長シミ・ハンダの職業上(国家公務員)の観点から一時凍結。</p>	
2019	<p>1月 シミ・ハンダ, デリー支部で研修会実施, 約20名参加。</p> <p>2月 プラカッシュ・クマール, 本部で開催された法人役員研修・インド会員練馬教会(教会長田爪希依)布教実習・菅沼参拝受入支援のため訪日。</p> <p>3月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, 仙台・横浜両教会インド(ガヤ)渡航(国際伝道支援プログラム)・北九州支教区インド(ガヤ)渡航(国際伝道支援プログラム)受入および布教助成のため訪印。デリー支部での研修会に約15名参加。</p> <p>3月 学林海外修養科25期生アンシュ・チョウドリー, 卒林・インド帰国。</p> <p>4月 家庭教育研究所所員青木敬予, 国際伝道グループスタッフ金尾江利子, 家庭教育リーダー教育・講演会実施のため訪印, 全インド担当教務員シュモン・バルア同行。デリー支部での家庭教育リーダー教育に約5名参加, 家庭教育講演会に西デリー会員を含む28名参加。</p> <p>5～6月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊, コルカタ会員特別総会実施および布教助成のため訪印, デリー支部での仏教学習会18名参加。</p> <p>7月 デリー支部から1名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>8月 デリー支部から2名, 南アジア国際伝道センター・バンコク教会で開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に本部の渡航費支援を受けて参加。</p> <p>9月 デリー支部で中央デリー法座発足5周年の集い実施。15名参加。</p>	<p>1～12月 本部, デリー支部に道場賃貸費(年間総額252,000ルピー)を支援。</p> <p>3月 学林海外修養科25期生ショウモ・バルア, 卒林。特別生として学林本科生を目指す。</p> <p>4月 コルカタ支部ブッタガヤ法座からアミット・クマール・ライ, 学林海外修養科27期生として来日・入林。</p> <p>* パラミタ・シェカルの翻訳, 国際伝道グループスタッフ三川依美吏, 全インド担当教務員シュモン・バルアの校閲により「Living the Lotus」新年号(年頭法話)・1～12月号(開祖随感・会長法話・法華三部経各品のあらましと要点・部長コラム)発刊。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

	<p>9～10月 プラカッシュ・クマール、勸請式での本尊拝受のため訪日、杉並教会（教会長國富敬二）で一日布教実習。</p> <p>10～11月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊、布教助成のため訪印。デリー支部での青年セミナーに11名参加。シミ・ハンダを含む8名が集い、民主的運営を企図した布教リーダー委員会結成、および団体登録手続きについて会合。</p> <p>11月 デリー支部会員7名、インド国内仏跡参拝実施。</p> <p>12月 プラカッシュ・クマール、バンコクで開催された現地教師資格拝受式に参加、教師資格拝受。</p> <p>12月 全インド布教幹部会議が各拠点での開催形態に変更、デリー支部でリーダー会議および青年部会議実施。</p>	
2020	<p>1月 デリー支部でリーダー会議実施、南アジア伝道区青年リーダー教育参加者の人選、および団体登録の準備について会合。</p> <p>2月 デリー支部で青年部会議実施、7名参加。</p> <p>2～3月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊、米国会員インド仏跡参拝研修団の受入および布教助成のため訪印。新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延により、予定していた日本からの団体渡航がすべてキャンセル。</p> <p>2月 デリー支部青年7名、街頭で「一食を捧げる運動」のリーフレット配布。</p> <p>3月 新型コロナウイルス感染拡大のためデリー支部道場閉鎖。</p> <p>5～12月 オンラインによる式典・法座等実施。</p> <p>5月 シミ・ハンダ、国家公務員を依願退職。</p> <p>12月 オンラインによる全インド布教幹部会議実施。</p> <p>12月 デリー支部会員5名、近隣の路上生活者に毛布を寄贈。</p>	<p>1～12月 本部、デリー支部に道場賃貸費（年間総額242,000ルピー）を支援。</p> <p>3月 コルカタ支部からスワルナディーブ・バクタチャリア、学林海外修養科28期生として来日・入林。</p> <p>4月 ショウモ・バルア、学林本科57期生として入林・国際奉職員として本部雇用開始。</p> <p>6月 チャンドラ・シェカル・プラサッド、『法華経の新しい解釈』ヒンディー語翻訳終了。</p> <p>12月 赤川恵一、国際伝道部長に就任。</p> <p>12月 パラミタ・シェカル、家庭教育テキスト『知っておきたい家庭教育』ヒンディー語翻訳に着手。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

		<p>* パラミタ・シュカルの翻訳, 国際伝道グループスタッフ三川依美吏, 全インド担当教務員シュモン・バルアの校閲により「Living the Lotus」新年号(年頭法話)・1～12月号(開祖随感・会長法話・法華三部経各品のあらましと要点・部長コラム)発刊。</p>
2021	<p>1月 プラカッシュ・クマール, 国際奉職員として本部雇用開始。</p> <p>1, 2, 3, 6月 シミ・ハンダ, オンラインセミナー実施。各回, 非会員を含め約60～70名参加。</p> <p>1～12月 オンラインによる式典・法座・学習会等実施。</p> <p>3, 4, 5, 8, 9月 国際奉職員プラカッシュ・クマール, 英訳『開祖さまに倣いて』をヒンディー語へ翻訳, 会員と共有。</p> <p>5月 2週間にわたり「コロナ感染者への病氣平癒祈願供養」実施, 平均参加者約5名。</p> <p>5月 デリー支部からシミ・ハンダ, バルティ・バトラを含む6名, オンラインで開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に参加。国際奉職員プラカッシュ・クマール, 事務局参加。</p> <p>9月 豪雨および冠水により, デリー支部道場一部浸水。</p> <p>10月 デリー支部会員, 第9回アジア宗教者平和会議(ACRP)東京大会にオンライン参加。</p> <p>10月 デリー支部から1名, オンラインで開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に参加。国際奉職員プラカッシュ・クマール, 事務局参加。</p> <p>11月 サクセナ逝去。</p> <p>12月 オンラインによる全インド布教幹部会議実施。</p>	<p>1～12月 本部, デリー支部に道場賃貸費(年間総額252,500ルピー)を支援。</p> <p>3月 コルカタ支部道場移転。</p> <p>3月 学林海外修養科27期生アミット・クマール・ライ, 卒林・インド帰国。</p> <p>12月 国際伝道部長赤川恵一, 兼任で国際伝道グループ次長に就任。</p> <p>12月 学林本科57期生ショウモ・バルア, 自己都合により退林・国際奉職員辞職。</p> <p>* デリー大学日本語学科教授アンビカ・パス, 国際伝道グループスタッフ三川依美吏と共同でヒンディー語訳『法華三部経』の日本語・ヒンディー語比較校閲に着手。</p> <p>* パラミタ・シュカルの翻訳, 国際伝道グループスタッフ三川依美吏, 全インド担当教務員シュモン・バルアの校</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

		<p>関により「Living the Lotus」新年号（年頭法話）・1月号（開祖随感・会長法話・体験説法・法華三部経各品のあらましと要点・部長コラム）・2～7月号（開祖随感・会長法話・法華三部経各品のあらましと要点・部長コラム）・8～12月号（開祖随感・会長法話・まんが立正佼成会入門・部長コラム）発刊。</p>
2022	<p>1月 国際奉職員ブラカッシュ・クマールを含む青年部員6名が中心となり、会員から集めた寄付金で防寒着類を購入・路上生活者等へ寄贈。</p> <p>1～9月 国際奉職員ブラカッシュ・クマール、英訳『開祖さまに倣いて』をヒンディー語へ翻訳、会員と共有。</p> <p>1～10月 オンラインによる式典・法座・学習会等実施。</p> <p>1, 4, 7月 デリー支部布教委員会開催。</p> <p>2, 4月 シミ・ハンダが中心となり、オンラインセミナー実施。各回、非会員を含め約80名参加。</p> <p>3月 国際奉職員ブラカッシュ・クマール、オンラインで開催された南アジア伝道区国際奉職員教育（英語コース）に参加。</p> <p>3月 国際奉職員ブラカッシュ・クマール、世界26カ国以上が参加した「ウクライナ紛争平和祈願ならびに犠牲者慰霊のための通読供養」に、デリー支部を代表して導師として参加。</p> <p>3月 デリー支部から1名、オンラインで開催された南アジア伝道区青年リーダー教育に参加。国際奉職員ブラカッシュ・クマール、事務局参加。</p> <p>4～5月 南アジア国際伝道センター長島村雅俊、布教助成のため2年ぶりに訪印。</p> <p>6月 デリー支部から4名、オンラインで開催された南アジア伝道区布教リーダー教育に参加。国際奉職員ブラカッシュ・クマール、事務局参加。</p>	<p>1～12月 本部、デリー支部に道場賃貸費（年間総額252,000ルピー）を支援。</p> <p>3月 学林海外修養科28期生スワルナディーブ・バクチャリア、卒林・インド帰国。</p> <p>12月 コルカタ支部ブッダガヤ法座のバリ・クマール・パスワン、デリー支部道場で開催される現地教師資格拝受式で、教師資格拝受予定。</p> <p>* パラミタ・シュカルの翻訳、国際伝道グループスタッフ三川依美吏、全インド担当教務員シュモン・バルアの校関により「Living the Lotus」新年号（年頭法話）・1～10月号（開祖随感・会長法話・まんが立正佼成会入門・部長コラム）発刊。</p>

インド・デリーにおける立正佼成会の展開

6月	デリー支部から5名、オンラインで開催されたインド布教委員会会議に参加。
7月	デリー支部から6名、オンラインで開催された全インド布教幹部会議に参加。
8月	「世界高齢者の日」を受け、近隣の高齢者福祉施設に食材を寄贈。
8月	南アジア国際伝道センター長島村雅俊、布教助成のため訪問。女性の地位向上を啓蒙するNGOで仏教研修会実施、デリー支部団体登録に関して定款説明会実施。
8月	本部、デリー支部団体登録化承認。
9月	団体登録に向けて、設立趣意書・定款をデリー官庁に提出。
12月	シミ・ハンダ、バルティ・バトラ、デリー支部道場で開催される現地本尊授与式で、それぞれ本部勧請の本尊再勧請・新規勧請予定。
12月	シミ・ハンダ、バルティ・バトラ、デリー支部道場で開催される現地教師資格拝受式で、教師資格拝受予定。

【注】

- (1) 布教史年表に出てくる立正佼成会の本部関係者の氏名表記（選名、命名）に関する事項。氏名表記は、立正佼成会内で通例用いられている選名または命名で記載している。佼成会では、五行・画数等を考慮した姓名鑑定に基づく名前を信者に付与しており、選名は本名とは別に授けられた名前、命名は出生時に授けられた本名をいう。
- (2) 海外拠点の段階的区分と拠点責任者に関する事項。
2005年以降の海外拠点の呼称は、成長過程に応じてグループ、法座、支部、教会に区分されている。基本的にグループまたは法座の段階から拠点が設置され、支部、教会へと昇格していく。なお、支部以下の拠点は本部や伝道区等の直轄拠点となる。また、拠点責任者の呼称はそれぞれ、グループ長、主任、支部長、教会長となる。
- (3) 立正佼成会では12月から翌年11月までを年度区分とし、通例教団内の組織改編や人事異動は12月に行われる。
- (4) 2016年4月より教団内で額装本尊という表現が改められ、現在では教会勧請本尊という呼称が使用されている。

【謝辞】

本稿を執筆するにあたっては、立正佼成会でデリー布教とかかわりをもつ多くの方々にお世話になった。ここにお名前をあげて謝意を表したい（五十音順、敬称略）。

有富教順（元国際伝道本部委託布教師，元バングラデシュ教会長），尾島由季子（元国際伝道本部スタッフ），小柳和央（習学部教育グループスタッフ），齋藤光央（元南アジア伝道区長），島村雅俊（南アジア国際伝道センター長），鈴木秀宜（国際伝道グループスタッフ），萩原透公（練馬教会長，元国際伝道本部次長），水野晃三郎（元国際伝道本部委託布教師），サビトリ・カプール（シトゥー，旧姓ベルマ，元デリー支部会員）。

2013年3月のデリーでの調査：ブラデーブ・サクセナ，モヒンダ・パル，アミット・クマール，ほか西デリー法座の人々。

またインドでの現地調査の時には，三浦志都代氏（元国際伝道本部スタッフ）が同行してくださった。

島村氏は2008年からインド担当であるが，デリー布教についての詳細な情報をご教示くださり，筆者の多くの質問にも丁寧な回答をいただいた。また，インド在住のシミ・ハンダ氏にもタイから電話で聞き取りを行ってくださった。鈴木氏には膨大な時間をかけて資料を探索し，事実の裏付けを担う資料を発掘していただいた。また論文末の年表および写真も鈴木氏の綿密な作業の賜物である。

板橋教会会員で，その後もインドの布教支援を担った尾島氏，有富氏，水野氏にはデリーの当時の状況について聞き取りをさせていただいた。萩原氏は国際伝道本部時代にインド関係の出張報告を多く執筆されておられるが，それへの補足調査に対応していただいたうえに，シトゥー氏とのZoomによる2回の聞き取り調査を設定してくださった。出張報告はいわば「点」での報告であるが，シトゥー氏からDDC及び西デリー法座についてインド人からみた視点と事実確認ができたことはありがたいことだった。小柳氏には青年の時に2回にわたって板橋教会のインド布教支援ミッションに参加した時の話を聞かせていただいた。齋藤氏は板橋教会長，南アジア教会長，南アジア伝道区長としてインド布教にかかわられたが，質問に対して書面で回答してくださった。本稿は多くの方のご助力により可能になったもので，記して感謝申し上げる次第である。

2013年3月のインド現地調査は，平成24（2012）年度科学研究費補助金（基盤研究C）「日本宗教の異文化布教に関する社会学的研究」（研究代表者：渡辺雅子）によるものである。